

---

# バカとテストと万能演人（オールアクター）

那家乃ふゆい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと<sup>オーラルアクリ</sup>万能演人

### 【NZコード】

N9450P

### 【作者名】

那家乃ふゆい

### 【あらすじ】

人とはかなり変わった能力『変身』を持つ少年、五月雨<sup>さみだれ</sup>愛斗<sup>まなと</sup>。

これは、そんな彼と彼を取り巻く仲間たちが織りなす、日常痛快学園ラブコメです。

第一問 物語の始まりは大体どの作品でも同じような感じ（前書き）

新作です！ まだまだいたらないといふもあるでしょうが、優しく見守ってください！

## 第一問 物語の始まりは大体どの作品でも同じような感じ

(化学) 問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めるに問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険である』  
合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目といつも掛け問題なのです  
が、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払つていなかつたこと』

教師のコメント

そこは問題ではありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（す／＼へ強い）

教師のコメント

す／＼強いと言われても。

五月雨愛斗の答え

『合金の例……超合金』

教師のコメント

ロケットパンチは男のロマンです。

俺達がこの文翔学園に入学してから一度目の春が訪れた。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇っています。

る。別に花を愛でるほど雅な人間でもないけれど、その眺めには一瞬目を奪われる。

でも、それも一瞬のこと。

今俺の頭にあるのは春の風物詩ではあるけれども、桜の事じゃない。  
俺の頭は今年一年を共に戦い抜いていく戦友と教室  
に新しいクラスのことで一杯になっていた。  
要する

「五月雨、遅刻だぞ」

玄関の前でドスのきいた声に呼びとめられる。声のした方を見ると、そこには浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツ然としたゴリラが立っていた。

「あ、ゴリ じゃなくて、西村先生。おはようございます」

軽く頭を下げて挨拶をする。危ない危ない。生活指導に向かつて思わず靈長類最強の生物を言つといひだつた。

「今、ゴリラって言わなかつたか?」

「いえいえ、気のせいですよ」

「ん、そうか？ それにしてもお前が遅刻とは珍しいな。何かあったのか？」

「いえ……彼女がなかなか行かさせてくれなくて」

「彼女？ お前そんなもんがいたのか」

「はい。五回も選択肢もやり直したんですよ……いやー、大変でした」

「……恋愛ショミーレーションもほびほびにな……。まあいい、ほら、受け取れ」

先生が箱から封筒を取り出し、俺に差し出してくる。宛て名の欄には『五月雨愛斗』と、大きく俺の名前が書いてあった。

「あ、どもっす」

一応頭を下げながら受け取る。

「五月雨、今だから言つがな」

「はい、なんすか？」

くそっ、この封筒なんでこんなに固いんだ？ いつなつたらいつそハサミで……。

「俺はお前を去年一年見て、『もしかすると、五月雨はアホなんじゃないか？』なんて思つてたんだ」

「それは大いなるミスですね。俺の点数でアホなんて思つてたら、更に『脳なし』なんて渾名をつけられちゃいますよ？」

「ああ、振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気づいたよ」

「やつですか。それはどつも」

鞄からハサミを取り出し、上の部分を切る。中には、一枚の紙が入っていた。

「喜べ五月雨。お前への疑いはなくなつた」

そこには以下記されていた。

『五月雨慶斗……全科目名無しひつき、Fクラス』

「お前は大アホだ」

こうして俺の最低生活が幕を上げた。

.....しへじつたなあ.....

第一問 物語の始まりは大体どの作品でも同じような感じ（後書き）

感想、アドバイス、お待ちしています。

**第一問 最悪はある意味全てにおいて最強（前書き）**

この主人公と、「バカテスの一存」の主人公は全くの別人です。

## 第一問 最悪はある意味全てにおいて最強

(国語)問 以下の問いに答えなさい。

『（1）得意なことでも失敗してしまひ」と『（2）悪ごと』が  
立て続けに起ひる』と  
『

姫路瑞希の答え

『（1）弘法も筆の誤り』

五円幽遊斗の答え

『（2）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（2）なら『踏んだり蹴つたり』や『弱り田に張り田』など  
がありますね。

土屋康太の答え

『（1）弘法の川流れ』

教師のコメント

『

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『（2）泣きつ面蹴つたり』

教師のコメント  
君は鬼ですか。

「……なんだこの教室は」

三階に上がりまして最初に目に入ったのは、信じられないほどバカで  
かい教室だった。おそらく、これがAクラスというやつだろう。こ  
こまで豪華だと、逆に暮らし辛そうな気もする。

「あら？ 爰斗じゃない。ビラしたのこんなところで

と、ここで一人の美少女が俺に話しかけてきた。

木下優子。俺の小学校からの幼馴染だ。肩まで伸ばしたふんわりとしたセミロングで、前髪をヘアピンで横に流している。そのかわいさは文用で一位を誇るであろう……異論は認めない。

「よつ、今日も元気そつだな」

「おかげさまでね。で、中に入らないの？ もちろん愛斗も△クラスなんでしょう？」

「え、つ」

優子の何気ない一言に全身の動きが止まる。優子は俺と同じクラスになるために死ぬ気で勉強を頑張ってきた。で、努力報われ△クラス入りとなつたんだが……肝心の俺はこのアリサマだ。

まずい……△クラスになつたなんてバレたら、俺は中国雑技団もビックリな軟体動物になつちまう。

優子は冷や汗を流す俺を見て、「まさか……」と優しく微笑みかけてくる。それヤメテ、逆に恐いから。

「まさか、振り分け試験でしぐじつたなんて言わないわよね？」  
「いやー、恥ずかしながら全科目無記名で△クラスになつちゃいました。テヘッ」

ダツ 僕が全速力でその場を立ち去る音

ガシツ その俺を優子が一瞬で捕える音

メキヨツ！ 僕のなにかが粉碎する音

「ぐわやああああつ！！」

「愛斗のバカ！ せつかく一緒にクラスになれるかと想つたのにこ  
いいいつ！！」

「スンマセン！ だから俺が新世代の人類になる前に手を離してえ  
ええつ！」

「あ……あ……危うくターミネーターもビックリの体になるとい  
うだった……。

「まったく……相変わらずなんだか……」

「返す言葉もございません」

「もういいわよ。そのかわり今日の放課後に駅前のクレープおいで  
てもらひうから、いい？」

「ちよつ、それは俺の小遣いが……」

「い、い、わ、ね？」

「姫様の仰せのままで」

「よろしい。じゃあ早く行きなさい。みんな待ってるわよ

じゃあね、と手を振つて優子が教室に入つていぐ。俺の財布に深刻  
なダメージを「えて。

「……じゃあ行きますか？」

俺は我らが級友たちの待つ、Fクラスへと足を進めた。

「失礼しますつ、坂本雄一と吉井明久は死んだ方がいいと思つ

「「急に…？」」

俺のちよつとした悪ふざけに反応する一人の生徒。親友の坂本雄一と吉井明久だ。詳細は……メンドくさいから言わない。

俺はクラスメイトに挨拶しながら、雄一の前の席へと座る。

「おい」

とここで雄一が後ろから話しかけてきた。

「なに？ その『なんでお前がここにいるんだ？』的な顔は」「その通りだバカタレ。なんでAクラス候補のお前がここにいる？」「いや……なんか全科目名無しだったみたいでさ。やんなつぢやつよなー」

「……まあいい。戦力が増えるのは大歓迎だ。よろしくな、相棒」

「おー！ こちらこそな、相棒」

ガシツと雄一と腕を組む。こいつと知り合つたのは中学の時。『悪

鬼羅刹』の名で恐れられていたこいつとたまたま街でぶつかり、喧嘩することになった。お互い一歩も譲らない好勝負の結果は引き分け。それがきっかけでいつの間にか仲良くなっていた。そんなこんなで俺の親友の一人だ。

「あ、愛斗もFクラスだったんだ。今日からよろしくね」

俺にようやく気付いた明久が笑顔で近づいてくる。俺はニコッと笑い、優しく呟いた。

「ちつ、台所の黒光りかよ」

「違う！ 僕は決して『ゴキブリなんかじゃない！』っていうか、挨拶ぐらいちゃんとしてくれよ……」

「冗談だつてば。よろしくな、明久」

パンつと軽く肩を叩く。

吉井明久。この学園一のバカにして観察処分者だが、行動力と優しさ（雄二以外）は天下一品というよく分からぬ奴。高校生になつて俺が最初に知り合つた生徒で、今は雄二に続き俺の親友の一人となつてゐる。

そのとき、突然教室のドアが開き、冴えない風体の初老の男性が入ってきた。おそれらへーのクラスの担任だわ。

「えー、おはよー」やむこさん。一年F組担任の福原慎です。よろしくおねがいします」

先生は黒板に名前を書いたとして、やめた。チョークすら用意されてないのかよ……。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は用意されていますか？ 不備があれば申し出してください」

卓袱台と座布団つて……寺子屋より酷いだろ、コレ。

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入っていないですー」

と、クラスメイトの誰かが設備の不備を申し出る。

「我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の足が折れます」

「後で木工用ボンドで直してください」

「センセ、窓が割れてて寒いんですけど」

「わかりました。ビニールとセロハンテープを申請しておきましたよ

う

Fクラス……想像以上の魔窟だ。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね……廊下側の人からお願ひします」

「木下秀吉じや。演劇部に所属しておる」

ん？ だれかと思えば秀吉じやんか。優子の双子の弟だが異常にそつくりで、長年一緒にいる俺でさえ間違えてしまうほど。まあその度に優子に殺されかけているんだが……俺が。特技は声帯模写だ。

「…………土屋康太」

おっ、今度は康太か。ある商会を立ち上げていて、生徒達ではなくてはならない存在、土屋康太。かくいう俺もその商会の一員だったりする。

「…………です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」

と、ぼーっとしているうちに、また次の人。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は吉井明久を殴ることです」

誰だ？ こんなアブナイ趣味を持つ奴は？

「まろはるー」

笑顔で明久に手を振るのは、

「…………あう。し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

島田美波。ドイツからの帰国子女で、明久とのファーストコンタクトからなにかと絡んできている明久の天敵だ。

と、そんなこんなで明久の番となつた。軽く息を吸い、立ち上がる  
と、笑顔で言つた。

「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね」

『ダアア——リイ——ン——』

野太い声の大合唱。もちろん俺も参加した。

明久は苦笑いを浮かべながら席に着く。おそらく本当にそう呼ばれるとは思いもしなかつたのだろう。

「さて、次はあなたの番ですよ。五月雨君」

ありや、もう俺の番か。先生に促され、立ち上がる。さて、一体どんなアピールをしようかな。たくさんの人を作るためにも、俺が気さくなところをアピールしないとな。よしつ、軽いジョークでも入れていこう。

「コツと作り笑いを浮かべながら、俺は自己紹介を開始した。

「五月雨愛斗さみだれまなどです。特技は空手。趣味は……ゲームと読書です。で、最後に一言。『Aクラスの木下優子に手を出そうとした奴は全力で潰す』から。……今年一年よろしくお願ひします」

「…………はい」「

なぜだろ？ふむけて言つたつもりなのにクラスメイトの半数以上が俯いている。心当たりもあるのだろうか……早急に対処せねば。

その後もしばらくお前を告げるだけの単調な作業が続き、いい加減眠くなってきた頃に不意にガラリとドアが開き、息をちらせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

第一問 最悪はある意味全てにおいて最強（後書き）

感想をお待ちしております。

## 第三問 本当の悪氣とは人の為に動けるかどうかだと想つ

「あの、遅れて、すいま、せん……」  
『えつ?』

クラスメイト全体から驚きの声が上がる。そりやそりやう。俺だつて、事情を聞いてなかつたら同じ反応をしていた。

先生は騒がしくなるクラスをやんわりと収めながらその少女に話しかけた。

「ちよつと良かつたです。今日紹介をしていくといひなので姫路さんもよろしくお願ひします」

「は、はい! あの、姫路瑞希とこいあす。よろしくお願ひします」

「……」

小動物のように体を小さくする姫路。……かわいい。

「(ゾクウツ……)」

そつ思つた瞬間、背中に走る冷たい殺氣。やおつと廊下を見ると……。

「…………(一ノオオオオオツ……)」

我が幼馴染が額に青筋浮かべながら、良い笑顔で立つていた。

「.....( ﾂ ﾂ ﾂ )」

なんか言つてゐるのか？

ひたすらに口パクをする優子。不思議に思い、頑張って読み取ると。

「（あ、ん、た、あ、と、で、ほ、ん、と、う、こ、い、る、す、  
わ、よ~。）」

「（すこせんでしたつーー。）」

それでも許してくれないのか、優子は「いつかおいで?」と俺に向かって手招きをしてくる。

いくしかあるまい。

「せんせー、ちょっとトイレ行かせてくださいーーー」

ーあ、はい。構いませんよ」

先生の許可を貰い、廊下へと出る。そこには案の定修羅の氣を纏つた優子が佇んでいた。

「や、やあ優子。なんの用かな?」

「……あんたをつま姫路さんを見て鼻の下伸ばしてたでしょ?」

「さつせつせ。そんなことあるはずないでせい」せこませんか」

やばい……確実にバレてる。

「……本当?」

まだ疑つてくる優子。仕方ない、せつと教室に戻るためにも渾身の嘘で解放してもらおう。

「本当だつて。ただ……」

「ただ?」

「姫路の胸は巨乳だから良いなあ、って思つただけだつて」

「…………（ブチツ）」

しまつたあつ! 思わず本音が出てしまつたあつ!

「ふうん……そんなこと思つてたんだあ……」

「ちよつ、優子さん? 僕の腕を持つてなにをするおつむつでありますのですかな?」

「…………悪かつたわね」

「はい?」

「胸がちゅうちゅう悪かったわねええええっ……」

「あんぎやあああああああっ！」

腕がつ、腕が取れる！

「……ふん！ 放課後絶対にクレープ以外もおじりでもうわいかり……  
いいわね？」

「…………ぎよ、御意」

「ふん！」

パンスカ怒りながら、優子は△クラスへ戻っていく。

……た、助かったあ……。

想像していたよりは軽い罰で良かつた。てっきり冥府まで送られるものかと。

教室に戻ると、みんなすっかり談笑モードだったので俺は秀吉の席へと向かう。

「よつ、秀吉。一年間よろしくな

「なんじや、愛斗か。お主もアホじやのう。無記名で△クラス入りなんじやから……姉上ば」立腹だつたじやうつて

「いや、もう既に放課後クレープをおじりになつちまつた……

さつき教室を出たのもその続きだよ」

「……自業自得じやな」

苦笑氣味に笑う秀吉。昔からの付き合いなのでお互いの事はよく分かつてゐる。知り合いの多いこのクラスにおいても、一番話しやすい相手だらう。

「はいはい。そこの人達、静かにしてくださいね」

と、そのとき先生がパンパンと教壇を叩き、明久達に注意をした。

「あ、すいませ」

「

バキイツ パラパラパラ……

教壇がゴミ屑と化した。

「どんだけ最低な設備だよ……」

「まあこれがFクラスといつものなのじやね」

はあ……と一人で溜息をつく。なんかもう初日から嫌になつてきたり、大丈夫なのだらうか、このクラスは。

「雄一、ちょっとといい?」

それを見た明久は真剣な面持ちで雄一に声を掛けていた。

「ん、なんだ？」

「ここじゃ話しかけてから、廊下で」

立ち上がり、廊下に出る一人。

「あの二人はどうしたのじゃるつか？」

「さあ……ちょっと盗み聞きでもしていくよ」

「お主は……本当に相変わらずじゃな」

秀吉との話を止め、こいつと廊下へと向かう。二人はヒソヒソと  
なにかを相談していた。

「……なにが目的だ？」

「……姫路さんのためだよ」

「なんだ、やけに素直じゃねえか。どうしたんだ？」

「去年愛斗に言われたんだよ。『人に協力を頼む時は、そいつが信  
用できなくても本当の事を話すべきだ。そうしないとお互いの信頼  
関係は成り立たない』って。だから嘘はつかない。姫路さんのため  
に、Aクラスへの試召戦争をやりたいんだ。協力してほしい」

「……おいおい、今さらそんなよそよそしくすんなよ。俺はお前の  
マジな頼みを断るほど落ちぶれちゃいねえぞ？」それに、俺たつて  
Aクラスをぶつ壊してやろうと思つてたところだ

「世の中学力だけじゃないってことを思い知らせてやりたいの？」

「そのとおり。よく分かってるじゃねえか」

「まあね。伊達に一年も雄一の親友やつてるわけじゃないんだから」

なるほど……Aクラス相手に試召戦争か。おもしろい。

俺はバツと立ち上がると、雄一達の下へ向かつ。

「おーおーい、俺の事は除け者扱いか？」  
「酷いじやんか！」

不意に後ろから話しかけると、二人はビケヴァッヒ体を反応させる。

「あ、愛斗ー!? こいつがアーティスト…………」

「最初からだな。で、やるんだろう？」試合戦争。協力してやんよ」

そう言つて、右手を二人に突きだす。二人はポカーンと口を開けていたが、俺の言葉を理解すると慌てて右手を乗せた。

「じゃ、打倒Aクラスってことで……頑張るぞっ！」

21

氣合いを入れたところで、教室へと戻る。

「坂本君、後はキミだけですよ。お願ひします」

了解

先生に呼ばれて、雄一が席を立つ。ゆっくりと教壇に歩み寄るその姿はクラスの代表に相応しい貫禄を纏っていた。

「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺の事は坂本でも代表でも、好きなように呼んでくれ。…………さて、皆に一つ聞きたい」

# 力ビ臭い教室。

## 古く汚れた座布団。

## 薄汚れた卓袱台。

「Aクラスは冷暖房完備の上、リクライニングシートらしげ……  
不満は無いか？」

『『『大ありじやあつ！』』』

「おおっ！ わすがはFクラス。素晴らしいまでの魂の叫びだ。

「だらりっ。俺だつてこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『『そりだそりだ！』』

『『いくら学費が安いからつて、この設備はあんまりだ！』』

『『そもそもAクラスだつて同じ学費だろ？ あまりに差が大きすぎるー。』』

……そこまでの不満がよくもまあすぐ口に出していくな。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

級友達の反応に満足したのか、自身に満ち溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だが

これから戦友となる仲間達に野性味満点の八重歯を見せ、

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思ひ」

Fクラス代表、坂本雄一は戦争の引き金を引いた。

第三問 本当に頼れるとは人の為に動けるかどうかだと思います（後書き）

感想をお待ちしております。

第四問 勝利の鍵を握っているのは優秀な奴じゃなく案外落ちこぼれなバカ（謙

テスト勉強が……キツウウウイツ－－！

第四問 勝利の鍵を握っているのは優秀な奴じゃなく案外落ちこぼれなバカ

(英語) 問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

五月雨愛斗の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚だ。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

」

吉井明久の答え

「 　　　「 \* ?

」

教師のコメント  
できれば地球の言語で。

Aクラスへの宣戦布告。  
それはこの最低Fクラスにとつては雲を擱むよつた提案にしか思え  
なかつた。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

誰だ？ 最後の、姫路にラブコールを送った奴は？

「そんなことはない、必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

そんな圧倒的な戦力差を知りながらも、雄一はそう宣言した。

『なにを馬鹿なことを』

『できるわけがないだろ？』

『何の根拠があつてそんなことを』

みんなの否定する声が響き渡る。

「こいつらは……文句言つなら自分から動くつとしろよ……。

「根拠ならあるさ。」のクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃つている

こんな雄一の言葉を受けてクラスのみんなが更にざわめく。  
根拠か……まあ、普通に考えたらねえよな。学年最低グループなん  
だし。

「それを今から説明してやる……おい、康太。畳に顔をつけて姫路  
のスカートを覗いてないで前に来い」

「…………！」（ブンブン）

「は、はわつ」

姫路、今さら慌てたつて遅いと思うぞ？ そいつの機動力はサイバ  
○タ一並だから。  
つてか、流石に凄いな……あそこまで恥も外聞もなく低い姿勢から  
覗くなんて……。

「土屋康太。こいつがかの有名な寡黙なる性識者だ」  
（マッショーリー）

ムツツリーー。その名の通りムツツリスケベなのだが、その行動力で手に入る写真などは生徒間でも取引されている。男子からは恐怖と畏敬を、女子からは軽蔑を以て挙げられる。

『ムツツリーーだと……？』

『バカな、ヤツがそうだというのか……？』

『だが見ろ。あそこまでの明らかに覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……』

をい……感動するとこはそこなのか？ もつと別なとこで感動しそよ……。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。ウチの主戦力だ。期待している」

もし試験召喚戦争に至るとしたら、確かに彼女ほど頼りになる戦力はいないう。

だから明久。そんなほんわかな顔で姫路を見るな。変態か何かと勘違いされるぞ？

「木下秀吉だつている」

秀吉ははつきり言つてバカだが演劇部のエースだ。なにかと役に立つだつ。

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやつてくれそつな奴だ』

『坂本つて小学生の頃は神童とか言われてなかつたか？』

なにいつ！？ ケンカバカの雄一が神童！？  
マジかよ……落ちこぼれたな。

「それに……おい、愛斗。ちょっといつちに来い」  
「ほえ？ なんで俺？」

仕方なしに教壇の前へ。

「みんな、こいつはな……あの伝説の『萌えの王者』だ」  
『…………』

「おいつ！ ちょっと待て、なんだその中一病全開フルバーストな  
二つ名はつ！ 全然かつこよくねえし、つてか『王者』ってなんだ  
よー。誰基準なんだ！？」

「みんなもその名のことはよく知ってるだろう……」

「だあかあらあつ！ 人の話を聞けえつ！！！」

『萌えの王者』……その名の通り、オタクの頂点に登り詰めた男。ア  
ニメ、ゲーム、恋愛ショミレーシヨンをこよなく愛する伝説の男が  
こいつだというのか……』

「せつかく趣味まで隠してたのにあからさまに全部バラすなよ！  
頂点つて何！？ そんなモンになつた覚えは無いわあつ……」

俺の叫びをよそに、クラスの士気は確実に上がつていた。

「それに、吉井明久だつている

雄一がその名を出した瞬間……。

…………シーン…………

上がっていた士氣はどん底まで落ちた。

「ちょっと雄二ー！ どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさー 明らかに必要ないよね！ オチ扱いだよね！」

『誰だよ、吉井明久つて』

『聞いたことないぞ』

「ホラ！ せっかく上がりかけてた士氣が一気に下がっちゃってるしつて、なんでみんな僕を睨むの？ これは僕のせいじやないでしょっ！」

明久が涙目で叫ぶ。

そこからは観察処分者の説明があつたのだが  
もうおひ。

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはロクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すつこい大胆に無視された！」

あきらめる。お前の想いははずえつたに届かないから。

「皆、この境遇は大いに不満だろ？」

『当然だー！』

「ならば全員武器を取れ！ 出陣の準備だ！」

『おおーーーっ！…』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデスクだー！」

『うおおーーーっ！…』

「お、おー……」

異常な程の熱気に思わず吐き氣を催す。

「うええ……ムサ苦しい。これじゃ男子校となんら変わらない……。

「Dクラスの宣戦布告だが……」と、雄一が明久の方を向く。  
ふつ、明久に行かせるつもりか……しかし！ そんな面白がりうな役割を俺がしないわけがない！  
バツと手を上げる。

「雄一！ 俺が行こうじゃないか！」

「明ひ……は？ 愛斗、正氣か？」

「つたりめえよつー こんなおもしろいも

もとい、大役は

俺にしかできねえぜつ！

「ああ、いや、それならいいんだが……じゃあ、頼んだぞ」

クラスメイトの歓声と拍手に送り出され、俺は意氣揚々とDクラスへ向かって歩き始めた。

第四問 勝利の鍵を握っているのは優秀な奴じゃなく案外落ちこぼれなバカ（後

感想お待ちしています。

## 第五回 ねおつじもおまえを読むなこと逆に痛こ田を見ゆ（前書き）

今回はかなり短いです。

## 第五問 あまつにも空氣を読まないと逆に痛い田を見る

ガラツ

「たのもー！ クラス代表に話があつて来

「おおっ、綾斗じやんか。どうしたんだ？」「

「 綾斗？ どうしてここに……？」

Dクラスに入つて、まず俺の田の前に現れたのは、親友であり悪友の時雨 綾斗だつた。

成績良し、運動良し、顔良しのパーフェクト男子だが、俺と同じ趣味を持つオタクでもある。

無論、成績上位者のこいつがDクラスにいるはずがないのだが……。

「ああ、いや。テストの途中でどうやら寝ちまつたみたいでさ。んで、Dクラスつてわけ。まあ、別にこのクラスも楽しつっちゃ楽しいんだけどな。あつはつは」

快活に笑う綾斗。

マズイ……これは予想外だ。急いで雄一に報告しないと……！

とりあえずさつさと用事を済ませてしまおう。

「なあ、綾斗。代表に話があるんだけど、呼んでくれないか？」

「ん？ ああ、オッケー。おーい！ 源一、お前にお密さんだぞ！」

綾斗の声に何人かが一いつ朶ぱを振り向く。

そのうちの一人が頭に？マークを浮かべながら、歩いてきた。

「お前がロクラスの代表か？」

「そうだけど……何の用？」

「ふつ、聞いて驚け見て驚嘆しろ……。今日の午後、我々Fクラスは貴様らロクラスに試験召喚戦争を申し込む！」

……シン

え？ あれ？ なんでそんなにシラナた空氣に？ つて、その前の前！ 「何言つてんのコイツ」みたいな曰やめろ！ あまりの空氣に耐えられなくなつた俺はゆっくりと後ろを向くと、Fクラスへと走り出した。

『『『な、なにいいいいいいいいいいいい』』』

背後から聞こえた叫び声は、走り去る俺の耳にしつかりと刻まれた。

第六問 本当のコーダーとは言葉だけで仲間を安心せしむられる奴（前書き）

久しぶりです。

これらの小説はなかなか更新が遅りませんねえ……。 精進せねば。

## 第六問 本当のリーダーとは言葉だけで仲間を安心せしむれる奴

「ただいまー」

「おお、愛斗よ。無事じゃつたかの？」

教室に入ると、秀吉が心配そうに俺の方に歩いてきた。

「ああ、大丈夫。なんともないさ。それより……雄一ー」

「なんだ？ 僕になんか用か？」

キヨトンとした顔でこちらを向く雄一。こいつは……俺がロクラスに行つてたこと忘れているんじやねえのか……？  
ふつふつと沸いてくる怒りを必死に抑えつけ、雄一に綾斗のこと

を報告する。

「ロクラスに時雨綾斗がいた」

「なんだと？ ……分かつた。情報ありがとな」

そういうと雄一は明久達に声をかけ、外に出て行つた。肝心の明久は、ムツツリー二人でウダウダと話し込んでいる。

「ほら、吉井。アンタも来るの」

と、そんな明久をぐいっと島田が引っ張つた。明久の奴……明らかに話し合いを拒んでいるな。

「あー、はいはい」

「返事は一回ー」

「へーい」

「……一度Dasbrechen

ええと、日本語だと…

…」

Dasbrechen? ドイツ語か?

「……調教

近くから聞こえるムツツリーーーの声。いや、だからなんでそういう単語だけ知っているんだ、おまいは。

「そう。調教の必要がありそうね」

「島田。せめて教育とか指導つて言つてやらないか? 明久が間違いなく死ぬから、ソレ」

「じゃ、中間とつてZusammenarbeit

」

「…………それは分からない」

普通そうだな。

「確かに、日本語だと折檻だつたかな?」

「それ悪化してるよね」

「そう?」

「なんでもろくに漢字も読めないのにそんな単語だけ知つてんだよ…

…」

「……こいつを調教してやるべきではなかろうか。

「といふかムツツリーーー。なんで『調教』なんてドイツ語を知つているの?」

さつき俺も思つたことを明久がムツツリーーーに尋ねる。彼は、ふ

つと笑つと言い放つた。

「……一般教養」

「よし、ムツツリーー。お前は間違いなく変態確定だ。」

そんな会話をしながら校内を歩いていると、先頭の雄一が屋上の扉を開き、太陽の下へ。春風と共に訪れた陽光に、スカートを凝視しているムツツリ野郎を除いて、俺達は全員が田を細めた。

「愛斗。宣戦布告はしてきたな？」

「あ？ うん。一応今日の午後に開戦予定つて言つてきたぞ」

「それでは、先にお昼御飯つてことかの？」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともなものを食べりよ？』

「そう思うならパンでも奢つてくれると嬉しいんだけど」

「いや、だからまともなもんを持つてくるとかできないのか、おま  
いは

「えっ？ 吉井君つてお昼食べないんですか？」

「いや、一応食べてるよ」

「……あれは食べてこるといえるのか？」

姫路が驚いたように明久を見る。まあ、普通はそうなるわな。昼  
飯食わねえ奴なんて珍しいし。

雄一がすかさず横槍を入れる。

「何が言いたいのさ？」

「いや、お前の主食つて

「

と、そこで雄一が言つてたくせつに口をつぐんだので、俺は残りの

言葉を続けた。

「水と砂糖と塩だな」

「失礼なつ！ ちゃんとオリーブオイルだつて食べてゐるぞー。」

「あの、吉井君。水と砂糖とオリーブオイルつて、食べるといふことを  
ませんよ……」

「舐める。が表現としては正解じやろ？」

みんなが妙に優しい田で明久を見る。「うう、あれは辛いだろ？  
な……。

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りが少ないんだよー。」

「それでも食費優先だろ、普通」

「う……そ、そういう愛斗だつて、仕送りを全部趣味に使つてている  
じゃないか！ 僕に言う資格ないだろつ。」

「いや、俺は優子の家で飯を食わせてもらひつているから、食費に關  
しては一切問題ない！」

「「「え、つー？」「」」

と、ここで場の空気が固まつた。ん？ 今俺なんかおかしなこと  
言つたか？

俺が頭に疑問符を浮かべてみると、意を決したように島田が口を開いた。

「ねえ五月雨

「なんだ？ なにか聞きたいことでも？」

「あ、いや、そうじやなくて……木下さんといふ飯を食べさせてもら  
らつているのよね？」

「そうだけど……それが？」

「それって……あなたよりするヒモっていじやないの？」

「…………え？」

「「「島田

」」」

つーーー あえて皆が言わなかつたことをなん

で堂々と口に出すんだあ

つーーー「

「え？ あれ？ 禁句だつたの？」

叫ぶ男性陣に、冷や汗を流す島田。こや、そんなこといつも今は

……。

「俺が…………ヒモ？」

俺がヒモであるのかどうかだ。

「ち、違つのよ五郎！ これは口が滑つて……じゃなくて、本音がポロっと…………つてあれ？」

「もつ君は喋るな！ 島田さんーーー」

「…………言われてみればそつだよな。ほほつ、なんだ俺ヒモだつたのか。男として最低の部類に入る、ヒモだつたんだ。そりや、優子が振り向いてくれるはずないよなあ…………こんなヒモに」

さあてつー こんなヒモ野郎人生とも早急にあらざんとしますかつ。

「落ち着くのじや愛斗ー なぜお主はフーンスの方へ歩いて行こうとするー？」

「なあ秀吉、知つてるか？ 人間でも、鳥みたいに空を飛べるんだぜ？」

「愛斗ー？ それは言葉通りの意味にとつていののかー？ そもそも、お主が死んだら姉上が悲しむのじやから、飛び降りはやめいつ！」

「氣休めはよしてくれ！ こんなヒモ野郎がいなくなつたといひで、悲しむのは工事現場のおっちゃんかアクション芸人ぐらいのものだろつ！」

「お主は一体いつから命綱にランクアップしたのじゃ！？ ヒモじやなかつたのか！」

「秀吉にまでヒモつて……！？ うわああああんつー もう死んでやるう！ 死んで優子の入浴タイムに化けて出てやるう！…」

「何氣に自分の欲望を吐露するでない！ だいたい、姉上はお主のことを嫌つてなどおらん！」

「え、マジで？」

「大マジジヤ！」

「…………」

「…………あやつ（はあと）」

「お主はやつぱり死にさらせえつ……！」

ドゴンッ 秀吉が俺を床へ叩きつける音

「ひでぶうつ……」

「うつ……この俺をここまで追い込むなんて……木下秀吉、恐ろしい子つ……」

「……じゃあ、バカが消えたところで話を進めるぞ」

「あ、あのつー サツキの話なんですけど、良かつたら私がお弁当を作つてきましょうか？」

「えつ、いいの？」

「はいっ、もちろんですっ」

明久が姫路の料理……男が好きな女に料理……俺が優子の料理！

「ふぬをおおおおおおお……かはつ」

「…………おとなしくしろ」

復活しかけた俺に、すかさずスタンガンを当てるマッソード。

「…………すいふ…………だけに…………」

「わか…………みなさ…………すね」

あれ？ なんか意識が……。

遠くなる意識の中、俺が最後に見たものは、決意を固めたクラスメイトの顔だった。

第六問 本物のコーダーとは葉だけで仲間を安心せしむる奴（後書き）

近々CLANNADの小説を書きますので、よろしくお願ひします。

## 第七回 ハーローは遅れてやつてやねに来たが、あれにて実際は準備が一

はい、どうも、ふゆこです。

いやー、やつと入れましたよ、試験召喚戦争編。なんでも今まで六話もかかったんでしようねw

で、それじゃあとひとと本編に向かうとしましようかね……。

## 第七問 ヒーローは遅れてやつてぐるり言ひなご、あれつて実際は準備が一

「で、俺達は何をすればいいんだ？」

Dクラスとの試合戦争が始まり、俺と姫路は別室で回復試験を受けていた。理由は簡単。一人とも、諸事情により無得点だからである。そんなわけで、長くなりそうだった回復試験も意外と早く終わり、現在俺達はFクラスで雄二からの支持を待っている。

雄二は、「そうだな……」と考え込むと、実にわかりやすい命令を下した。

「姫路はまだ教室にいてくれ。お前がFクラスにいることは、できるだけ秘密にしておきたい。愛斗は今すぐダッシュで明久達の援護に向かえ。そろそろみんなが疲労してきたころだろ? だからな」

「おう(はい)……」

雄二の指示通り、廊下へと出る。さて、行くとしますか?

『さあ来い! ここの負け犬が!』

『て、鉄人! ? 嫌だつ! 補習室は嫌なんだ!』

『黙れ！ 捕虜は全員、この戦争が終わるまでは補習室で特別講義だ！ 終戦まで何時間かかるか分からんが、たっぷりと指導してやるからな！』

『た、頼む！ 見逃してくれ！ あんな拷問耐えられる気がしない！』

『拷問？ そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わるころには趣味が勉強、尊敬するのは一富金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう』

『お、鬼だ！ 誰か、助けつけ イヤアア （バタン、ガチャ）』

……なんだこの地獄絵図は。

田の前で、Fクラスの仲間達が次々と補習室へと拉致されていく。

『イヤアア （バタン）』

『つぎやああ （ガチャ）』

「おつと、こんなところで呆然としている場合じゃない。明久達はいた！」

渡り廊下の中央で、明久は島田と共にいた。

「明久、島田、無事か！」

「愛斗！ 丁度良かつた。中堅部隊に伝えて欲しいことがあるんだ！」

「ん、何？ 作戦？」

明久の言葉に、島田が首を傾げる。島田、明久が作戦なんか立てるハズないだろ……。

明久は、いたつて真剣な顔で、言い放つた。

「総員退避、と」

「ここの意気地なし！」

島田が明久を殴った。目をチヨキで。……やつぱり。

「目が、目があつ！」

「目を覚ましなさい、このバカ！ あなたは部隊長でしきりが！ 脳病風に吹かれてどうするのよ！？」

「いや、その覚ますべき田に指を突っ込むなよ……。明久、すつげえ痛がつていいるぞ？」

「おーい、吉井！ 島田！」

と、ここのFクラスの報告係が。

「どうしたの？」

「島田！ 前線部隊が後退を開始したぞ！」

「総員退避よ」

「さつきの明久の鈍痛は何だつたんだ

「よし、逃げよう。僕達には荷が重すぎた」

「まだなにも部隊らしきことはやつてないだろ！？」

まずい、ここのままだとここのつらは撤退してしまつ。……特にここのつらが。ここのなつたら……。

「明久あつ！」

「なに？ 愛斗。僕もう退却しなきゃ

「今、ここので残つて戦えば、アニメキャラの戦つシーンが見られるぞ？」

「…………総員、突撃しろ

「え、ちよつ、吉井！？」

よし、とりあえずは作戦成功だ。ここで退かせるわけにはいかないんですね。

「見て、吉井！ Dクラスの奴ら、化学教師を引っ張ってきたわよ！」

島田の叫びで渡り廊下の奥を見る。そこには一年生化学担当の五十嵐教諭と布施教諭がいた。なるほど、一気に片をつけようつてわけか。

「島田、化学に自信は？」

「全くなし。60点台常連よ」

「明久は？」

「聞かないで……」

「IJの役立たずが。……仕方ない。このままIJはそり主任のところまで行くぞ」

「高橋先生のところね？ 了解！」

既に戦闘が行われている廊下で、目立たないよう隅へと移動する俺達。皆、見るがいい。これがFクラス中堅部隊主力隊の雄姿だ！

「あつ、そこにはもしゃ、Fクラスの美波お姉さま！ 五十嵐先生、じつに来てください！」

「くつ！ ぬかつたわ！」

Dクラスの清水に、島田が見つかってしまった。ヤバいな。このままじや三人揃って仲良く補習室送りだ。かくなるつえは……。

明久も、同じ結論に行き当たつたようで、叫んだ。

「よし。島田さん、ここは君に任せて僕達は先を急ぐよ。」

「わよひ……！　あんた達なに言つてんのよー？」

「頑張るんだ！　あと少し粘れば、愛しの秀吉がきっと助けに来てくれるから！」

「え？　それならいいかも……って、違うー。そういう問題じゃなくて普通は『』には僕達に任せた先を急げ！』じゃないのー。」

「「そんな台詞、現実世界じゃ通用しないー。」」

「」、このバカ共！　ゲス野郎！」

なんとも言つがいい。

「お姉さまー　逃がしません！」

「くつ、美春ー　やるしかあないつて『』とな……。」

五十嵐教諭から10M以上離れて、ゆうくつと島田の様子を伺つ。戦いは既に始まっていた。

## 第七回 ヒーローは遅れてやつてやつて、あれつて実際は準備が一

はい、今日は時間がないのでこゝまでとおちてもうこまか。

「こつにも増して、短すぎるのではないか? ヒサカは愚痴ります」

「む、なんだねチニは。某『バカ努力』を見て即興で配置されたヒサカ力10032号のくせに」。

「いえ、初めての顔見せなので、読者の皆さんに忘れられないような強い印象を作っているのですよ。ヒサカは心の内を明かしてみます。ぴーす。いえーい」

見事なまでの無表情つぶりだね……。ヒ、とつあえず、今日はもう時間もないのにここでお別れと参ります。

「ヒの小説を読んでくれる人に心からのお礼を申し上げます。ヒ、ミサカは心からお礼を申し上げます。……あれ? 口調がダブつちやいました。てへ」

「う……。ヒ、とにかく! また次回お会いしましょ!」

「感想なども待っています。ヒ、ミサカはしつと要求します」

「よーならーー!」

追伸: 五月十九日、「スーパー口ボット対戦」のヒのを、「アーメキヤラの戦うシーンに変更しました。

## 第七問 ヒーローは遅れてやつてやる、あれって実際は準備が一

久しぶりです。

まだまだ序盤なんですよねえ……頑張ります。

お知らせ：第七問（前編）の愛斗の台詞「スーパー・ロボット対戦が見れるぞ？」を、「アニメキャラのバトルシーンが見れるぞ？」に変更しました。

## 第七回 ヒーローは遅れてやつてくるひにかど、あれつて実際は準備が一

「 試験召喚! 」

島田の喚び声に反応して、足元に幾何学的な魔方陣が現れる。同時に、召喚獣が姿を現した。

長つたらしいのもアレなので、さうと説明させてもらつと、『軍服姿でサーベルを持つた島田美波』といつた感じだ。

「お姉さまに捨てられて以来、美春はこの田を一田千秋の思いで待つていました……」

「ちょっと! いい加減ウチのことは諦めてよ! 」

「嫌です! お姉さまはいつだって美春のお姉さんなんです! 『

「来ないで! ウチは普通に……お、『男の娘』が好きなの! 』

「それは絶対普通じゃないだろ! ……」

島田の失言に思わずツッコミを入れる。

このシンデレラーテール少女の島田美波は、今の言葉からも分かる通り、秀吉に好意を寄せているのだ。

一度本人を問い合わせてみたところ、明久にちょっとかいをかけているのは、秀吉の近くにいられるから……だそうだ。

んで、まあいろいろあって俺は一人をくつつけるためにアレコレやつてているというワケだ。秀吉は兄弟みたいなものだし、島田も友人だからな。……ぶつちやけ、面白そつだからといつのもあるが。

「こきます! お姉さま! 」

清水の召喚獣が剣を抜き放つて島田の召喚獣との距離を詰める。いよいよ戦闘が始まつたようだ。

「はあああつ！」

「やあああつ！」

正面からぶつかり合ひ、力比べが始まる。あひやー、真正面から行つたら……。

「えいやあつ！」

「きやつー！」

案の定、島田は清水によつて武器を落とされていた。あのバカ……点数低いんだから負けるに決まつてんだろ……。

「いじまですー！」

「くつ……」

そのままの勢いで島田の召喚獣が押し倒される。頭上には参考として一人に戦闘力が浮かび上がつていた。

『Fクラス 島田美波 VS Dクラス 清水美春  
化学 53点 VS 94点』

島田のヤツ、サバ読んでいたな。60点にすら届いてねえじゃんか。

「ああ、お姉さま。勝負はつきましたね？」

「い、嫌あつ！ 補習室は嫌あつ！」

「補習室？ ……フフッ。お姉さま、いの時間なうべッジは空いていますよ？」

「そ、五月雨助けて！」

「完全に退路を失ったボニー・テールが俺の方を向いて助けを請うてくれる。  
……はあ、面倒くさいからせりやうかと思つていたけど……助け  
てやるか。

「仕方ねえな……試験召喚」

足元に現れる俺の召喚獣。

格好にはこれといったものはない。上下は標準の学生服（学ラン）で、右手にはヒートホーク。両肩にはそれぞれシールドとスパイクアーマーが付いているだけだ。簡単に言つと『ザク装備の高校生』といった感じかな？

「なんですか？ その貧弱装備の召喚獣は」「おじおじ、貧弱とは言つてくれるじゃないか。……といあえず、構える。瞬殺してやつからよ」

「……美春とお姉さまの時間を邪魔した上に、随分とナメた態度ですね……後悔しても知りませんよー」

清水の召喚獣ががむしゃらに突っ込んでくる。俺はそれを、右肩のシールドでいなし、思いつきヒートホークを叩きつけた。

「おりやあつ！」「あやあああつー

為す術もなく切り裂かれる清水の召喚獣。

「な、なんで……ー？」「点数を見てみな

呆然とする清水に、俺は召喚獣の頭上を指差した。

|       |       |    |      |      |
|-------|-------|----|------|------|
| 『Fクラス | 五月雨愛斗 | VS | Dクラス | 清水美春 |
| 化学    |       |    |      |      |
| 198点  |       | VS |      | 41点  |
|       |       |    |      | 』    |

「なつ……！ 約200点！？」

「俺は文系だから化学は苦手なんだけどな……お前らみたいなロクラス」ときには負けないんだよ」

「この……！ 覚えておきなさい五月雨愛斗！ このままでは済むと思わないでくださいね」

（バタン、ガチャ）

鉄人に連行されていく清水を笑顔で見送る。隣では、島田も同じような笑顔で立っていた。

……さて。

「明久」

「は、はいっ！ なんでありましょうか隊長殿！」

柱の陰に隠れて何もしなかつた観察処分者の処遇を決めるとしよう。

少しばかりは予想していたのか、明久は素晴らしいほどの気を付けの姿勢で俺を見ていた。

「……言い残すことはないか？」

「ち、違うんだよ愛斗！ 僕も手伝おうとは思っていたんだよ？ でも、愛斗がすぐに倒しちゃつたから……ね？ 仕方ないんだって」

「……言い訳は終わったか？」

「……命だけは助けてください」

地面に額をこすり付ける謝り方

通称『D O G E N』

A』を披露する明久。毎度思うんだが『い』にはプライドというものはないのだろうか。

俺は「はあ……」とため息をつくと、罪人である明久に一つの命令を下した。

「んじゃ、お前は今から島田と一緒に秀吉の援軍に行つて『い』

「え？ そんなんでいいの？」

「ああ、ぶつちやけお前に折檻したところで戦局が変わるわけじゃないからな。だから、早く行つて来い。そろそろあいつらも消耗しているだろ？ から

「う、うん！ 行こい、島田さん」

「ええ！」

Dクラスの教室へと走つていぐ一人の背中を見送る。

一人が見えなくなつてきたとこりで、俺は背後へ向けて言い放つた。

「…………いい加減出てきたらどうだ？ 時雨綾斗とその部下たち？」

「…………ちっ」

舌打ちと共に、柱の陰から出でくる綾斗と数人のDクラス生徒。ひい、ふう、みい……ざつと五人つてところか。

綾斗は、肩を回しながら、俺を見ていた。

「…………よく俺達がここに隠れていのつて分かつたな」「まあねえ……さすがにそんなに大勢でいたらバレると思つんだけど」

「ふつ……それもそつか

試験召喚

『試験召喚！』

間髪入れずに入喚を開始する綾斗達。どうやら、戦いは避けられないようだ。

第七回 ヒーローは遅れてやつてやるって言ひたが、あれって実際は準備が一

いやあ、更新したー。

「結局、明久はアニメキャラのバトルシーンを見ていませんよ？  
と、ミサカは指摘します」

「ん？ ああ、あれはあくまで明久を引き留めるための方便だから。  
でも、まあ、アニメキャラのバトルシーンはありますよ。次回ぐら  
いに。」

「話は変わりますが、ある作者さんに指摘された、文章構成は直つ  
たのですか？ と、ミサカはあなたの努力を問うてみます」

「うーん、どうだろ？ 自分じゃよく分からんのだよね……。」

「……ダメ作者ですね、とミサカはあなたを軽く罵倒します」

「……頑張ります。」

感想、待ってまーす

第八問 あんなに大量のゲーセンコインを持つている御坂美琴って実はかなりの

こんには。

今回で愛斗と綾斗の秘密が明らかになります。

## 第八問 あんなに大量のゲーセンコインを持つている御坂美琴って実はかなりの

「はあ……できれば戦いたくないんだけどねえ……」

ため息をつきつつも、綾斗の召喚獣を見る。

上下を執事が着ているような燕尾服で固めていて、両手には某初代ガンダムのシールドとゲームサーベルを持っていた。やる気のない俺の姿を見て、綾斗は、気に食わない、という風な表情を見せる。

「なんだよその無気力っぷりはよ……それでもお前は『万能演人』か、ああん？」  
「まさか『主人公属性』にそんなことを言われるなんて、思いもしなかつたよ……」

お互いを一つ名で呼び合つ俺達。

その名を聞いて、綾斗の周りにいたDクラス生徒たちが、焦りの表情を見せた。

「『万能演人』に『主人公属性』だと……！？」  
「も、もしかして、あの、『変身能力』保持者のことか……？」  
「ウソだろ、おい……」

おー、さすがに一年もたつと知られてるもんだな。  
そう、俺と綾斗には昔から特別な能力があるのだ。それは……『  
変身能力』

名前の通り、自分の想像したキャラや人の、容姿や能力をそつくりそのままコピーするという能力である。

俺の場合は、男でも女でも変身することができる。が、なぜか綾

斗は主人公にしか変身できない。

ちなみに、俺と綾斗の他にも、後一人だけこの能力を持つ人がいたりする。まあ、この人については後々話すことになるだろうから、今は保留とさせてもらおう。

召喚獣の頭上に点数が表示される。

|       |                 |         |      |
|-------|-----------------|---------|------|
| 『Dクラス | 時雨綾斗 & Dクラス生徒五人 | VS      | Fクラス |
| 五月雨愛斗 |                 |         |      |
| 現国    | 426点            | & 平均98点 | VS   |
| 83点   | 』               |         | 4    |

うん、まあ、俺が言うのもなんだけど、綾斗の点数高いな……。  
綾斗は、口元に冷たい笑いを浮かべていた。

「やっぱ現代国語は十八番か？」

「まあね。逆にこれしかできないっていうのもあるけど」

「そうかい。……じゃあ、いくぜ！　『変身』！」

「つー？　初めから腕輪の能力を使うのかよ！　へ、『変身』！」

起動パワードを唱えると同時に、俺たちの体をまばゆい光が包み込む。

余談だが、俺たちの召喚獣の腕輪は、自分たちの能力と同じものに設定してある。しかも、召喚獣の変身と同時に俺達も変身することになるのだ。つまり、何が言いたいかといふと

「かかってこいよオ、格下ア！」

「そのキャラつていうのは、ちょっと卑怯なんじゃないのー？」

『の現実世界において、一次元キャラ同士の戦いが起つてしまふということだ。

卷之三

なんか後ろの五人がすっかり取り残されてしまっているが、そんなことはどうでもいい。

『私は目の前に佇む、『最強』に目を向けた。』

「ああが！」一矢嗚行なば一矢の縣のさだがた

「なんだア？ 何か文句でもあンのか第三位さんよオ」

綾斗が変身したのは、某禁書田録において『最強』の『一方通行』だ。ベクトルを操り、様々な物の向きを自由自在にコントロールする。

んで、私は『超電磁砲』の『御坂美琴』。電気とかを操るのが得意かな?

あ、ちなみに、なんで話し方が変わっているのかというと、この能力の副作用みたいなものなの。姿や能力をコピーする代わりに、口調がそのキャラと同じになるのね。だから、今の私はれっきとした『御坂美琴』という女の子なのです。

……さて、んじゃ、ひとつと始めますか！

掛け声とともに、体を回転させて回し蹴りを叩きこむ。普通なら、これで沈むんだけど……。

「甘エぞ格下ア！」

「ぬちやー、やつぱりムリかあ……」

一方通行のベクトル反射によって、傷一つ付けることはできなか

つた。逆にこいつちがダメージを受けていく。

『Fクラス

御坂美琴（五月雨愛斗） 483点

425点』

むう……このままじゃ一方的に自爆していくだけだなあ……。

まあ、しかし、今現在は為す術がないというのが現状だ。勝機が見つかるまで時間を稼ぐしかない。

「ほりほりア！ 逃げ回つてばかりじゃいつまで経つても勝てねエぞ……」

「ちつ！ 全く……相変わらずムカツク能力を使うわね、アンタ！」

一方通行の攻撃（空気のベクトルを変えて打ち出す、いわゆる『空気砲』）を避けながら、対策を練る。

どうする……ただこのまま逃げ回つても仕方がない。どうにかしてダメージを喰らわせないと……原作じや、どうやつてたつけ……。あ。

ザツ、と動かし続けていた足を止める。私の行動に、一方通行が首を傾げていた。

「なんだア？ まさか、もオ諦めて大人しくやられますなンて言う氣じやねエだろオなア？」

「そんなわけないでしょ？ ……アンタを倒す策が見つかったのよ」

「はつ！ 何だ何だ何ですかア？ 『超電磁砲』がこの俺に勝つだつてエ？ おいおい、冗談にしてはちょっとばかし笑えねエなア。そんなことができるなら……ほら、やつてみろよ。格斗ア」

「そう……だつたら、お望み通りやつてあげるわ！」

ポケットからコインを取り出し、指で弾く準備をする。

『超電磁砲』。私の必殺技ともいえる技だ。

フレミングの左手の法則によつて、弾を音速の二倍の速度で打ち出すことができる。

原作では、一方通行に對して何の効果も上げられなかつた技だが

……。

「喰らいなさい！」

コインを一方通行に向かつて弾く。放たれたコインは一発の弾丸となつて、一方通行に襲い掛かつた。

「いいねいイネエ！ 性懲りもなくそんなことやるなンて、見上げた根性だゼエ！」

一方通行は動かない。おそらく、自分の体に働いている『反射』で跳ね返すつもりなのだろう。

コインが一方通行に当たる。…………その瞬間。

コインが一方通行の鼻先でピタリと停止した。

「は？」

思わず間の抜けた声を上げる一方通行。それもそつだ。自分を攻撃するはずのコインが、急に行動をやめたのだから。しかし、私は笑つっていた。

「一方通行、ここでひとつ物理のお勉強です。物質が動く際には、必ずその方向に力が働いています。勿論、私が放つたコインも、放たれた方向、つまりアンタに向かつて力が働いています。さて、ここで質問です。動いていた物体が停止するときには、どちらの方向に力が働いているでしょうか？」

「つ！ まさか！」

「今頃気付いても遅いのよこのバカ！」

一方通行の召喚獣が、動き出したコインをもろに食らって地面に倒れこむ。

方向』だ。

一方通行のデフォルトは『反射』つまり、向かってきた物体のベクトルを反対の方向に跳ね返すということ。

簡単だ。

一方通行に向かって『反射』されるに決まっている。

私の攻撃を喰らつたことで、一方通行の頭上の点数が減つていた。

『Dクラス 一方通行（時雨綾斗） 426点 164点』

おー、これまた随分と減つたわねえ……。

第八問 あんなに大量のゲーセンコインを持つている御坂美琴って実はかなりの

感想、お待ちしています。

## 主人公紹介（前書き）

ここでは、主人公『五月雨愛斗』のプロフィールを紹介したいと思います。

## 主人公紹介

名前：五月雨愛斗さみだれまなと

年齢：十六歳

身長：165cm

体重：56？

外見：髪質のいい黒い髪を、男にしては少し長めにしている。簡単  
にいふと『吉井玲』の少し短い感じ。中性的な顔立ちだが、周りか  
らは普通に『男』として見られるレベル。中の上。

誕生日：七月十八日

備考：昔から、『変身能力』を持つており、自分の想像したキャラ  
や人間に変身できる。能力もコピー可能。

召喚獣：上下は標準型の学ラン。右肩にシールド、左肩にバイク  
アーマーを付けている。いわゆる『ザク』装備。武器はヒートホー  
ク、ザクマシンガン、ザクバズーカ。

腕輪：『変身』……自分自身と全く同じ能力。召喚獣が変身すると、  
同時に自分も変身するといつ付与条件が備わっている。

## 番外編 『小女神』と『万能演人』の日常（前書き）

いつも、ふゆいです。

本編が全く進んでいないような気がしますが、今回は「コラボです。  
相手はGAUさん作『バカと雲雀と召喚獣』です。

GAUさんに怒られないことを祈りつつ、書きました。  
それでは、どうぞ。

五月雨 SIDE

五月雨愛斗には、『変身能力』といつちよひとばかし

能力の詳細は、簡単に言うと『自分の想像したキャラや人間の姿、能力をコピーする』というものだ。

そのため、俺に『変身』を希望する依頼者も少なくはあるが、いる。

ちなみに、俺自身はそこまで嫌ではない。小遣い稼ぎにもなるし、アニメキャラに変身するのは意外と楽しいからな。……中性的な顔立ちのせいで、昔から女装させられてきた影響といつもあるが。そんなわけで、日常生活の中でも『女子』になる機会があるのだが……。

「うはー。せひぱつ金髪シンテールに限るにやー。シンテレ最高ー。」

「ね、ねえ五月雨、今度はこの服を着てみない？　ウチの家にあつたやつなんだけど……このゴスロリ」

じゃないけど、普通の男子にしては……うん！ 次はこのメイド服を着てみよう！

「だ、ダメですよー。五月雨君には」のナース服を着ても、うつんですからー！」

無理やり『女子』にならされて喜ぶような変態じゃねえっ！

俺は、俺を着せ替え人形のごとく扱っていた女子共に吼えた。

「教室に入った瞬間困まれて何をされるかと思つたら女装かよ！お前ら一体どういう趣味してやがるんだ！？俺みたいなヤツの女装見て嬉しいのか！ そういうのは秀吉と明久にでもやらせればいいじゃねえか！」

「明久君と木下君の女装は、見慣れているからいいんです！」

「それよりも、アンタの女装の方がよっぽどアリでしたよ。」

「大丈夫だよつ、まなつち！ちゃん」と種類は用意してあるからね

「そういう問題じゃねえ！ 大体、いつもならシシコミ役の支倉が、なんでこう一つ時に限って姫路やウエストロードと一緒に暴走してんだよー。」

1

畳に膝をついて、あまりの不幸に涙しているところに、突然ポンポンと両肩が叩かれる。

振り向くと、そこには、明久と秀吉がいい笑顔で俺を見ていた。

俺が頭に疑問符を浮かべていると、一人はこちらに向けて親指を

立ててきた。

「「ウエルカム（キリツ）」」

「なんだそのムカツクほど爽やかな笑顔とサムズアップは……！」

女装仲間が増えたことがそんなに嬉しいのか、こいつらは……。  
そろそろ色々なものが限界になつていた俺は、立ち上がり、叫んだ。

「『変身』…」

合言葉と共に俺の体が光に包まれる。  
『いつらから逃れるためには……』  
『トイツだ！』  
光が止み、俺の全身が露わになつた。

「…………え？」

支倉が、間の抜けた声を上げる。まあ、無理もないだろ？。

今、『あたし』が変身しているのは、『支倉ひばり』  
本人なのだから。

「いくわよ！ あたし！」

『本人』の手を掴んで、全速力で教室を脱出する。その際に、坂  
本君や土屋君とすれ違つたけど、そんなことは無視！

「あつ、ちよつ……えええええつ！？」

右手を掴まれながら、絶叫する『本人』を連れて、あたしは屋上  
へと走り出した。

「ふう……！」ここまで来れば大丈夫でしょ。…………『変身解除』

愛斗は屋上の扉にバリケードを作ると、『変身』を解いた。  
彼の隣では、ひばりが目を回してノックアウトされている。

「あ、あうう……」

「なにをそんなに疲れ切っているのやら……」

「し、仕方がないでしょう！？ あたしはそんなに運動が得意じゃ  
ないのに、五月雨君が学園中を走り回ったんだから…」

「あれはウエストロード達から逃げ切るために文句言つなんよ…

「つていうか、なんであたしを連れてきたの？ あたしも五月雨君

で遊んでた内の一人なんだよ？」

「んー、特にこれといった理由はないんだけどな……あえて言つな

ら

「

「言つなら？」

ひばりが首を傾げる。

愛斗は、その小動物のような仕草に苦笑しつつも、笑顔で答えた。

「なんとなく、お前と走り回つてみたかった、つてこいつとかな  
「つ！」

愛斗の子供のような無邪気な笑顔に、ひばりは思わず顔を真っ赤  
に染めた。

（あ、危なかった……アキくんに惚れてなかつたら、今まで五月雨  
君に惚れちゃつてたかもしれないよ……。べ、別にそこまで一枚目

じゃないくせに、なんでこいつとこりだけ格好いいかな、この人は……。優子ちゃんがゾッコンなのも分かる気がするよ……）

「ん？ どうした、支倉。顔が真っ赤だぞ？ 熱でもあるのか？」

「な、なんでもないよ！」

「そりか？ ならいいんだが」

疲れたー、と背伸びをする愛斗に気付かれないよう、ひばりはため息をつく。

既にHRは始まってしまっているが、途中から入るのもはばからるため、一人はしづらべ雑談をすることにした。

「ねえ、五月雨君」

「なんだ？」

「あのさ、五月雨君は、その……自分の『変身能力』のこと、どう思っているの？」

「また唐突な質問だな……。…………昔は、嫌だったぞ。これのせいで学校でも虐められるし、近所でもいきこいと言われてきたしな」「い、虐められてたの？」

「そりやなあ。自分とは明らかに違う奴がいるんだ。虐められない方が不思議つてもんだろ？」

「う、うん……」

俯きながら返事をするひばり。

確かに、今の愛斗の言葉は的を得ていた。

（五月雨君も、あたしと同じ……。望んだわけでもない境遇に苦しめられてきたんだ……）

「でも、自分と同じ境遇の奴に出会えたことで、気が楽になつたん

だ

「……時雨君のこと？」

「そう。まあ、三年生にも一人だけいるんだが……いや、今のは忘れてくれ

身震いしながら言ひ愛斗。その人物によつぱりのトラウマがあるのだろう。

ひばりは愛斗の願いどおり、その人物には触れず、話を促した。

「それで？」

「さつきも言つた通り、綾斗達に出会つたおかげで、俺は自分の能力を好きになることができたんだ」

「……そう、なんだ

「……支倉だつて、同じだろ？」

「え？」

愛斗の発言に、ひばりは思わず愛斗の顔をまじまじと見る。愛斗は、優しく微笑みながら、そつとひばりの頭を撫でた。

「明久や姫路、ウエストロード達と出会つたから、今のお前があるんだ。昔の支倉じゃない。周りの奴らに虐められていた、そんなんじゃない。みんなと仲良く笑つている、文月学園二年F組の支倉ひばりがな」

ひばりは、思わず言葉を失つた。

今の台詞を聞いたとき、確かに、心が暖かくなつたのを感じたからだ。

他の誰でもない、自分と同じ境遇にあつた愛斗の言葉だからこそ、ひばりの心に深く残つた。

(せっか、そうだよね)

よこしょ、と語つてひばりが立ち上がる。愛斗もそれに続いた。

「そろそろ戻るつか

「せうだな。早くしないとFFF団に余計なことをされかねん

「よしー、じゃあ、行こー！ 五月雨君ー！」

「おー！」

(あいがとう、五月雨君)

その歎きは、誰にも聞かれることなく、春の風に攪われていった。

「さひばだつ！」

『あー、異端者が逃走したぞ！』

『絶対に逃がすな！ 我らのコトルガラデス小女神を誑かした罪を後悔させてやるのだ！』

『『『ラジヤー！ サーチアンドテヒヒヒヒヒスッ！』』』

「須川あああああああつ！..」

教室に入った途端、FFF団に囲まれた愛斗は、一心不乱に教室を飛び出した。その後をFFF団員達が追いかけていく。

それを見て、いつものFクラスの日常を見て、ひばりは本当に楽しそうに笑っていた。

「どうしたの？ ひばり

「アキくん。やつぱり、みんなと楽しくできるのってこののは幸せだね！」

「？ う、うん。そうだね」

「フフッ……」

「？ ……ま、いつか。ひばりが楽しいなら、それで」

何故か微笑み続けるひばりに軽く首を傾げる明久だが、どうでもよくなつたらしく、優しい表情でひばりを見つめていた。

そこには、様々な思いを持った者達が、今日も楽しく過ごしている。

文月学園第一学年Fクラス。



番外編　『小女神』と『万能演人』の日常（後書き）

どうでしたか？　ひばりのキャラが崩れていなかどうかが心配です。

G A Uさん、お叱りは感想にて聞きますのでどうかご勘弁を

！！

第九問 「禁書田録」最終巻の一方通行さんはマジで泣きました（前書き）

どうもです。

今回はなんかいろいろとグダグダな感じですが……見逃してくれる  
と嬉しいかな？

それではどうぞ。

## 第九問 「禁書目録」最終巻の一方通行さんはマジで泣きました

「て……めH……」

息も絶え絶えに起き上がる一方通行（時雨綾斗）。なぜか本人がダメージを受けているんだけど、これは私達の能力の付与効果みたいなもの。

姿がシンクロしているのと同時に、召喚獣の操作も、ある程度影響しているって言えばいいのかな？ ようするに、『変身能力』を持つた『観察処分者』みたいな感じ。物質干渉もできるしね。

と、まあ、そういうわけで、私の『超電磁砲』を召喚獣にモロ喰らった一方通行は、フィードバックを受けたってこと。ま、私達も本体同士で超能力使ってドンパチやってるんだけどね。

「あら、さつきまでの余裕はどうしたの？ もしかして最初っから虚偽脅しだったとか……」

「雀みてえにピーピー<sup>転</sup>つてンじやねエぞ、第三位！ まぐれ当たりが一回成功したぐらいで良い気になつてンじやねエだろオナア！」  
「アンタもよく吠えるわねえ……。原作での『木原神拳』の原理を応用したの。それなのに、また同じ技に引っかかったのね。第一位置が笑わせるわ。何が『最強』よ。どれだけハイスペックな演算能力積んでも、学習能力がゼロスペックなんじゃ、ザコも同然ね」

「…………てめH……」

虫をも殺せそうな眼力で睨んでくる一方通行。おー、こわいこわい。

「……まあいい。とにかく今からそのおしゃべりな口をズタズタに引き裂いてやるからよオ……覚悟しやがれ」

「ふうん……何? どうやら『黒魔』だしね? そんなのまへん食飽めたつひの」

絶叫。

それに伴って、一方通行の背中から、爆発的に黒い翼が広がった。一気に伸びあがつた翼が、壮絶な武器と化して私へと振り下ろされる。

「十五分」

—あ、ア？

その瞬間、天井を覆い尽くせんとばかうに広がっていた翼が、  
のように消滅した。……彼自身のタイムリミットによつて。

「何だと？」

「アンタ、自分の能力の制限時間ぐらい覚えておきなさいよな。十分、もう経っちゃったわよ?」

「もしかして、忘れちゃったの？」  
「制限時間？」俺には、そんなもの

私は、状況が掴めていない一方通行を小馬鹿にするように一瞥す

ると、言った。

「アンタは十五分制限の一方通行にしか変身できなーってことを」

そう。『時雨綾斗』は、『制限付き一方通行』にしか、変身できないのだ。それは昔、綾斗自身がそう決めたから。「一番制限の短いバージョンの方が、カッコいいじゃん」と言って、自分に制限をかけたからだ。

それを、どうやら『イツ』は忘れていたようである。

「んじゃ、まあ、能力の使えない第一位をなんには、ひとつと補習室にでも行つてもらうとしますかつ……吹つ飛べー！」

「グ……」

『Dクラス 一方通行（時雨綾斗） 164点 0点』

点数がゼロになる。それと同時に戦闘が終了したため、俺と綾斗の変身は解除された。ちなみに、さつきまで近くにいたDクラス生徒五人は、綾斗の黒翼に巻き込まれて戦死したようです。ご愁傷様。

「はあ……勝てると思つたんだがなあ……」

「ま、俺の作戦勝ちということだね。お疲れ様」

「けつ、相変わらず嫌な性格してんな、お前。……それじゃ、

俺は行くよ

「おうつ、精々補習を頑張つてこいよ！」

「ふん……」

鉄人に連れられて補習室へと向かう綾斗。ふう……まあ、なんとか勝てたな……。

「よし、俺も前線部隊の援護に向かうとしますかつ

第九問 「禁書田録」最終巻の一方通行さんはマジで泣きました（後書き）

ふう……。

「なにをそんなに疲れているのですか？　ヒサカは素直に疑問をぶつけてみます」

あ、久しぶりだね。御坂妹。

「はい。かれこれ一か月ぶりです、ヒサカはあまりの酷い扱いに思わず涙します。うえーん」

涙流さずに声だけで泣かれてもねえ……。「メンメン。高校が始まってから忙しくて、時間がなかつたんだよ。

「……もう、いいです。それよりも今回のおわりをしましょ」

ん、それもそうだね。

「今回は一方通行が悲惨でしたね、ヒサカはボテトチップス片手に述べます」

「急に不真面目モード全開！？　俺的には、もうちょっとビデオかしようと思つてたんだけど……いやー、戦闘描写つてむずかしいですね。

「何を今更……と、ヒサカは呆れてため息をつきます。はあ

ま、とりあえず今回も無事に更新できたからよしとしてよ。

感想はいつでも大歓迎です。コラボもよければ是非やらせてください。

それでは次回

## 第十問 バカにはバカなりの戦い方があるー（前書き）

「んにちは。テスト期間真っ最中のふゆいです。  
現代社会め、我を謀りおつて……！」

## 第十問 バカにはバカなりの戦い方があるー

【現代社会】問 以下の問いに答えなさい。

『1995年に提唱された、資源の使用効率を高め、廃棄物がゼロになることをめざすという構想の名称を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『ゼロエミッション』

教師のコメント  
よくできました。

五月雨愛斗の答え

『循環型社会推進構想』

教師のコメント

循環型社会推進基本法が混ざってしまったのでしょうか？ しつかりと覚えておくようにしました。

吉井明久の答え  
『サブミッション』

教師のコメント

島田さんの関節技はキレが鋭いですね。

これまでのあらすじ！

綾斗との戦いに勝利した俺、五月雨愛斗は、前線部隊の援護へと向かった。しかし、既に前線部隊は撤収した後であつたため、俺はFクラスへと足を進めたのであつた……。

教室に戻ると、明久が何故か両手に凶器を持ったまま、雄一と話していた。

「どうしたんだ？ 明久。そんな物騒なモノ持つて

「あ、愛斗じゃないか。無事だつたんだね？」

「まあな。……で、何してるんだ？」

「うん。それなんだけど……雄一、愛斗、須川君がどこにいるのか知らない？」

ひきつった笑顔で、須川の所在を求める明久。もしかして、さつき流れた放送の件だらうか。船越先生を呼ぶためのあの放送。そんな明久に対し、雄一はあつけらかんと返事をしていた。

「もうすぐ戻つてくるんじゃないかな？」

「そりなんだ……やれる、僕なら殺れる……」

「殺るなっての」

「お前ら、字が違わないか?」

マズイ、このままでは須川が廃棄物と化してしまつ……。  
しかし、そんな俺の予想は、一瞬で外れることとなつた。

「ちなみに、だが」

雄二がニヤニヤしながら明久に話しかける。コイツ、まさか真犯人なんじゃ……。

「あの放送を指示したのは俺だ」

やつぱりか!

「シャアアアアアアツ！」

明久が鋭く踏み込みコンパクトに包丁を突き出す。どうやら、狙いは避けにくく致命傷になりやすい肝臓のよつだ。右手の即席ブラックジャックを死角となる雄二の頭上から つて、ちょっと待て！

「落ち着け、明久！」

「離して愛斗！ 僕にはこのバカの命を刈り取るといつ使命があるんだ！」

「そんな訳のわからない使命があつてたまるか！」

「よし。じゃあ俺達はロクラス代表の首でも取りに行くとするか」

「そうじやな。ちらほらと下校している生徒の姿も見え始めたし、頃合じやうつ」

「…………（「ク「ク）」

「おっしゃー、決着をつけに行くぞー！」

『おっひー..』

「あ、」「クー、俺を見捨てて行くんじゃねえー..」

「逃がすか、雄一ーいつー..」

「お前は落ちつけー！」

無情にも、教室から出でていく仲間達。くそぅ……なんで俺が殺人未遂の現行犯を取り押さえねばならんのだ……。

教室から、人の気配がなくなつたところで、俺は明久の腕を離した。

「お前なあ…………少しは自分の感情を抑える努力をしろよ…………」

「なんで？ 悪いのは雄一ーじゃないか！」

「それはそうだけども…………ってか、そんなことで一々キレていたら、お前は卒業するまでに何回警察のお世話になると思つてんだ？」

「つ……それは…………」

「とりあえず、凶器は使つた。雄一に制裁を加えるのはいいとして、殺したら元も子もないだろ？..」

「…………分かつたよ

「なら、よし。んじゃ、俺らも平賀を打ち取りに行くとしようぜ」

「…………うんー..」

やつとこを落ち着いた明久を伴い、渡り廊下へと向かつ。すると、下校中の生徒に混じつて戦闘を行つてゐる両軍の光景が目に入った。

「下校している連中にうまく溶け込めー、取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」

雄一の声が戦場に響き渡る。

「そつちから回り込め！俺は『トイツ』に数学勝負を申し込む！」

「なら、俺は古典勝負を

「日本史で

『

うちのクラスの皆がDクラスの連中を取り囲んでいる姿がそこら中に見て取れる。下校中のドサクサに紛れて敵に近づき、取り囲んで討ち取るという姑息な作戦だ。

『Dクラス塙本、討ち取つたり！』

一際大きな歓声が上がる。

先ほどから苦労させられていた塙本をうまく討ち取ったようだ。各クラスのHRも終わり、先生たちを捕まえやすくなつたおかげもあって、この作戦はうまくいっている。

「援護に来たぞ！もう大丈夫だ！皆、落ち着いて取り囲まれないよう周囲を見て動け！」

どうやら、Dクラス代表の平賀源一の登場のようだ。

「Dクラスの本体だ！ついに動き出したぞ！」

うちのクラスの誰かの声が聞こえる。

これでこの廊下には双方の主戦力が集つてになるな。

「本体の半分はFクラス代表坂本雄一を獲りに行け！他のメンバ一は困まれている奴を助けるんだ！」

『おおー！』

平賀の号令の下、あつという間に雄一の周りがDクラスメンバーで囲まれた。

雄一も自分の周りに本隊がいるからそつそつやられはしないけど、こうなつてくると戦況はかなり厳しいだろ？

「Fクラスは全員一度撤退しろ！ 人ごみに紛れて攬乱するんだ！」

相変わらずよく聞こえる雄一の声。

確かに状況はよくない。ここは一度退くべきだろ？

「逃がすな！ 個人同士の戦いになれば負けはない！ 追いつめて討ち取るんだ！」

見れば、本隊の奴らも分散し、追討にかかりているようだ。その分、平賀の防備が薄くなるが、平賀はDクラス代表。つまり最も点数の高かつた人。Fクラス相手なら取り囲まれない限り負けはない。この戦力が分散した状況でその判断は正しいと言えるだろ？

戦況を窺っている俺の視界に、平賀の姿が入った。もう間に邪魔な近衛部隊がいないほどに防備が薄くなつている。

「明久、今のアイツは無防備だ。今ならお前でもやれるかもしけないぞ？」

「ホントだ……よし、じゃあ僕は平賀君の所に行つてくるよー。」

調子づいた様子で平賀の下に駆け出す明久を見送る。さて、俺は代表様の援護にでも回るとしてよ？

敵に囲まれている、長身の赤毛を見つけると、駆け寄った。

「随分と苦戦しているな。手伝つぞ」

「愛斗か！ 助かったぜ！」

「おう。どうせもつすぐ決着は着くんだねけどな……その前にお前がやられたら全部水の泡だ。全力で守らせてもらつ」

雄一を壁の方に押しやり、前へと出る。これで必然的に俺が戦うことになる。

「Dクラス瀬崎と津田がFクラス坂本に」

「Fクラス五月雨が行きます！ 試験召喚！」

「くつ、近衛部隊か……」

「臆するな！ 所詮、Fクラスだ！」

楽勝、といった様子で召喚を開始する一人。さて、その余裕がいつまで続くかな？

頭上に、点数が表示された。

「なんだと……！」

「そんな……バカな！」

二人の顔が驚愕に染まる。どうやら、想像していたのとは全く違う相手に、危機感を覚えていたようだ。まあ、そうだよな……。

『Fクラス 五月雨愛斗 v s Dクラス 瀬崎隼人&津田良平  
古典 397点 v s 106点&1

15点』

Fクラス如きにここまで圧倒的な点数差をつけられているんだからな。

「勉強してから出直してこいやー！」

馬鹿一人を一太刀の下に切り伏せて、補習室へと送り込む。もつと相手をよく見てから挑むんだな。

後ろでは雄二が俺に賞賛の言葉を送っていた。

「流石だな、愛斗」

「どうも。さて、それじゃあ明久達の所にでも行くか?」

「いや、その必要はないと思うぞ?」

「は? なに言つてんだよ。急がないと明久が戦死

『くつそおおおおおおおおおおおおつ!』

『やつたね! 姫路わん!』

『はいっ!』

その瞬間、Dクラス代表平賀源一の所から、一つの悲鳴と一つの歓声が上がつてくる。

雄二は、野性味あふれる満面の笑顔で俺に笑いかけていた。

「決着が着いたみたいだからな」

## 第十問 バカにはバカなりの戦い方があるー（後書き）

如何だったでしょうか？

「やつとロクラス戦が終了しましたね、ヒミサカは思ったよりも長かった戦いに一つ安堵のため息をつきます」

「うだね。もうちょっと短くできるかな？ なんて思ってたんだけど……結果はこんな感じです。自分なりには纏めた方だと思います。」

「次回は敗戦処理ですか？ ヒミサカは一応の確認を取ります」

そのつもりだよ。少しオリジナルが入ってくるかもしれないけど。

感想、お待ちしています！

それではまたお会いしましょうー

第十一問 あまりに調子に乗つたあと逆に痛い田を見た（前書き）

「こんにちは。連続投稿のふゆいです。

Dクラス戦も無事に終了したので、今回と次回は日常パートです。

そして、今回はあるAクラス三人娘の登場です。

それではどうぞ~

## 第十一問 あまつじで調子に乗つたわると逆に痛い顔を見る

「ふう…… やて、 優子を迎えてでも行きますかね」

歓声に包まれるFクラスを後にし、 僕はAクラスへと向かつていた。

Dクラス戦の敗戦処理も終わつたため、 各自由解散となつていたのだ。

テクテク歩くこと約三分。 目的のAクラスに到着した。 下校時間はとっくに過ぎてゐるが、 自習している生徒もいるだろう。 やや控えめ気味にドアをノックした。

『はいはーい。 今開けますよ (ガラッ)』

聞き覚えのない声と共にドアが開かれる。 開かれたドアの向こうには、 見覚えのない女子生徒が立つてゐた。 ショートカットの少女は、 僕を観察するようにまじまじと見つめると、 ニコッと笑う。

「やあ、 もしかして君は丘田凜君かな?」

「あ、 えと…… そうだよ」

急に話しかけられたため、 やや緊張した返事になつてしまつた。 そんな俺に、 少女はまたもや快活に笑いかける。

「あははっ、 そんなに緊張しなくてもいいよ? ボクは工藤愛子。 一年生の終わりに転入してきたんだ」  
「へえ、 そうなのか。 通りで見たことがないと思ったよ」  
「それじゃ、 これからはよろしくねっ。 …… それで、 うちのクラス

人に何か用かな？

「ん？ ああ、木下優子はいるか？」

「オッケー、優子だね。着いてきなよ、連れてつてあげるから」

工藤の後に続いて、Aクラスへと入室する。  
それにしても、すごい設備だな……。

Fクラスの六倍はあらうかといづぐらいの広さに冷暖房完備の快適さ。ドリンクバーも備え付けで、どうやら冷蔵庫も置いてあるようだ。……Fクラスの教室とは用とスッポンだな。

「おーい、優子にお密さんだよっ

工藤が俺を隠すよしひに壁に押しありながら優子に話しかける。一生懸命勉強に取り組んでいた優子は、ワンテンポ遅れて顔を上げたため、俺に気付くことはなかった。

「……あれ？ アタシにお密さんなんじゃないの？」

「そうだよ。でも、普通に会わせるだけじゃ面白くないでしょ？」

「誰が来たのか当ててみてよ」

「いや、そんな面倒なことする必要あるの？ その人だつてアタシを待つてるんだろうし、早く会いに行かな」と

「……むー、優子のマジメさん。分かったよ、じゃあ今から連れてくるから、優子は勉強に集中でもしてて」「そうしてくれると助かるわ……」

そう言つて、再び勉強にのめり込む優子。全く……相変わらずの集中力だな。周りのことが一切見えていないんじゃないかな？

「……五月雨君つ、五月雨君つ」

工藤が、優子にバレンタインに俺に手招きをしてくる。俺は頭に疑問符を浮かべながらも、そちらへと向かつた。

「どうした？」

「ちょっと優子を驚かせてやろうと思ってね。今の優子は周りが全く見えていないから、チャンスなんだつ」

「それは構わないが……具体的には？」

「まあな。面白そなことには真つ先に首を突つ込むつていうのが

備の備急たのこ

「それは素晴らしい」と、それじゃあねえ……優子の皿の前に顔を置いてくれない？ 後はボクに任せてよ」

言われた通りに、優子の前に移動する。

田の前には、一生懸命に問題を解く優子の顔があつた。

難しい問題に差し掛けられ、悩む表情になり、それか解けると、つづかに笑顔を浮かべてくれる。うん。やっぱり慶子は可愛いなあ

6

工藤は、俺の後ろに立つと、優子の名前を呼んだ。

「優子、呼んできたよー」

L

顔を上げた優子は、しばしの間沈黙していた。……まあ、目の前にニヤニヤしている男の顔があつたら、思わず驚く気持ちはわかる。そして、優子は叫び声と共に、俺の顔面へ渾身の右ストレートを放つたのだ。

鼻が折れる！  
鼻つ柱を中心に、顔中に鋭い痛みが走る。折れる！  
優子の予想外の行動に、工藤が慌てて止めに入つた。

「お、落ち着いて優子！ それ以上やつたら死んじゃうよー。」

「いやう！ いやう！ (ボロッボロッ)

「ああ、もう！ 代表！」優子を止めるのを手伝って！

二〇二〇年六月

工藤が近くにいた一人の少女に助けを求める、ようやく優子を落ち着かせることに成功した。

「霧島翔子。このクラスの代表」

「へえ……君が学年主席か」

「…………うん」

「クンとうなずく霧島。なんだか日本人形みたいな人だな。」

突然、くいっくいっと後ろから服を引っ張られる。振り向くと、やや沈んだ表情をした優子が俺を見上げていた。

「あ、魔術……『メンね？』動搖しかつてたよねえ、あんなこ  
とし……」

「ねー、うん。いいんだよ、気にしないから」

落ち込む優子の頭を優しく撫でる。これは昔からひょく優子にして

いる慰めの一種だ。

優子は、わずかに顔を赤らめたものの、気持ちよさげに手を組んでいた。

「わお 優子もスミに置けないねえ～

「……とても微笑ましい」

工藤と霧島が温かい手でこちらを見ている。オイコラ工藤。俺はお前の作戦で死にかけたんだが？

数分経つたところで、優子を離す。

「……ありがと」

「いえいえ。……それじゃ、行くとしますか

「え？ 行くってビビに？」

首を傾げる優子。くつ……コイツめ……自分から提案しどうその反応かよ……可愛いから許すけど。

俺はため息をつきながら、ジト目で返した。

「どーひて……今朝約束したじゃないか。行くんだろ？ クレープ」

「あつ……覚えてくれたんだ……」

「そりや、あそこまで痛い目見れば、嫌でも覚えるだらつよ……」

「ゴ、ゴメン……」

「だから謝らなくていいって。……それじゃ、俺と優子は帰るよ。じゃあな、工藤、霧島

「うん デート楽しんできてね～」

「……応援してる」

「ちょ、ちよ、愛子に代表！？ これはデートとかじゃなーいはずー。」

からかってくる一人に、顔を真っ赤にしながら反論する優子。

そんな微笑ましい光景に笑顔を浮かべながらも、俺と優子は▲クラスを後にした。

## 第十一問 あまつて調子に乗つたわると逆に痛い田を見る（後書き）

「今日は愛斗が酷い目に遭いましたね、とミサカは主人公の自業自得つぶりに必死に笑いをこらえます。……ふふふ」

おい、こらえきれてないぞ……。さて、遂に登場しました、自称『得意科目は保健の実技』少女と、『ある特定の人物に限つてヤンデレ』少女が。

「なぜ、普通に名前で呼ばないのですか？ とミサカはあなたの意味不明な行動に冷淡な表情で返します」

「べ、別にいいだろっ！ 少しは作家さんっぽくやってみたかったんだよ！」

「自作自演ワロタ、とでも返しておきましょつか？」

……放つておいてくれると助かります……。

「あらら、作者が落ち込んでしまいました。仕方がないのではミサカが締めるとしましょっ」

「今回もこの作品を読んでくれてありがとうございます。まだまだ始まつたばかりですが、どうか読者の皆様を落胆させないよう一生懸命頑張つていきたいです」

「それでは、また次回お会いしましょっ。感想もお待ちしています」

## 第十一問 五円歴歴才の口説（前書き）

こんにちは。

今回はアンチ根本の人たち」といつてはちょっと許せない内容かな?  
まあ、楽しんでください。

## 第十一問 五月雨愛斗の日常

「う~ん、楽しみだわ~」

「クレープでそこまで喜ぶもんかねえ……」

あの後、Aクラスを出た俺と優子はクレープを食べるため、街へと出ていた。当然、二人とも制服のままである。

校門を出る際に、優子が『せっかくの機会なのに制服だなんて……はあ』とため息をついていたが、俺はただ苦笑するだけだった。

さて、今回の目的地は駅前にある喫茶店『ラ・ペデイズ』。割と近くにあり、値段もそれなりにお手頃なので、文月学園生徒御用達の店になっている。

しかし近くと言つてもそれなりに距離があるため、俺と優子は暇つぶしついでにウィンドウショッピングをすることにした。

ピタリ、と優子がとある洋服店の前で足を止める。ジーツとショーウィンドウを見つめてるので、そちらに視線を移すと、白い上着とセットで置いてある、薄緑のワンピースがあつた。

「あ……あの服可愛いな……」

「そうか？ つてか、お前は基本家から出ないし家の中でも割と軽装だから、あんな服いらな俺の右腕の関節が大変なことに……

つ……

「ツギハ、ホンキデ、オル」

「笑顔で物騒なこと言わんでくださいー」

ゆるやかな動作で腕ひしきを決めてくる我が幼馴染。いつも思う

んだがコイツはどこでこんな技を覚えてくるんだ……？

いつまでもそこから離れようとしている優子を見て、俺は一つため

息をついた。

「買つてやるうか?」

「え? ..... い、いいわよ別に。そこまでして欲しいわけじゃないんだし.....」

俺の提案を、両手をブンブン振りながら拒否する優子。まったく、頑固といつが不器用といつが.....。

俺は再びため息をつくと、優子の手を取つて洋服店のドアを開けた。

「あつ ..... ちよつ .....」

「これはお前が欲しがつたわけじゃない。ただ、いつもの礼に俺がお前に買つただけだ。 ..... それなら、いいか?」

「 ..... あ、ありがと .....」

「俺の希望で買つんだから礼なんて言つなよ。ま、とつあえずお前はもう少し素直になつた方がいいぞ」

「よ、余計なお世話よ.....」

「へいへい」

さて、今度はちょっとばかし生活費を切り詰めるとしますかな。

「えへへ……」

「すっげえ嬉しそうだな、お前」

早速、買つてやつた服を着て笑顔になつている優子に俺は苦笑を返す。ちなみに、制服は今紙袋に入れて俺の腕に提がつている。

『よつしゃあ！ これで俺の二連勝だぜー。』

『少しば手加減してくれよ……』

『代表つて意外とシューティングゲーム苦手なんだね……』

『きょーちゃんは頭脳派だからね……』

『だいひょー、次は私とやろうよー』

『もう、ダメだよ律子。代表が可哀想でしょ？』

『お前ら言いたい放題だな……』

と、前方のゲームセンターで何や聞き覚えにある声がした。俺と優子は思わず顔を見合せると、そちらへと足を進めた。

「ようしつ！ それじゅ、いっくよーつー。」

「これ以上負けてたまるか！」

「……何やつてんだよ、恭一！」

俺は、懐から百円玉を取り出し、勢いよく入金している男子

根本恭一に呆れの視線を送つた。

根本恭一。文月学園では『卑怯者』として名が通つてゐる男子である。『喧嘩に刃物はデフォルト装備』だとか、『球技大会で相手に一服盛つた』とか。しかし、この噂は実は全部『マ』なのだ。というか、恭一があえて自分から流した噂だし。

本来の根本恭一は、多少根性がひん曲がつてゐるもの、自分の周りの人を守るために全力を注ぐような良いヤツなのである。ま、そうでなきや悪友やつてゐる俺がバカみたいなんだけどな。

「ん？ 見ての通りゲームだが？」

「そう言つ意味じやねえよ……」

「なんだよ。……お、そつちにこるのは木下姉じやねえか」

「こたにちは、根本君」

挨拶を交わす優子と恭一。

優子も恭一とは中学からの知り合こということもあって、『卑怯者』の演技をしていない『恭一』を知っているため、割と仲がいいのだ（ちなみに秀吉も）。

「あ、まなつちだ！ 久しぶり！」

「やつぱりお前もいたか、雪奈」

恭一の背中に張り付いていた148?の少女 安藤雪奈  
が太陽のような笑顔で俺のところに来る。恭一を最も昔から知る少女で、いつも恭一と行動を共にしている。

四人で和気あいあいと話していると、一人を取り巻くように立つていた残りの四人が俺の肩を叩いた。

「ん？ ああ、誰かと思えば、Bクラスの集まりだったのか」

「今まで無視できただあなたにビックリよ……」

「まあまあ、五月雨君も悪気はないんだしさ」

「それにしてもこんなところで会うなんて奇遇だな」

「僕達が田立ちすぎてたから声かけただけなんじゃないの？」

一番田から順に、岩下律子、菊入真由美、上藤信一、芳野孝之。

四人ともBクラスのメンバーである。

岩下が、拳銃型のコントローラーを画面に向かながら、俺に話しかけてきた。

「でも、やっぱ噂つて信じるものじゃないわよねー」

「は？ 突然どうしたんだ？」

「いやせ、だいひょーって『卑怯者だ』って言われてるじゃない？」

私も、今までその噂を信じてたんだけどさ……」

「今日一日Bクラスで過ごしてみて、その噂がデタラメだつて分かつたのよ」

岩下の言葉を菊入が引き取る。

工藤と芳野が笑顔で続けた。

「いやあ、最初はマジでビビったぜ。なんたつて、初っ端の挨拶が予想外すぎたもんな」

「『みんなは俺のことを卑怯者つて思つているだろう。それは俺も認める。でも、これだけは分かつてほしい。俺は代表として、一人の人間として、このBクラスのみんなを大切にしていくつもりだ。絶対に、このクラスは守り抜く』だっけ？ 最初の挨拶で一気に僕達が持つてた『根本恭一』っていう人物像が木端微塵に崩れ去つたもんねえ」

そう言つと、四人は笑つた。

どうやら、とある事情により『悪役』となつた我が悪友にも、やつと友人ができたようである。

恭一が、恥ずかしそうに、頬をかいていた。

「……ちつ。なんで愛斗にまでバラすんだよ……」

「まあまあ、そんな顔しないで。そ、次行つてみよーー！」

『おーーー』

「つて、また俺の奢りかよ！？」

「だつてだいひょーが大富豪弱いんだもーん

「罰ゲームなんだから我慢しろよ、な？ な？」

「それじゃ、僕達は行くね？」

「二人共、また明日ー！」

「二人共、また明日ー！」

嵐のよつに過ぎ去つていくBクラス集団。それを見送りながら、俺と優子は恭一の様子を見て笑つていた。

やつぱりアイツも、仲間と一緒にいる方が幸せそうだよ。

「んじゃ、とつとと食いにいきますかー！」

「そうね。もうお腹すいちゃつたー。早く食べて、早く家に帰りましょ？ セっかくだしアタシん家で何か美味しいものでも作つてよ！」

「へいへい。姫様の仰せのままに！」

優子の手を取り歩き出す。一瞬、顔を赤らめていた優子だったが、すぐにいつもの調子になり、俺の腕に抱きついてきた。

やれやれ、これが幼馴染のスキンシップ以上つていつ氣持ちになつてくれるるるありがたいんだけどなあ……。

『ラ・ペティス』で念願のクレープを食べ終えた俺達は、途中ス

一パーで晩飯の材料を買い、優子の家へと向かつた。俺の家も隣にあるため、一度家に帰つてもいいのだが、優子を待たせるわけにもいかなかつたため、そのままの状態である。

「おかえりなさいなのじや。ん? 愛斗も一緒にの?」「どうも、秀吉」

既にパジャマ姿となつてゐる秀吉が玄関へ姿を現した。ヘアピンも外してゐるため、今の秀吉は優子と見分けがつかないぐらいである。

「今日は愛斗が御飯作つてくれるつてさ」「む、そうなのか? それは楽しみじやの?」「お手柔らかに頼む……」「

買い物袋を台所に置き、調理の支度を始める。ちなみに優子の話によると、今日は両親が出張のため不在らしく、丁度良かつたようだ。

「あ、それじや、アタシはお風呂入つてくるねー」「つむ。分かったのじや」

やうこうと、着替えを持つたまま優子が脱衣所へと向かう。まう、風呂か……。

「待つのじや愛斗。包丁を置いてビニール向かつつかの?」「いや、ちよつと……トイレまで」「トイレ廊下じや、そつてあるのは風呂場じやが」「…………ちよつ」「お主今舌打ちをしたな!? 自分のやんつじでこねりとくもく

考えてみるのじゃ…」

「大丈夫。昔はよく一緒に風呂に入つただろ?」

「小学校低学年の話じゃけどなー。今それをしたら確實に警察へ直線じゃぞー!?」

「……わかつたよ……大人しく調理に入りますよ」

「最初からそうしてくれればよいものを……」

人参の皮を剥き、包丁で一口大に切つていぐ。うん、我ながら見事な包丁さばきだ。

『ふんふんふふん』

風呂から聞こえてくる優子の鼻歌をBGMに切つた野菜を鍋のなか。さて、今のうちに肉を切りますかね。

『きやつ、もう、秀吉め……シャワーの温度、冷たくしたままじゃないの……』

サアアツ……と水の音が響き渡る。テレビも点いていないため、その音が一層よく聞こえるのだ。

切つた肉を入れ、カレールーを投入する。今日の晩御飯はカレーなのだ。

『むう……まだ大きくならないなあ……アタシだって、いつかは代表や姫路さんみたいに……』

優子の苦悩の声が聞こえてくる。おそらく、自分のある一点の成長度合いを心配しているのだろう。やれやれ、乙女は悩みが多いってか?

『飯を盛り付け、その上からカレーをかけていく。よし、完成…

……つと。

『あつ、ちゅつ、やつ、シャワーが変なところに当たつて……ひや  
うつー』

……。

「…………もう、限界だ……」

カレーライスをテーブルに置き、コラリと立ち上がる。田指すは  
優子の艶姿だ。

「ま、愛斗よ、落ち着くのじや。確かにお主はよく耐えた。あの精神をガリガリと削る姉上の無防備ボイスに、お主にしては随分と頑張つたものじやが……」

「どけ、秀吉。男には時にやらねばならぬこととこうのがあるんだよ」

「それは決して今じやなかうつー?」

「くつ、なら、優子を島田に変換して考えてみるー。お前なら耐えきれるのか!ー?」

「そ、それは……」

「ほら! 想像してみろよ! 島田がすぐ近くで服を脱いでいて、島田がすぐ近くで一糸纏わぬ姿になつていて、島田がすぐ近くでシャワーを浴びていて、島田がすぐ近くで微かな嬌声を上げている状況をさー!」

「…………ワシの……負けじや……」

秀吉が、地面に膝をつきながら右手で鼻を抑えていた。どうやら、結構完璧に想像してしまったようだ。わずかに前屈みになつている

のは、あえて触れないでおく。

さて、俺はターゲットの姿を拝みに行へとしますかね。

「あ、愛斗……やめるのじゃ……」

まったく外傷がないのに何故か息も絶え絶えな秀吉の制止を振りほどき、脱衣所のドアに手をかける。

ふふふ、ついに我が悲願を達成するときが……。

「どうやあああー。」

思いつきりドアをオープン！

そこには我が幼馴染が

しつかりとパジャマを着こんだ姿で立っていた。

「馬鹿なああああああああああーーー！」

「なぜだ！ なぜ既に服を着てしまっているんだー！ 神よー！ 我を見捨てたのですかあああああーーー！」

「なつ……なつ……ー。」

優子が顔を真っ赤にしながら俺をまじまじと見る。突然の状況に、頭の処理が追いついていないのだらう。俺は、そつと脱衣所のドアを閉めた。

『…………まああああああああああああとおおおおおおおつーーー。』

その晩、俺が命を落としかけたのは言つまでもないだらう。

## 第十一問 五月雨愛斗の日常（後書き）

はい。いかがでしたでしょうか？ 今回は、雑談コーナーをお休みして、少しだけシリアルスな話をしたいと思います。

さて、今作の根本の扱いですが、『気に食わない』という人も多いでしょう。原作では、姫路の手紙を盗んだりと、様々な卑怯な手を使つていました。

しかし、僕はこう思うのです。

他の作者さんの作品の中で、根本は凄まじいほどのクズとして扱われている。確かに、仕方のないことだろうが、少しぐらい彼にも幸せがあつてもいいんじゃないのか？ と。もう、十分なくらい報いは受けたんじやないか？ と。

だから、僕は根本を『卑怯者の皮を被つた善人』として、書くことを決めました。

これは偽善かもしませんし、綺麗事かもしません。

それでも、それでも僕は、彼に幸せを与えてやりたいのです。人間らしい人生を歩ませてやりたいのです。

長々と書きましたが、これが今回、根本をこういう風に扱つた理由です。

分かってくれる人は少ないとは思いますが、それなりに考えてくれると幸いです。根本がなぜあんな噂を自ら流したのかは、また後日書きたいと思います。

それではまた次回お会いしましょう。

感想、お待ちしています。

## 第十三問 必殺料理人（前編）（前書き）

こんにちは。中間考査で驚愕の点数を取ってしまい焦りに焦つているふゆいです。

いや、勉強しろって話なんですけどね（笑）

とにかく、第十三問です。

## 第十二問 必殺料理人（前編）

翌朝、俺、優子、秀吉の三人はいつも通り学校へ向かった。新校舎と旧校舎の間にある渡り廊下で、優子と別れる。

「それじゃ、アタシはこっちだから

「うむ」

「ああ、また放課後な」

今日は試験戦争で消費した点数を補給する為にテスト漬けのはずだ。頑張らないとな。

「ちーっす」

「おはようなのじや」

教室の戸をガラガラと開ける。

相変わらずの畳と卓袱台。Dクラスの設備はもつたいなかつたんじゃないか、と思わないこともないが、雄二にも作戦があるようなので気にしないことにした。

「おはよー、愛斗、秀吉」

「二人とも、ギリギリだな」

既に到着していた明久と雄二が後ろの卓袱台で胡坐をかいっている。教科書を持っていることから、大方、テスト前の悪あがきでもしているのだろう。

明久が、「そういうば……」と口を開いた。

「皆には何も言わなかつたの？」

「ん？ 何がだ？」

「Dクラスの設備のこと」

「あ、そういうやうだな。折角勝ち取ったのに占領しないなんて、普通は不満に思うだろ？」

「そのことなら大丈夫だ。皆にもきちんと説明をしたからな。問題ない」

「ふーん」

皆が素直に言つことを見たのは昨日の雄一の働きを評価してのことだろ？ もっと上を狙えるかもしれないとわかった以上、Dクラス程度の設備には興味がないといったところだろうか。

そんな話をしていると、いきなり雄一がニヤニヤしながらこんなことを言い始めた。

「それより明久、昨日の後始末は良いのか？」

「うん。いくら僕でも、生爪を剥がされると分かっていながら行動するなんてありえないよ」

「いや、雄一の後始末のことじやないだろ？」

「え？ ジヤ、一体なんのさ？」

「お主、やつから何の話をしているのじや？」

と、荷物を置いた秀吉が俺達のところにやってきた。

俺は、今までの流れを軽く説明する。

「ふむ。なるほどのう。大体の状況はわかつたのじや」

「それじや、後始末がどういう意味かわかつたの？」

「うむ。その意味はじやな

「木下つー！」

「うふあつー！」

秀吉の台詞が突然の拳で遮られる。驚いてそちらを見ると、随分といきりたつたご様子の島田が、拳を握つて立つていた。島田よ、理由は知らないが、そんなに恐怖のオーラを出さないでくれないか？ 明久がロデオマシーンのような震えを見せてるから。

地面に吊りつけられていた秀吉が、頬をさすりながら立ち上がつた。

「し、島田、おはようなのじや……」

「おはよつじやないわよつ！ アンタ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽き足らず、得意の演技で、ウチを消火器のいたずらと窓を割つた件の犯人に仕立て上げたわね……！」

「あ、あれには日本海溝よりも深い理由が……」

「おかげで彼女にしたくない女子ランキングが上がっちゃつたじやない！」

「まだ上がる余地があつたのかよ……」

「あ、？ 何か言つた？ 五月雨

「なんでもありません」

光速で上半身を直角に曲げて謝罪する。どうやら、触れてはならない部分に触れてしまつたようだ。くわばらくわばらく。

秀吉が、胸ぐらを掴まれたまま、必死に反論していた。

「あ、あれは仕方なかつたのじや！ あの状況で逃げ出すためには、ああするしかなかつたんじやからのう……」

「それじゃあランキングの件はどうしてくれるのよつ！？」

「ワ、ワシ的にはライバルが減つて逆に一安心なんじやが……」

「とりあえず、向こうで話しあいましょうか。五月雨、このバカを少し借りるわね

「愛斗、助けてくれ！ このままではワシの命の灯が！」

「……すまねえ秀吉。俺も自分の命が惜しい

「愛斗！？ 愛斗オオオオオオオオ

（ズルズル）」

世紀末に立ち会つたような表情で地獄へと連れて行かれる秀吉。とつあえず後で葬式の値段を確かめておくとしよう。

一時間田のチャイムが鳴る。俺と雄一は教室の脱出口の全てを塞ぐと、先ほどの答えを明久に提示してやつた。

「明久、一時間田の数学のテストだが」

「うん」

「監督の先生、船越先生らしいぞ」

「さりばだつ！」

その名を聞いた瞬間、身を翻す明久。しかしそうは問屋が卸さない。

教室の窓にはすべて鍵がかかっている上に、後ろのドアでは島田と秀吉が『O H A N A S I』中だ。よつて抜け出すためには教室の前のドアから出るしかないのだが……。

「！」は通さないぜ、明久

「そういうこと。大人しくお繩に付けよ。我が親友さん

「あんたらは最低の親友だ！」

五分後、教室にとある観察処分者の悲鳴が響き渡つた。

「うあー……づがれだー」

明久が机に突っ伏している。

とりあえず四教科が終了。ただでさえテストは疲れるのだが、更に明久は船越先生と一悶着あつたため余計に疲れていた。

ちなみに船越先生には俺の近所のお兄さん（三十八歳／独身……お兄さん？）を紹介しておいた。これ以上明久を追いつめるのも可哀想だし。

「ま、確かに疲れたな」

「ワシも同感じや」

「…………（「クク」「ク）」

いつのまにか秀吉とムツツリー二が近くに来ていた。なぜか明久がポニー・テール状態の秀吉に顔を赤らめているが、あえて触れずにおぐ。

「よし、昼飯食いに行くぞ！ 今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすつかな」

「どういう体の構造してんだよ、お前」

「カロリーが異常に高そうじやのう」

勢いよく立ち上がり、食堂へ向かおつとする雄二に秀吉と二人でツッコミを入れる。体のでかいやつは食いしん坊と相場が決まつてでもいるのだろうか。

「ん？ 吉井達は食堂に行くの？ だつたら一緒にいい？」

「む、島田か。別に構わんぞい」

「それじゃ、混せてもらひつね」

「…………（「ク」「ク」）」

ムツシリーが頷いているのは下心のせいだらう。秀吉もさう考えたようだ、ボソッと呟いていた。

「島田に色氣を求めるでも無駄だらうに」

「なんか言つた？ 木下」

「滅相もいざりません」

なんて恐ろしい感なんだ。

まあ、とりあえず今は待ち望んだ昼休み。美味しいものでも食べて元気を出さう。学食だからそこまで美味しいといつワケでもないが。

「じゃ、僕も今日は贅沢にソルトウォーターあたりを

「あ、あの。贅さん……」

明久が立ち上がり、学食に行こうとしたといひで声をかけられた。

「うん？ あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。え、えつと……、お、お腹なんんですけど……、その、昨日の約束の……」

姫路がもじもじしながら俺達の方、主に明久を見ている。どうしたんだろうつか？

「おお、もしや弁当かの？」

「は、はこつ。迷惑じやなかつたひじりやつ」

と、身体の後ろに隠していたバッグを出してくる。

おお……飯だ！ 金錢的にも空腹的にも非常にヤバい俺と明久に  
ひとつでは、救世主、いや、女神のようだぜ！

「迷惑な物のか！ な、明久！」

「うん！ もちろんやー！」

輝く瞳でサムズアップ。今、俺達は猛烈に感動している！

「や、そうですか？ 良かつたあ～」

せこやつと嬉しそうに笑う姫路。明久に近づけたことが嬉しい  
だろう。

「ひ、ウチだつて頑張れば弁当べりー……木下にむ……作れるもん  
……（いじゅうじゅ）」

隣で顔を俯かせながらぼそぼそと呟いてるポーテールもなか  
なかのお年頃だ。

「それじゃ、せつかべの！」馳走だし、こんなカビ臭い教室じゃなく  
て屋上にでも行こうぜー

「やつじやな」

いたな廃屋のような環境で食べていよいよ物じやない。屋上の  
気持ちいい空間で最大級の感謝を持つて食すべきだろ。

「そつか。それならお前らは先に行つてくれ。飲み物を買つてく  
る」

「あ、それならウチも行く！ 一人じゃ持ちきれないでしょ？」  
「む、島田よ、ワシが行くからお主は待つておくのじや。女の子が  
労働をする必要はないぞい」

珍しく労働を買つて出る秀吉。島田に気遣いができるといふを見  
せようとしているのがバレバレだ。

「そ、そう？ それなら、よろしくね」

「うむ。それじゃ、行くとするかの、雄一」

「ああ。ちゃんと俺達の分までとつておけよ」

秀吉と雄一は財布を持つて教室を出て行つた。きっと一回の売店  
に行つたのだろう。

「俺らも行くか

「そうだね」

姫路が抱えていたバッグを明久が受け取り、屋上まで歩く。結構  
重そうだ。随分と大量に作つてくれたんだな。感謝感謝。

「天氣が良くてなによりね」

「そうですねー」

屋上へと続く扉の向こうは抜けるよつた青空。美少女一人がよく  
映える。

「あ、シートもあるんですよ」

姫路がバツクからビニールシートを取り出す。俺も用意を手伝つとするかな。

わいわいと準備を始める。幸い屋上は他に人もいなくて俺達の貸切状態だ。

「気持ちいいなー」

「…………（コクコク）」

ビニールシートに足を投げ出す。草原のよつた解放感が気持ちよかつた。

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

姫路が重箱の蓋を取る。

『おおつー』

俺達は一斉に歓声を上げた。

凄く旨そうだ。唐揚げやエビフライなどの定番メニューから、ハンバーグまで詰まっている。

「それじゃ、坂本達には悪いけど、先に

「…………（ヒョイ）」

「もういい！」

「おいつー、するいデー！ 一人共！」

動きの速いムツツリーーーと食い意地の張った明久がエビフライをつまみ取つた。

そして、流れるように口に運び

バタン

ガタガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

「…………」

島田と顔を見合わせる。

「わわっ、土屋君ー？ 吉井君ー？」

姫路が慌てて、配りうつとしていた割り箸を取り落す。

「…………（ムクリ）」

「…………」

ムツツリー二が起き上がつた。明久は、まだ目覚めない。

「…………（グツ）」

そして、姫路に向けて震える右手でサムズアップ。多分、『凄く美味しいぜ、べらんめえつ！』と伝えたいんだろう。江戸っ子みたいな台詞なのは、決して俺の心の動搖ではない。決して。

「あ、お口に含いましたか？ 良かつたですつ」

ムツツリー二の言いたいことが伝わったのか、姫路が喜ぶ。姫路

よ、まずは明久が一向に田を覚まない」と不信感を覚えるべきじゃないか?

「良かつたらどうぞん食べてくれいね」

姫路が笑顔です勧めてくる。

そんなに純粹な笑顔を向けられてしまつと、思わず食べてしまおうという気にさえなつてくる。

だが、俺達には田を虚ろにして痙攣している明久とムツツリーが忘れられない。

(五月雨……あれ、どう思つ?)

隣で引き攣つた笑みを浮かべていた島田が、姫路に聞こえないくらいの小さな声で俺に話しかけてきた。

(……どう考へても演技には見えないな)

(だよね。ヤバイわよね)

(島田。お前、身体は丈夫だろ?)

(あら、もしかしてウチみたいな女の子に行かせる気? 木下さん

に言いつけるわよ)

(くつ……卑怯な……)

表情は当然笑顔のまま。この驚愕を必殺料理人に悟られるわけにはいかない。

(なにが卑怯よ! あんたそれでも男なの!?)

(お、女みたいな顔だからいいんだよ!)

(なあに、木下の立ち位置を奪つてるわけ!? あんたは正真正銘の男でしょうが!)

（お、お前だつて男みたいな性格と胸してんじゃねえか！）  
（なに？ あんたもしかしてケンカ売ってる？）

何故か口論になつてしまつた俺と島田が、掴み合いの喧嘩をしよ  
うとしたところで、

「おう、待たせたな！ ヘー、こりゃうりじやないか。どれどれ  
？」

雄二（生け贋）登場。

「雄一、これ美味しいぞ」  
「そうか？ それじゃ頂くぞ」

俺の言葉に一片の疑いも持たず素手で卵焼きを口に放り込み、

タガタ  
パク  
バタン  
ガシャガシャン、ガタガタガ

ジュースの缶をぶちまけて倒れた。

第十三問 必殺料理人（前編）（後書き）

感想、お待ちしています。

## 第十三問 必殺料理人（後編）（前書き）

久しぶりです。

バカテス、アニメ第二期が始まりましたね。海水浴に合宿、木下姉妹（笑）も入れ替わり騒動。

どれもこれも楽しみな物ばかり、続きが待ち遠しいですね。

さて、それではお楽しみください。

## 第十二問 必殺料理人（後編）

「ゆ、雄二ーー？ 一体どうしたのじゃーー？」

遅れてやつてきた秀吉が雄二に駆け寄る。

……うわあ、ここまで殺傷力とは……。

釣られた魚のように痙攣を繰り返していた雄二は、俺の方を見ると、田でこう訴えていた。

『毒を盛つたな』と。

『毒じやねえ、姫路の実力だ』

俺も田で返事をする。親友だからこその技。いつこうとはすごく便利だ。

「あ、足が攣つてな……」

息も絶え絶えに気を遣つ雄二。いや、他人を気遣つ前に自分を気遣えよ。食わせた俺の台詞、じやねえけどや。

「あつはつは、ダッシュで階段を昇り降りしたからじゃないか？」

「ええ、そうでしょうね」

「そうか？ 雄二はこれ以上ないくらい鍛えられていると思つのじやが」

事情の分かつていな秀吉が不思議そうな顔をする。余計なことを言い出す前に退場をさせてしまおう。

「とにかく秀吉。その手をついているあたりにだな

ビニールシートに腰を下ろしている秀吉の手を指差す。

「ん？ 何じゃ？」

「さっきまで鳥の糞があつたぞ」

嘘だけど。

「そ、そんなことは早く言わんか！」

「すまんすまん。とにかく、手を洗つて来いよ」

「言われなくとも行くわい……」

ダッシュで階段を降りていぐ秀吉。これで犠牲者は最低限に抑えられるはずだ。

「木下はなかなか食事ができないでいるわね」

「全くだ」

はつはつは、と生き残り三人組で快活に笑う。

一方その後ろ側で俺達は必死に作戦会議を行つていた。

（愛斗！ 今度はてめえがいけつ！）

（無理だつつのー 俺のデリケートな胃袋があんな化学兵器に耐えられるとでも！？）

（大丈夫。お前なら逝けるさ）

（漢字が違う！ 俺を殺す気か！？）

（アンタは率先して坂本を犠牲にしたでしょが……）

（つていうか、島田が行けばいいだろ！ 体丈夫なんだし！）

（ウチはか弱い女の子なの！ もういいわ、五月雨、覚悟なさい……）

…

(え、ちょっと、一体何を )

「瑞希！ あれは何！？」

「えつ？ なんですか？」

島田が指した明後日の方向を姫路が見る。

(隙あり！)

(も「ああつ！？」)

その隙に島田は俺の口の中一杯に弁当を押し込んだ。  
同時に込み上げてくるなんともいえない痛み。

(ぐつはああつ！ 胃がつ、胃がああああつ！？)

「ふう、これでよし」

「……お前、意外と鬼畜だな」

一仕事終えた棟梁のように汗を拭く島田。引き攣った笑みを浮かべる雄二。だんだんと意識がブラックアウトしていく俺。  
ああ……見える、俺にも見えるよ……三途の川が。  
そして、数秒もたたないうちに俺は意識を手放した。

地獄と云ふの飯食を終え、復活した皿でのんびりお茶をすかる。

「…………（ずずー）」「…………（ずずー）」「…………（ずずー）」「…………（ずずー）」

俺と明久、ムツツローーは殺菌作用があると言われるお茶を大量に飲んでいた。

ちなみに秀吉はお茶だけにしかありつけていない。本人は憤慨していたが、島田が飯を奢つてやるということなので、秀吉的にもまあラッキーだらう。

「相手はBクラスなの？」  
「ああ。そうだ」

そういえばやつを雄一が言つていた。ロクラスの窓の外にあるBクラスの室外機に用があると。  
まさか他のことにつづわけでもないので、おそらく次の標的はBクラスなのだらう。

「どうしてBクラスなの？ 田標はAクラスなんでしょう？」

島田が「クンとかわいらしく首を傾げる。秀吉、口元が緩んでいるが、気付いているか？

雄一は島田の質問に神妙な面持ちで答えた。

「正直に云おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

「どうしたのや雄一。こつもの雄一らしくないよ？」

「………… Aクラスの上位格は化け物レベル」

「ムツツリー二の言うとおり。特に代表の霧島はその中でも実力が段違いだ。いくら操作能力に長けている俺や明久がいても、到底歯が立たない」

「それじゃあ、ワシらの最終目標はBクラスに変更とこいつとかの？」

秀吉が顎に手を当てて咳く。隣では島田が同じように考え込んでいた。

「いや、そんなことはない。Aクラスをやる「雄」、さつきと叫んでることが違うじゃないか

「……なるほど。そういうことか

「？ 坂本君の思つてることがわかつたんですか？」

「ああ。つまりはこいつのことだ。俺達の戦力じゃいくら戦争をしたところで上位層に一掃されるのがオチだ。だが、クラス単位で勝てなくともAクラスに勝てる方法が一つだけある

「…………一騎打ち」

ムツツリー二が答える。ずっとカメラの手入れしたくせにこいつうときだけはしっかりと答えるんだな。

俺はそれに静かに頷いた。

「（）答。んで、Bクラスを使ってAクラスに一騎打ちをかけしかける気だろ？…………明久、試験召喚戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知つているな？」

「え？ も、もちろん！」

…………知らねえな、コイツ。

「はあ、いい加減ルールくらい覚えろよな。……雄一、よろしく「人の役目を奪つといてよく言つぜ」……。……負けたクラスは設備を落とされるんだ。つまり、BクラスならCクラスの設備、といった具合にな」

「そう。それじゃ、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

「雄一、ベンチ」

「ややつ。僕を爪切りいらすの身体にする動きがつ」

「……安心しろ、爪は拾つてやる」

「骨を拾つてよー」

「涙目で叫ぶ明久。本当に本気でコイツを殺したくなるのは、仕方ないよな？」

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよね？」

「姫路の言つとおりだ。だから、そのシステムを利用して、交渉をする」

「交渉、かの？」

「Bクラスをやつたら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。まずうまくいくだろ」

雄一が自慢げに作戦を説明する。しかし、俺は一人ただ考えていた。

確かに、雄一の作戦ならAクラスを手に入れることができるだろう。同時にBクラスまで手駒にできる。しかし、本当にそれでいいのか？

Bクラスの代表は根本恭一。俺の親友であり、悪友のアイツがいるクラス。

そんなクラスを攻める」となんて……俺には、できない。

「雄一」

気が付くと俺は雄一の名を呼んでいた。雄一がゆっくつこひりを振り向く。

「どうした？俺の作戦に不満なところでも？」「さうじゃないんだが……今から、Bクラスに行つてこようつと細かいことを語り合おう」

「…………どうするつもりだ」

「Bクラスを、説得していく」

「え？ そんなの無理だよ愛斗。だってBクラスの代表はある根本くんなんだよ？」

心配そうに言ひ明久。その言葉に俺と……秀吉はわざかに顔をしかめた。

とある事情により悪役を演じている恭一。勿論、それのよつて恭一の名は悪い意味で知られてしまつている。明久の反応も極々当たり前のものだらう。

…………しかし、昔からアイシを知る俺や秀吉にとつてはただのくだらない、許せない噂だ。

俺はふつふつと沸いてくる感情を必死に抑えながらも、雄一に言った。

「頼む、行かせてくれ、雄一」

「…………ワシからもお願ひするのじや。愛斗を、行かせてやつてはくれぬか？」

「…………はあ」

雄一が諦めの表情でため息をつく。そしてバンッと俺の背中を叩いた。

「い、つ！？」

「……お前にも、なにか思うところがあるんだ」「つ、なら、行って来い。……絶対しぐじるんじやねえぞ？」

「雄一」

「いいから早く行けよ。説得で戦争が避けられるならそれに越したことはないからな」

「…………オッケー、俺と秀吉にて任せとけ」

「つむ。心得たのじやつ」

秀吉と共に教室を出る。

……とつあえず、Bクラス戦だけはなんとしても回避しなきやな  
……。

**第十三問 必殺料理人（後編）（後書き）**

感想、お待ちしています。

番外編　『万能演人』と『過激派筆頭』の日常（前書き）

こんちやーす！

今回はなんと『試験召喚のすすめ』との「コラボ」です。  
秋雨さんからのお叱りを覚悟しつつ書きました。  
それではどうぞ～

## 番外編　『万能演人』と『過激派筆頭』の口常

朝から雀も囁りそうなほどよく晴れた空。

本日も絶好のスクールライブ日和である。

いつもは悪い意味で騒がしい文月学園も、さわやかな陽の光に当たられてか、落ち着いた様子を醸し出していた。…………とある四人を除いては。

『イッシャアア

？』

『クラスの教室に一つの雄叫びが木霊する。そんな一人の様子をクラスメート達は『またか……』というような表情でボケーッと眺めていた。

「はあっ、はあっ……やるじゃねえか、光一……」

「嬉しくもなんともねえんだよ、バカ愛斗……」

教室の中心で睨みあう一人。【過激派筆頭】の名で知られる拳銃マニアの久遠光一と【万能演人】の一つ名を持つ変身能力保持者の五月雨愛斗だ。

光一が愛用のエアガンを愛斗に向けながら言った。

「お前といい雄一といい、朝っぱらから元気なことだな……」

「うるせえ！ 朝っぱらからお盛んなのはどっちの方だ！？ Aクラスの教室で工藤とイチャイチャしゃがつて！ 羨ま憎たらしいぞこのヤロウ？」

「完璧にやつあたりじゃねえか。といつか、イチャイチャしたいなら優子の所にでも行つてきたらどうだ？ 喜んで接してくれると思うぞ？」

「もう行つたわ！『朝から何変なこと言つてんのよ、アンタは？』つて追い出されたんだよお？」

「知るかよ……」

血涙を流す愛斗に顔を引きつらせる光一。そのとき彼の心の中では確実に目の前の幼馴染への好感度が著しく下がつていただろう。まあ、当然の結果である。

「……ねえ雄一。僕達つてなんで戦つているんだっけ？」

「なんでつてそりや……あの二人に巻き込まれてだろ？」「

「そうだつたね……雄一」、パンでも買いに購買に行かない？　お腹減つちやつた

「そうだな。後はバカ二人に自由にやらせておくとするか

そういうて教室を出でていく明久と雄一。ビニカの平行世界と違つて、この二人の仲はそこまで破綻していないうつだ。……原作よりも少しばかり仲が良い様子である。

一人が出ていき、ほんのちょっとだけ静けさを取り戻したFクラス。しかしそれでもバカ共の怒りが収まるわけはなかつた。

「とにかく、堪忍しやがれ……！」

「お前、たまに島田や姫路レベルの嫉妬を見せることがあるよな……」

「せからしか！　御託はいいけんむりをとしこよ？」

「何故に博多弁！？」

律儀に突つ込みながらもエアガンを放つ光一。愛斗は上半身を最低限捻ることでその全てを回避した。

そして、被弾した卓袱台がけたたましい音を立てて粉碎する。

「…………！」

「ちつ、相変わらず嫌な反射神経してやがる」

「お前絶対殺す気だつただろうー？ どんな攻撃力なんだよ、そのエアガンー！」

「俺の拳銃をそんじょそこらのエアガンと一緒にされてもういちや困るな。……これは、フルチューンバージョンだ」

「そんな情報は聞きたくなかった！」

元々攻撃力が高い武器を更に改造して使うのか、というツッコミも頭に浮かんだが、それを口に出す暇は全くない。光一は一ミリたりとも遠慮せずにゴム弾をぶつ放す。

「ほりほり、どうしたどうした！ 逃げてばっかりじゃいつまでたつても勝てねえぞ？」

「調子に乗りやがつて……『変身』？」

キーワードを呟えると同時に愛斗の身体がまばゆい光に包まれる。そして次の瞬間には、今までとは全く違う姿をした、五月雨愛斗が毅然とした様子で光一を見上げていた。

「いい加減にしないと、風穴開けるわよ！」

「…………小っちええ…………」

「なんですかー！？」

変わり果てた愛斗の姿に思わず言葉を漏らす光一。

神崎・H・アリア。二丁拳銃と一本剣を使つ、S級武僧である。某アニメに登場するヒロインだが、今回は説明を省かせてもらおう。アリア（以下、変身が解除されるまで呼び名はこれ）は愛用のロルト・ガバメントを太腿のガンホルダーからさつと抜き出すと、光一の眉間に向けた。

「アンタ……死にたいの？」

「ちょっと待て。それは実弾か？ それともゴム弾か？」

「何言ってんの？ 武偵が偽物なんて使うわけないでしょ。勿論、実弾よ」

「はい、ダウトオオ

ツ？」

光一がアリアをビシイッと指差す。どうやらさすがの光一でも相手が実弾となると恐怖心がわくようだ。

光一は冷や汗を垂らしながら捲し立てた。

「実弾とか完全にアウトだろ！ 『冗談で済むよー』とか『ちょっと痛いだけだから』じゃ収まらないからな！？ いくら俺が動体視力が良いつて言つてもそれはシャレにならん！」

「大丈夫。一発で終わらせてあげるから」

「そういう問題じゃねー？」

バンッバンッと放たれていく銃弾を必死にかわす光一。クラスメイト達も被害を被らないよう卓袱台を重ねてバリケードを作つている。

しかしまあ……普通に学校の、しかも教室でこんな銃撃戦が行われるなんて……流石は文用学園である。

数分ほど経ち、とうとう弾が切れたのか、それまで嵐のように撃たれていた銃弾がピタリと止んだ。

「ちつ……弾が……」

「隙あり！」

光一がエアガンを発射する。弾は対清水用の最高攻撃力バージョンだ。

弾を詰めていたアリアは飛んでくる銃弾をなんとかかわそうと試みたものの、動作が間に合わず鳩尾にそれを喰らってしまった。

「う、っ？」

為すすべなくアリアは壁へと叩きつけられる。そして、同時に全身を光の粒子が包み込んだ。

「うぐう」

「やつと元に戻りやがったか」

変身が解けた状態で蹲っている幼馴染のもとへと足を進める光一。愛斗は腹を抑えながらキッと光一を睨みつけた。

「おのれ光一……今日帰つたら覚えておけよ……」

「まだ朝なんだが？ 隨分と早急な死刑宣告だな」

「つるせえ……ガクリ」

わざわざ声に出して氣絶したことを表明する愛斗。光一は「はあ

……」と溜息をつきながら携帯を取り出した。

無言でとある番号をプッシュし、ホールする。

『…………もしもし？』

「あ、優子か？ ちょっと預かってほしいバカがいるんだけど」

愛斗の人生が、終了する瞬間だった。

放課後、久遠家にて。

「愛斗、風呂沸いたぞ」  
「オツケ、ありがとな」  
「どういたしまーして。それにしても、鍵を壊すとはお前もホント  
にバカだよな」  
「うう……言い返せない……」

光一の発言に愛斗はわざとらしく胸を抑えてのけ反る。

今朝の騒動で光一から放たれた銃弾。それが見事に愛斗の鍵を粉

碎したため、今夜は光一の家へと泊まりに来ていたのだ。

光一が包丁を取り出しながら台所へと向かう。

「まったく、お前も少しばかり落着けよな」  
「つるせえよ。俺は昔からこんなヤツだつての」  
「だから尚更言つてんだよ。優子も呆れてたぜ?『愛斗があのバ  
力集団と同じようなノリになつてきてるわ……』つてむ」  
「やう言われてもなあ……」

ポスンとソファに座り込む愛斗。

愛斗にとって、Fクラスの皆はもはやかけがえのない仲間も同然だ。それはFFF団の奴らも同じ。しかも、仲間のノリにはとことん着いていくというのが愛斗の信条だったりする。

愛斗は苦笑しながら言った。

「お前達に迷惑をかけているのは重々承知しているさ。優子にだってとばつちりがいつているのも。でもさ、俺はそれでもあいつらと一緒にバカ騒ぎするのが好きなんだよ。いくらお前や優子が止めたとしても、それだけはずっと変わらない」

「……まあ、いいんじゃねえの？ 来たら来たで毎回返り討ちにすりやいいだけだし」

「ははっ、そりゃ怖いな」

五月雨愛斗と久遠光一。

性格は全く正反対の二人だが、お互いがお互いを信じあつてゐることは確かなようである。

ちなみに、廊下のドアから某木下優子が二人の様子を顔を赤くしながらノートに書き留めていたのだが……これはまったくの余談である。

次の日から『光一×愛斗』という薄い本が女子の間で大流行することとなつたのも、完全なる余談であるということをここに記しておこうと思つ。

番外編　『万能演人』と『過激派筆頭』の日常（後書き）

感想、お待ちしています。

## 第十四問 たとえバカだらうが神童だらうが必死に考へるとときは精一杯考へる

「んにちは。

多すぎる宿題に今日も頭を抱えているふゆいです。  
この頃小説の更新が滞ってるなあ……。

## 第十四問 たとえバカだらうが神童だらうが必死に考えるときは精一杯考える

「して、どうやって戦争を回避するのか、考へておるのか？」

隣の秀吉が足を進めながら質問していく。

秀吉の質問ももつともだ。雄一に啖呵切つてまで教室を飛び出したのだから、絶対に成功させなければならない。

しかし……愚問だな、秀吉よ。そんなの

「無計画に決まっているじゃないか」

「…………お主、たまに明久以上のバカになるのじやな」

お、俺をそんな目で見るなつ。悲しくなるだらう。

しかしまあ、実際のところ本当に無計画。なにしが、俺は雄一ほど頭が回るわけではないし、明久のように根性で押し通せるほど意志は強くない。

唯一の案といえば、幼馴染のよしみでなんとかするべらこのものだ。

「とにかく、当たつて砕けろだ」

「砕けたらダメじゃ」

冷静に突つ込みを入れてくる秀吉。こんな状況でも一切動じない

「イツは、やつぱり一流役者である。

そんなこんなで、新校舎のBクラス教室へと到着した。

秀吉とアイコンタクトを取り、「クンと頷く。

「「……セーのう」」

ガラツ

「根本恭一を出せええええええええええええ？」

..... ? ፳፻፲፻

Bクラスの皆様、とても良いお顔、ありがとうございました。

クラス代表の雄二が教壇に立ち、会議を仕切っている。基本的にバカしかいないこのクラスが、あれほどの複雑な作戦を実行できるのはひとえにこの少年のおかげと言つても過言ではないだろう。

雄二の作戦について、クラスメイト達が近くの人とヒソヒソと話し始める。Dクラスを下した彼らではあるが、今回は更に格上のBクラス。少しでも勝率を上げなければならないことはバカの彼らも重々承知しているつもりだろう。

「坂本」

と、ざわめきの中で一人の男子が雄一の名前を呼んだ。雄一はその声の主を見ると少し驚いたよつに片眉を吊り上げる。

「お前が作戦について反応するなんて珍しいな……須川」「つむせえよ」

後ろ髪を少し刈り上げた短髪の少年、須川亮が雄一の失礼な発言に怪訝な顔をする。Fクラス主要メンバーの雄一達ほど目立つてはいないが、前回のDクラス戦でもそれ相応の働きをした、主戦力の一人である。

雄一は謝罪代わりに片手を翳したが、すぐに真剣な顔つきになると、話を促す。

「それで？ 質問があるんだろ？」

「ああ。……Bクラス代表、根本恭一についてなんだがな……」

その瞬間、ザワツと教室が一段と騒がしくなる。

根本恭一。以前にも述べたとおり、卑怯卑劣で名の知れた悪い意味での有名人だ。同時に、五月雨愛斗の悪友でもある少年。無論、このクラスでも彼は悪役としてしか知られていない。だからこそ、彼らは一様に恭一の人物像に反応を示したのだ。

亮は皆の反応に軽く頷きつつ、言葉を続けた。

「坂本はさつき、『卑怯で知られた根本恭一』って言つたよな？」

「ああ、そうだが？」

「俺も、その認識 자체は間違つてはいないと思うんだ。実際、去年のアイツの噂だって随分とアレな内容だったしな。……でもさ、そんな卑劣な奴だつてわかっているはずなのに、五月雨と木下はどう

して交渉なんていう無謀なことを考えたんだ?」

「………… たあ? あいつらにも何か策があつたんじゃない?」

「戦争は避けられるならそれに越したことはないからな」

「でも、それにしてはおかしな点が多すぎる。そもそも、五月雨はあんなに突発的に行動するようなバカじやない。それに、あのときの五月雨の表情も不可思議だつた。『万能演人』や『萌えの王者』とまで呼ばれているアイツにしては、珍しいくらいの動搖つぶりだつたぜ?」

「お前も随分と懐かしい一いつ名を引っ張つてくるな。それを覚えている読者なんているのか? ……だが、言われてみればそうかもしがねえ。あの時の愛斗はこつもの愛斗らしくなかつたな」

今の雄一の台詞に、メタな発言があつたことを心からお詫びさせてもらいたい。

亮はそんな雄一の失言に構いもせず、話を進めた。

「だらう? 後、これは根本本人に對してなんだが……去年もちょくちょく見かけていたことがあるんだ」

「見かけていたこと?」

「Bクラスにさ、安藤雪奈つていう口リリつ娘がいるだろ?」

「ああ、あのロングヘアのチビか。そいつがどうかしたのか?」

「その安藤がさ、いつも根本に付きまわつていたんだよ」

「…………だから? 結局何が言いたいんだ?」

「つまりさ、滅茶苦茶卑怯な根本に、あんな純真無垢な安藤が懷いているつていうのは、おかしな話だとは思わないか?」

「…………なるほど、そう言われてみると、そうだな」

亮の言葉に、深く思考し始める雄一。確かにおかしなところが多すぎた。

雄一の肯定で自分の考えへの確信が深まったのか、亮は真剣な面

持ちで言い放つた。

「おそれくなんだが……根本恭一は、本当は卑怯でもなんでもなかつた上に、実は五月雨や木下が思わず庇おうとしてしまつてしまい奴なんじやないか？」

亮が発したその言葉によつて、Fクラス42台の醸し出す空氣の温度が凄まじい勢いで下がつていつた。

第十四問 たとえバカだらうが神童だらうが必死に考へるとときは精一杯考へる

感想、お待ちしています。

第十五問 本当に大切なものは勉強でも運動でもなく……。（前書き）

「んにちは。

最近応募用の小説を書いている、ふゆいです。  
ときどきアイデアが出て来なくなるんですよね……ま、楽しいから  
いいですけど！

それでは、第十五問です。最近なんだかシリアスだなあ……。

## 第十五問 本当に大切なものは勉強でも運動でもなく……。

「 と、 いうわけなんだ」

「 なるほどな。 つまり、 お前達は俺達Bクラスに協力を申し入れに来たわけだ」

向かい合わせに並べられた席に座り、 恭一に用件を述べた俺。 恭一は全てを理解したようにウンウンと頷いてた。

その恭一の反応を好感触ととったのか、 秀吉が目を輝かせながら恭一に詰め寄る。

「 で、 では承認してくれるのじやな！」

「 だが断る」

「 .....は？ む主、 今なんと」

「 断るって言ったんだよ。 木下弟」

秀吉を冷たくあしらへ、 もむるひに席を立つ恭一。 ..... やっぱり、 そう来たか。

呆然と立ひくしてこの秀吉を尻目に、 恭一が淡々と告げていく。

「 確かに、 学年最底辺のお前達FクラスがAクラスを倒すためには、 俺達の協力が必要不可欠なんだろ。 そりゃねえと話も聞いてくれないだろうからな」

「 そ、 そりゃ！ だからワシらはこいつって頼みに」

「 だが、 それは俺達Bクラスにとつてどんな利益をもたらすつていうんだ？」

「 そ、 それは……」

「 最下層クラスに駒として使われた弱小クラスという肩書。 それだけじゃねえ、 仮にもAクラスに負けてしまったからクラス設備まで下

がつちまうんだぞ？ そんな危ない橋をそやすやすと渡つてくれるとでも思つていたのか？ てめえは。だとしたら、ずいぶんと甘ちゃんだぜ」

「…………

恭一の言葉に、言葉を失い俯くしかない秀吉。確かに恭一の言つとおりだ。

今回の戦争は俺達が勝手に始めた、ただの下剋上。他クラスにとつてはいい迷惑でしかない意味のない争いだ。無理に手を出してペナルティを受けてしまうような危険は誰だつて御免被るだろ？

雄一はそれを分かつていて。だから、危険を冒してもBクラスを配下に付けようとして戦争の計画を練つていたのだ。

……でも、だからって…… 親友を無理やり抑えつけようの真似は俺にはできない。だからこそ俺は雄一に無理を言つてまで敵陣に乗り込んできたんだ。今更こんなところで退くつむりはさらさらない！

俺は突然バンッと威圧的に机を叩いた。いきなりの暴挙にBクラス生徒達が一様に俺の方を見る。

「恭一、どうしても協力する気はないんだな？」

「……ああ、勿論だ。俺は仲間達をみすみす危険にさらすような真似は絶対にしたくない」

「……オッケー、それなら、いひしょひじやないか」

そういうて携帯を取り出しどある番号くとホールする。同時にディスプレイに表示される『須川亮』の文字。

何回かのホール音の後、ガチャリと電話の相手は通話を開始した。

『もしもし？ どうしたんだ？ 五月雨』

『須川、頼みがあるんだが、いいか？』

『ああ。それで、頼みつて?』

「突然なんだけどな。…… Bクラスの教室に、鉄人を連れてきてほしいんだ」

『……は? どうしてまた急にそんなことを……』

「なに、大したことじやないさ。ただな」

「

俺はそこで一回会話を止めると、恭一を一目見て、教室中に響くくらいの声で、言い放つた。

「IJJの代表に、模擬試合戦争を申し込むだけのことだよ」

『IJJの代表に、模擬試合戦争を申し込むだけのことだよ』  
「なん……だと……?」

電話の向こうから聞こえた愛斗の台詞を聞いて、Fクラス代表坂本雄一はそんな驚きともとれる呟きを漏らした。

突如として亮にかかってきた電話。不審に思った雄一はそれを横から聞いていたのだが……思っていたよりもずいぶんと切迫している内容であるようだ。

「貸せつ」

「のわつ」

背筋に悪寒が走った雄一は、乱暴氣味に亮から携帯を奪い取ると、大声で怒鳴った。

「おー、愛斗！ てめえ何考えてやがるー！」

『……雄一か。なにをキレているんだ？ お前は』

「なんでじやねえよ！ 勝手に先行しまくった拳句最終的には『代表に一騎打ちしかけます』だと…？ 少しぐらい俺達に相談してから決めろよ…！」

『……すまん。でも、そんな状況じやないんだ』

「…………どういふことだ」

愛斗の静かな物言いに思わず押し黙る雄一。 愛斗は一皿溜めるよつこ黙ると、真剣な口調で言った。

『雄一達には悪いと思つてゐる。作戦全部ふいにしてその上自分勝手な行動してんだからな。でも、それでも俺は、コイツを…恭二を説得しなきやいけねえ。それが俺なりのお前達への誠意だし、なにより幼馴染としてコイツとやりあわなきや、お互に意見を聞かねえと思つんだ』

「…………だつたら、どうするんだよ」

『模擬試合戦争で、恭二を倒す。そんで、俺達の要求を飲んでもらう。…………それだけだ』

『クラスの命運を俺に任せてくれ』

つまり愛斗はそう言つてゐるのだ。『そんな屁理屈……』と雄一が再度文句を言おうとする。…………そのときだった。

「愛斗にさ、任せてみない？」

突然発せられたキーの高い声。雄一が思わず音源の方を振り返る。

「明久……」

「ねえ雄一。愛斗にだつて何か策があるはずだよ。今までだつてそうだつたでしょ？ いつも何か作戦を立ててから行動してたよね。『萌えの王者』とか『万能演人』とか言われている愛斗なんだ、絶対にやつてくれるさ」

「……お前は、いいのか？」

「うん。僕は愛斗を信じている。アイツなら百%勝つと思っているし、負けるわけないじゃないか。なんたつてFクラスの要なんだから」

そういうと明久はニコッと笑った。

(……そう、だな……)  
「信じてみるか」

雄一が再び携帯を顔に当てる。そこには、さつきまでのよつな険しい表情は全く存在しなかつた。

「愛斗」

『…………なんだ？』

「俺達はお前に賭けることにした。俺も、明久も、ムツツリーニも、姫路も、島田も、須川も……そして、クラスの皆さん。お前が絶対勝つことを信じている。……だから、絶対に負けてくんない。それだけだ」

『…………サンキューな、雄一』

「いいさ、ただし、負けたら承知しねえからな！ 相棒？」

『分かつてるよ、相棒？』

ピッと雄一が電源ボタンを押し、通話を切る。そして、戦友たちの方を振り返ると、快活な笑顔で言った。

文月学園第一学年Fクラス。

彼らは学園中で最も男らしい集団である。

「つて、ウチらは女なんだけど」「一纏めにされちゃいましたね……」

第十五問 本当に大切なものは勉強でも運動でもなく……。（後書き）

感想、コラボの承諾、お待ちしています。

## 第十六問 それぞれの思い（前書き）

こんにちは。後期補習真っ最中のふゆいです。  
三人称と一人称、使い分けが難しいですよね。  
それではお楽しみください。

## 第十六問 それぞれの思い

文月学園体育館。

愛斗と恭一は、お互いを睨みつけるかのように対峙していた。

Bクラス代表とFクラス生徒との一騎打ちという聞いたこともないような無謀な戦い。その噂をどこからか聞きつけて、学年クラス問わず多くの学生がこの戦いを観戦しに、野次馬根性丸出しで集まつている。

「……それでは、準備はいいか？ 二人とも」

立会教師の鉄人こと西村宗一が一人に確認をする。

「もちろん、いつでもいけるぜ」

「はい、大丈夫です」

相変わらず敬語を使わずに返事をする愛斗と落ち着き払った様子の恭一。

そんな一人の周りでは、数えきれないほどの観客が試合開始を今か今かと待ち続けていた。

「な、なんか凄いね……」

Fクラス専用特設座席に座っている吉井明久が顔をひきつらせながら会場の雰囲気に冷や汗を垂らす。

最初は一年生だけの戦争だったのにもかかわらず、いまや全校クラスの規模になってしまっているこの戦争。そもそも、最下位クラ

スであるFクラスが上位クラスを下したという事実が最早信じられないものである為、他学年の生徒は、そのFクラスとはどんなもののかに多大なる興味を示していた。

そんな明久の咳きに、隣に座っていた坂本雄一が腕を組んでふんぞり返りつつ言葉を返す。

「そりゃあ、俺達みたいな落ちこぼれがここまで奮戦していたら、どんな奴らでも興味は持つと思うぜ？」

「それはそうだけどさあ……まさか、こんな大袈裟になるなんて思つてもみなかつたよ」

「……それは同感だな。学園長は一体何を考えているのやら」

本来ならばBクラスの教室だけで収まっていたはずなのだが、どこからか駆けつけた学園長の藤堂カヲルがこんなことを言い出したのだ。

『どうせなら、学園総出で行おうじゃないかい』

Fクラスが勝利すれば勉強の苦手な生徒への励みになるし、Bクラスが勝てば上位層の自信にも繋がる。

そんな考えがあつたのだろうが、生徒たちにとつてみればただのイベントと変わらず、その上授業もつぶれるので一石二鳥だった。

「しかし……勝てるのか？ 五月雨は、相手は一応Bクラス主席だぜ？」

「須川の言つ通りかもしれないわね……いくらAクラス候補の五月雨と言つても、隙を突かれれば負けかねないわ……」

亮の咳きに美波が同意を示す。それほどまことに、このクラスの差は大きかったのだ。

そんな一人の反応に、秀吉と瑞希、そしてムツツリーが反論した。

「勝てるに決まっています！ 五月雨君を信じましょいよー。」

「そうじゃー、愛斗は絶対に負けたりはせんー。」

「…………愛斗をナメるな」

Fクラスメンバーのテンションは、もはや最高潮に達していた。

## Dクラス用観客席

「まつたく……なんで美春があんな豚野郎の試合を見なければならないのですか？」

「まあそう言うなよ美春。アイツは一応俺の親友なんだからさ」

溜息をつきながら嫌そうな顔をしている少女とそれを必死になだめる少年。清水美春と時雨綾斗だ。

学期初日の試合戦争でFクラスに敗北を喫した彼らだが、Fクラスの戦況が酷く気になっていたようだ。

静かにもめる一人をジト目で見ながら、Dクラス代表平賀源一がこつそり溜息をついた。

「はあ、ウチと違つてFクラスは人材が豊富みたいだね……」

どうやら彼も相当苦労しているようである。

Bクラス専用特設座席

「きょーちゃん……大丈夫かな……」

椅子にちょこんと座っている小動物のような少女、安藤雪奈が心配そうな声を漏らす。

そんな彼女を励ますかのように、Bクラス一人娘の岩下律子と菊入真由美が快活な台詞を言つ。

「そんな心配しないでもだいじょーぶだつてー！ なんたつてあの  
だいひょーだよ？ 負けるはずないよー」

「そうそう、代表は頭いいんだから、大丈夫大丈夫」「  
うん……」

しかし、雪奈の表情は未だに暗いまだ。

「……ちょっと工藤君、なんとかしなよ」

「俺に言つなよ……そういう芳野が安藤を励ませばいいだろ？」「…

「僕は基本的に異性とのかかわりは苦手なんだよ……」

「それなら言つなつての……」

はあ、と大袈裟にため息をつく一人……工藤信一と芳野孝之。

Bクラスは少しばかり弱気な雰囲気に包まれていた。

Aクラス用観客席

「あつ、優子優子！ 五月雨君だよつ」

「そんな大声出さなくとも分かってるわよ……」

愛斗を指差してはしゃいでいる少女と、少女に呆れた視線を送る少女……工藤愛子と木下優子だ。

愛子は優子の反応に「ぶー」と不貞腐れたように頬を膨らませた。

「優子、ノリが悪いなー。もうちょっと喜んだりしたら?」  
「なんでそんなこと言われるかが分からないのだけど」「だつてさあ……優子の好きな人なんだよ？ 五月雨君」「げほつ」

愛子の突然の確信をついた発言に思わずお茶を吹きだしかける優子。そして愛子をキツと睨むと、大声で叫んだ。

「あ、急になんてこと言い出すのよ!」  
「えー？ だつて本当のことじやん？ ボクは嘘は言つてないよ?」  
「嘘じやなかつたら良いつていうわけじやないでしょ?」  
「アタシの身にもなつてみなさい！」  
「……好きつてことは否定しないんだね?」  
「……」

愛子の指摘に優子が顔を真っ赤に染める。

「あ、愛子ー。」

「優子つたら照れちゃつて可愛いなーもつ。」

「…………ううつ、なんでアタシこんな田に会つてこるのよ…………」

お約束です。

「…………愛子、優子、試合が始まる。」

と、騒いでいた二人をAクラス代表霧島翔子が落ち着いた口調で諭す。

「はーい。ほら、しつかり五月雨君を応援しなや。」

「い、言われなくとも分かっているわよ…………。」

一や一や笑いを浮かべてこむ愛子が楽しそうに優子を茶化す。

優子はそんな愛子に呆れながらも、誰にも聞こえないよつた声で呟いた。

「…………頑張つてね、愛斗…………」

「それでは、両者準備は整つたようだな

西村が二人の様子を見て、状況を把握する。そして、大声で高らかに宣言した！

「只今より、Fクラス特別代表五月雨愛斗対Bクラス代表根本恭一との模擬試召戦争を始める?」

アアアア?『』『』

割れんばかりの歓声が、体育館を包み込んだ。

第十六問 それぞれの思い（後書き）

感想、お待ちしています。

## 番外編　『万能演人』と『紅の修羅』の少し変わった日常（前編）（前書き）

こんにちは。

まだ本編もまともに進んでいないのに再びのコラボです。でも、見捨てないで頂けると幸いです。絶対更新しますので。

さて、今回は『バカとテストと召喚獣～紅の双子姫～』とのコラボとなっています。まうさんに怒られないといいのですが……

それではお楽しみください。

## 番外編　『万能演人』と『紅の修羅』の少し変わった日常（前編）

とある休日のこと。

「　　」「　　」「　　」

FクラスメンバーとAクラスの二人　　光國葵、坂本雄一、  
木下秀吉、土屋康太、島田美波、姫路瑞希、光國楓、木下優子  
は商店街の電信柱に身を隠しながら、前を歩いている二人組  
を訝しげにじいっと見つめていた。

「おい……マジなのか……？」

「あたしに聞かないでよ……」

「…………怪しい」

雄一の咳きに葵と康太が続く。

そこにいる全員が冷や汗を垂らしながらこんな言葉を漏らしてしまつくらい、今現在彼らの目の前で起こっている事態はあまりにも不自然だつたのだ。…………そつ。

「ほらほらー、早く行くぞ、明久」

「あ、ま、待つてよ愛斗！（ガシツ）」

「お？　随分と積極的だな」

「愛斗が早かつただけでしょ……」

「そうか？　まあ別に構わないが」

…………『万能演人』五月雨愛斗（ ）と『観察処分者』吉井明久（ ）が仲睦まじく腕を組みながら歩いていたのだ。

「　　」…………「　　」

その場にいるメンバー全員が思わず顔を見合わせる。

そもそも、なぜこのよつた事態になってしまっているのか。

それは、昨日の放課後にさかのぼる

金曜日の授業が終わり、後は週末を迎るために帰宅するだけとなつた放課後。

クラスメイト達が荷物を持ち各自の目的地へと向かっていく。

それは『観察処分者（学園一のバカ）』である吉井明久も例外ではなかつた。

「　　」

陽気に鼻歌を歌いながら帰り支度をする明久。  
荷物を纏め終わり、席を立とうとした時だった。

「明久」

突然、後ろから声をかけられる。

持ちかけた荷物を再び卓袱台に置くと、明久は後ろを振り向いた。

「ん？ 愛斗じゃないか、どうしたの？」

「よつ。帰ろうとしているところ、悪いな」

明久に声をかけた人物 五月雨愛斗が、謝罪代わりに片

手を翳しながら明久の前に立っていた。

明久が卓袱台に腰掛けつつ、話を促す。

「それで、僕に何か用なの？」

「ん。用つていうか……その……」

言ひにくそうに、明久と口を揃える愛斗。そんな珍しい彼の様子に、明久は頭に疑問符を浮かべている。

そして、少したつたとき、よつやく愛斗が口を開いた。

「あのせ、明久

「うん」

「…………明日、一人だけで一緒に出掛けないか？」

「…………へ？」

そのときの愛斗は頬に若干の赤みが差していた、と光國葵は語つた。

と、いうわけで。

「あたし達はアキくんと五月雨くんを尾行しているってわけよ」

「お姉ちゃん、誰と話しているの？」

「ううん、気にしないで。ちょっとした大人の事情だから」

楓の疑問にパタパタと手を振りながら葵が答える。他作品の主人公というのはいつも大変なものである。

ちなみに、今回の尾行が始まつたのは、昨日の一人の様子を見ていた瑞希と康太がそれぞれ女性陣と男性陣に報告。そして、いつも通り雄一が先導して開催を決行したからである。

「それにしても、随分と仲良さげじゃのう。あの二人は」

「そうね。まるで付き合つているみたい」

「「「つ？」」」

美波の失言に、瑞希、葵、楓の三人がビクウツと肩を震わせた。

「そ、そんなわけないじゃない。ねえ姫路さん」

「そ、そうですよつ。吉井君と五月雨君がそんな関係のわけ……な、ないじやありませんか……」

「そうだよねつ。そ、そんな非現実的など……ない、よね……」

だんだんと尻すぼみになつていく三人。

と、ここで不思議なことに気が付いた雄一がある一人の方を向きながら語る。

「あいや？ そういうえば木下姉はどうしたんだ？ アイツも落ち込んだりしているはずじゃあ……」

そう。木下優子は幼馴染である愛斗に恋愛感情を抱いているのだ。あんな一人の光景を見れば、もちろん彼女も例にもれず三人のような反応をするはずなのだが……。

雄一の疑問に、秀吉が溜息をつきながら優子を指差した。

「姉上は……ほれ」

秀吉が差した方向を全員が見る。

「愛斗は、自然と高鳴る鼓動……を、一生懸命抑えながら……明久の手をギュッと握り、しめた。それと同時に、明久の頬にわずかな赤みが、差す……」

「壮絶超展開薔薇小説『五月雨愛斗×吉井明久』バカなお前は俺のもの～』を絶賛執筆中じゃ」

「…………」

そこには、今にも鼻血が出らんほどに顔を赤らめながら荒い鼻息で携帯電話のボタンをプッシュしている優子の姿があつた。

そんな彼女を見て、一同が言葉を失つ。

「優子ちゃん……そんなことを……」

「木下姉だけは、マトモだと思ってたんだがなあ……」

「…………予想外」

「木下さんつて意外とこの女趣味なのね……」

「……へ？ みんなびしてアタシの方をそんな可哀想なものを見る  
よつた目で見ているの？」

「「「なんでもない」」

「わや、逆に気になるんだけど……ま、いいわ

そう言って再び執筆作業に移る優子。もう駄目だこの人重症すぎ  
てヒロインっぽくなくなってる（地の文です）。

そんな感じで優子の真の趣味が発覚したあたりで、黙つて一人の  
様子を伺っていた葵と瑞希が声を荒げた。

「あっ、ちょっとみんな！」

「吉井君達が喫茶店に入つていきましたよ！」

残りの全員が慌ててそちらに顔を向ける。

そこには一人で仲良く笑いあいながら喫茶店のドアを開ける一人  
の姿がまばゆいばかりに存在していた。  
しばらくの沈黙がメンバーに訪れる。  
そして、よつやく雄二が口を開いた。

「……わて、どうする？ このメンバーだと確実にアイツらにバレ  
ちまう。かといってここで解散するのも勿体ねえ」

「どうするつて……」

「…………少數精銳で動くしかない」

「……じゃな」

康太の言葉に、コクン、と全員が頷く。そして、瞬時に右手を前  
に突き出した。

雄二  
葵  
グー

瑞希 チヨキ  
康太 グー<sup>1</sup>  
秀吉 グー<sup>1</sup>  
美波 チヨキ  
優子 グー<sup>1</sup>  
楓 チヨキ

「んじゃ、これで決定だな」

「ふう……危なかつたあ」

「うう、気になりますよう」

「…………ラッキー」

「うむ、しつかりとやるかの」

「てか、ウチは実際どうでもいいんだけど」

「愛斗と吉井君の…………うふふ」

「優子ちゃん、キャラが変わってるよ」

勝利した五人と負けた三人が対照的な反応を見せる。つーかアンタら、そんなにクラスメイトの秘密を知りたいのか。

「そんじゃ、後は任せとおけ」

「わかりました……」

「さて、ウチも帰りますかね」

「あつ、島田よ。ワシが送つていいくぞい」

「え？ でも木下はメンバーでしょ？」

「気にするでない。後から合流すればよいのじゃからの。な、雄二」

「ああ、構わねえから行つてこい」

「うむ、それじゃあ行こうぞ、島田」

「う、うん」

「お姉ちゃん、『ご飯作つておくからね？』

「りょーかい。じゃーね」

四人が元来た道を引き返していく。それを見送り、葵達は喫茶店へと入つていった。

感想お待ちしています

こんにちは。

今回は前回の続きとなっています。  
なんか無理やりな展開だなあ……。

一人の後を追つて、喫茶店へと入った葵、雄一、康太、優子の四人。

愛斗達に見つからないように、彼らからは死角となる席へと陣取った葵達は、メニューで顔を隠しながら、こつそりと一人の様子を伺つていた。

「明久はホンシットバカだよな～」

「あ、愛斗にそんなこと言われたくないよつ

田の前には、顔をやや朱に染め、そっぽを向いている明久と、それを見て楽しそうに笑つている愛斗の姿がある。

「…………（グシャツ）」

「落ち着け光國。お前の気持ちはよく分かるがとりあえずその今にも粉碎されそうな「ツップを早く置け」

一人の仲睦まじい様子に葵が怒りを露わにする。彼女の反応も無理はない。女である葵が一緒にいるときも、あんな照れたような表情はめつたに見せないのだし、その上その相手が男の愛斗なのだ。込み上げてくる怒りも凄まじいものだらう。

「うう、アキくん……」

「……とはいったものの、流石にあれは不自然だな……」

机に突つ伏して涙目になつている葵を慰めながらも、雄一は思考をめまぐるしく張り巡らせる。

（そもそも、あいつらは同性愛者じゃねえ。それは昔からツルんでいる俺が一番よく分かっている。明久だつて、久保から好意を向かれた時は寒気がすると言つていた。ということは別にアブノーマルに目覚めたわけでもない……。一体どうなつてやがんだ……？）

全く状況が掴めない雄一の額に冷や汗が流れる。……そんなとき、

「…………（クワツ）」

「？ デリした、ムツツリーーー」

突然、隣の康太がカツと皿を見開き、傍らに置いてあるカメラに慌てて手を伸ばしたのだ。

雄一がつられて康太の視線の先を見る。

「愛斗、そのパフェ少し食べさせてくれない？」

「ん？ 別に構わねえぞ」

「ありがと……う」

「どうした？ 急に手を止めて」

「いや、その……このままだと、お互いのパフェの味が混ざっちゃうそうで……」

「ああ、そんなことか。…………ほりよ（ヒヨイシ）」

「え？ いいの？」

「仕方ねえだろ？ お互いのスプーン使うしか方法ねえんだから」

「う、うん……そ、それじゃ……あーん……」

「ん」

「（パクツ）…………うん、美味しいよ」

「そうか、そりやよかつたな。そんじゃ次はお前のをくれよ  
「うん」

「…………」「…………」「…………」

明久と愛斗がそれぞれのスプーンでお互いのパフェを食べさせあつていたのだ。

「「ぐふつ」」

そんな光景を目撃してしまった雄一と葵が一人そろつて昏倒する。葵に至つては、両目から血涙まで流していた。

「そんな……バカな……」

「アキくん……やつぱり男の方が好きなの……？」

「…………（カシャカシャ？）」

「…………（ガチャガチャッ？）」

そんな二人の困惑を他所に、康太と優子はそれぞれカメラと携帯電話を巧みに操つていく。

「…………掘り出し物」

「はああ……これは売れるわ……傑作よつ

「お前ら……この状況でよくそんなことができるな……」

二人の行動に、雄一が溜息をつく

雄二の質問に優子は「あはは」と笑いながら答えた。

「だつてさ、愛斗が同性愛者じゃないってことぐらいみんな知つているでしょ？ アタシだつてそんなことは百も承知よ。それに、あの一人はいつもの延長上のことをしていいだけっぽいし」

「延長上つて……バカップルもびっくりなことやつてているんだが」

「それでもね。だつてあの吉井君と愛斗なのよ？ THE 鈍感コンビがあんな積極のことするわけないじゃない」

「…………こつもの調子」

「そりかなあ…………それだといいんだけど」

よつやく復活した葵がノロノロと体を起こしながら言つ。

しかし、そつはいつても心配なものは心配である。

葵達は引き続き、一人の監視を再開していた。

「あ、そういうえば……」

しばらくたつた時、突然愛斗が口を開いた。

「うん？　どうしたのさ、愛斗」

「いやさ、そういうえば今日、晩飯の材料買つてないなーって」

「ふうん…………じゃあさ、僕ん家に来たら？　」馳走してあげるよ？

「え？　でも、お前そんな金あるのか？」

「大丈夫。葵達が管理してくれておるおかげで貯金があるからさ」

「そりか…………じゃ、お言葉に甘えるとするよ

「うん…………今日は寝かさないよ？」

「…………？」

明久の唐突な発言にメンバーが目を丸くする。

「なん…………だと…………？」

「い、いや、聞き間違いよ。吉井君に限つてそんなこと…………」

「…………驚愕」

「あ、アキくん…………」

他者多様の驚きを見せる四人。あんなに余裕そつとしていた優子でさえ、驚きを隠せないようだった。

しかし、そんな四人に追い打ちをかけるように会話は続いていく。

「おいおい、そりや困るな」

「何言つてんのや。……愛斗も楽しみなくせに」

……まあ、な

「…………？」

言葉も忘れ、尾行組が口をパクパクと開閉しながら顔を見合わせる。

そこで、ついに一発の爆弾が投下されてしまった。

「絶対気持ちいい筈だから……ね？」  
わ、わかつた……

両者ともに頬を染めつつ複雑な表情をしている。……そして、とうとうの方が怒りを露わにした。

「お、おい光國！」

『紅の修羅』 光國葵が、顔を真っ赤にしながら一人の方へ大声で叫んだのだ。

葵は雄一の制止も聞かず、そのまま一人に走り寄る。

「は、はい？ どうつてなにが

「とぼけないで！ 五月雨君と何をするつもりだったの！」

「何つて……普通に家に泊めてあげようかと……」

怒髪天をつくを表現するかのようにおさげを怒らせている葵にOccurred  
きながらも、明久が返事を返す。

そんな中、今まで呆気にとられていた愛斗が葵と明久の間に入り  
込んだ。

「やめろ、光國」

「五月雨君！ アンタ一体アキくんをどうするつもりなのよー！」

「まず落ち着け、話はそれからだ」

「これが落ち着いてられるかあああああああああああああああ  
あ？」

ズガソ、と葵が目の前のテーブルに拳を振り下ろす。  
その瞬間、テーブルが小気味よい音と共に粉々に砕け散つた。

「 「 「 ..... 」 」

いきなりの暴挙に言葉を失う雄一、康太、優子の三人。

しかし、そんな中でも愛斗だけは混乱せずに葵を必死に止めてい  
た。

「だから、落ち着けって言つているだろ！？ お前は何か勘違いを  
している！」

「勘違い！？ どこが！ あの会話のどこに勘違いする要素があつ  
たの！？」

「だあかあらあ！ ..... あーもつ！」

「明久が『寝かせない』って言つたのは、徹夜でゲームするつてこ  
とだ！」

「 「 「 ..... < ? 「 「

シン、と喫茶店内が静まり返る。愛斗はゼーゼーと肩で息をしながら言葉を続けた。

「お前らが商店街の辺りから尾行していることは気づいていた。だから、どうせ俺と明久が恋仲になつたんじゃないか、とか訳のわからないことでも考えていたんだろう?」

「 ..... う、うん」

「まったく..... 迷惑なことを。とりあえずだな、さつさまでの俺と明久のアレは別にイチャイチャしていたわけじゃねえ。ただの天然だ。だから、お前の心配するようなコトは起きてねえよ」

「じ、じゃあ、『気持ちいい』つていつのば.....」

「んあ? ゲームで勝つことが、つていう意味だよ」

「 ..... はあ」

葵が深い溜息をつく。自分の心配してこむみつないことじやなかつたのだから、安心するのもわかる。

..... しかし、

「最初から紛らわしここにしてんじゃねえよこのバカあ

?」

彼女の怒りは収まらなかつた。

先日の薔薇騒動から一月後の月曜日。  
葵と明久は一人仲良く登校していた。ちなみに楓は口直らしく一人より先に家を出ている。

「まつたく、アキくんつたら……」

「あはは、『メンね、葵』

怒ったように明久の前を歩く葵に力なく微笑む明久。おとといの事件から明久は葵に頭が上がらなくなっていた。

「もういいよ……ん？」  
「どうしたの？」

ピタリ、と葵が突然足を止めた。不思議に思つた明久が葵の視線の先を見ると……。

『完売御礼！』『五月雨愛斗×吉井明久／バカなアイツは俺のもの』『祝・五百部完売！』

優子著、伝説の作品についての張り紙が、一年生の廊下掲示板に、でかでかと貼られていた。

「…………（フルフル）」  
「あ、葵……？」

拳を握りしめ、震え始めた葵に冷や汗を垂らしながら近づく明久。

次の瞬間、葵は力の限りに叫んでいた。

「Jの学校はバカばっかりか

？」

ちなみに余談だが、葵がこの本を楓にプレゼントされたのはJの  
だけの話だ。

はい、どうでしたか？

「ごめんなさいまつさん。葵のキャラがうすくなつちゃいました〇一」  
次回からまつさんと本編を更新したいと思います。

……スピード要素出でうつと思つていたんだけどな……。

感想、お待ちしてます。

第十七問 勝利の為にはなにかしら対価を払わなければならぬ（前書き）

こんには。 今日も絶好の執筆日和ですね（笑）

今回から本編です。 しかも今回は愛斗があの方に変身します。  
またあいつかよ、とか言わないでくれると嬉しいです。

それでは、どうぞ

## 第十七問 勝利の為にはなにかしら対価を払わなければならない

「「試験召喚?」」

二人の喚び声に応じて、お互いの召喚獣がファイールドに姿を現す。赤コーナーには、学生服にザク装備を携えた愛斗の召喚獣。そして、対する青コーナーには、山伏のような格好で一対の鎌を両手に持つた恭一の召喚獣が存在していた。

一人の点数が召喚獣の頭上に表示される。

|       |       |    |      |       |
|-------|-------|----|------|-------|
| 『Fクラス | 五月雨愛斗 | VS | Bクラス | 根本恭一  |
| 総合科目  | 3659点 | VS |      | 3584点 |

ザワツと会場全体に動搖が走った。

『おい……なんだあの点数は……?』

『Aクラス、しかも上位並みの点数じゃないか……』

『本当に最下位クラスとBクラスなの……?』

それぞれ驚嘆の反応を見せせる生徒達。しかし、彼らが驚くのも無理はない。

「学年最底辺クラス」と揶揄されているFクラス。そこに所属する生徒が自分達よりも遥かに高い点数を取っているのだ。驚きたくもなるだろう。

「へえ……随分と頑張ったみたいじゃないか、恭一」「まあな。この試合の前に回復試験を受けさせてくれたのが有難かつたぜ」

お互いの点数を見てニヤリと笑う愛斗と恭一。

点数が表示されたと同時に、一人は召喚獣を下がらせ、相手との距離を取った。

「……考えている」とは同じってわけか

「そつみたいだな。……それじゃあ

「

「ガチャン口勝負だ」

さう言つや否やお互いの獲物をしっかりと構えて走り出す召喚獣。

「喰らえー！」

先手を取つたのは愛斗だつた。

咄嗟に召喚獣の脚を止めると、腰に付けていたザクマシンガンを恭一の召喚獣めがけて乱射する。

「つらあ

「ちいっ！」

「つ？」「

雨あられのように降り注ぐ弾丸を、恭一は最低限の動きを心がけつつかわしていく。

しかし、まだ召喚獣の扱いに慣れていないためか、何発かをマトモに喰らつてしまつた。

『Bクラス 根本恭一 2864点』

「くそつ……テメエ……」

「お？ どうしたBクラス代表。もうギブアップか？」

「な……嘗めてんじやねえぞ愛斗お

？

絶叫と共に、恭一があらん限りの斬撃を加えていく。

腰、肩、足……的確に、それでいて迅速な恭一の攻撃に愛斗は反応が遅れてしまった。鎌が振られる度に、愛斗の召喚獣が傷ついていく。

『Fクラス 五月雨愛斗 2763点』

「ぐつ……」

召喚獣が斬られると同時に、愛斗が苦しそうに片膝をつく。フィードバックの影響によるものだ。

『変身』能力を付与したために発生するフィードバック。召喚獣の操作性が観察処分者並に向上するといつ利点はあるものの、受けるダメージは召喚獣自身の五分の一と、明久が受けるフィードバックのおよそ一倍。

そんな計り知れないほどの衝撃に、愛斗の身体はみるみる蝕まれていいく。

「畜……生……」

「どうした、Fクラスさんよ？ いくらAクラス候補だつたといつても、この一週間の間でバカに染まつちまつたらただのクズなのか？ ああん？」

痛みに耐えながらもヒートホークで応戦する愛斗を小馬鹿にするよびに恭一が中指を立てる。

操作技術では恭一を遙かに上回っている愛斗だが、本隊で受けるダメージが邪魔をして上手く召喚獣に支持を送ることができない。結果的に、格下の恭一相手に苦戦を強いられている。

表示される一人の点数。点数で勝っていた愛斗であつたが、今や300点ほどの差をつけられている。最早、余裕なんてものは存在しない。

序盤で見せていました軽口もいつしかどこかへと消えてしまっていた。

「いや、流石な代表なだけのことはあるじゃんかよ」

「お前もな。Fクラスのくせになかなか善戦してくれるじゃねえか」

絶望的な状況の中、愛斗は普段使わない頭脳をフル回転させて打開策を模索し始める。

開策を模索し始める。

（どうする……？） こいつには俺の動きを阻害するほどのフイードバックが。対する恭一にはマイナス材料は何もない。3600点を超えているから、最終手段として『変身』が使えるが…… クソッ！ 結局自分の能力に頼らねえとなにもできねえのかよ、俺は！）

ギリッと歯をかみしめる音だ。

絶体絶命。まさにその言葉がしつくりくるこの状況。観客の大半が、恭一の勝利を半ば確信し始めているだろう。  
もう、ダメなのか……と諦めかけた……その時。

1  
?

吼えるような喝が満身創痍の愛斗に突き刺さる。

聞き覚えのある声だつた。……いや、そんな程度のものじゃない。声の主は、観客席で立ち上がり、睨むように愛斗を見据えている。

赤い髪のような髪を雄々しく逆立てながら、坂本雄一は叫び続け  
る。

1000

数秒の沈黙が場を支配する。瞬間、ボゴッという鈍い音が、体育馆に響き渡った。

召喚フィールドにホタルホタルと赤い血液が落ちる。

そこには先ほどまでの弱気な表情はない。

「おかげで、すっかり目が覚めた」

能力者は、覚悟を決めて相対する敵へと向かう。

「俺は……俺の全力を以てして、あの馬鹿を打ち倒す！」

それがどんなに厳しい戦いになろうとも、だ。

「『变身』？」

能力解放。愛斗とその召喚獣がキラキラとした光に包まれる。

愛斗の決意を表す行動に、恭一が冷や汗を垂らしながらも軽口で応戦する。

「いいねえ……そう来なくっちゃおもしろくねえよなあ…」

ダツと恭一は召喚獣に武器を構えさせ、特攻をかける。変身完了までにとどめを刺すつもりだ。

鎌を振りかぶり、首を刈り取るようにして横薙ぎに振るう。同時に、ちまつとした召喚獣のパーソが体育館を優雅に遊泳した。ガクンと召喚獣が片膝をつく。それを見て、彼は笑っていた。

鎌を持つた右腕が吹き飛んでしまった、恭一の召喚獣を見て。

「て、めえ……」

「あアン？ そこまで驚くようなことでもないだろオガ

悔しそうに上唇を歯む恭一に、『最強』は面倒くさそうに語りかける。

「つたくよお、じい」一週間でジンだけ俺の姿と能力を使えば気が済むんだ、このバカは」

クク、と自分の身体を面白そうに眺めつつも、一歩ずつ、確実に恭一との距離を縮めていく。

「でもまア、理性以外の全てを俺に預けてまで勝利にすがりオとするその根性だけは評価してやるよ」

そこには、本来存在してはならない存在。世界の理を現在進行形で搔き乱している、そんな『規格外』の少年。

体育館中で起ころびよめを一身に受けながら、彼は面白がって呟いた。

「ヤンジヤア、廻斗のヤロオの願い通り、そつそと勝ちをもぎ取つてやるとすむか」

『とある魔術の禁書目録』史上最強の超能力者、一方通行。ここに推参。

第十七問 勝利の為にはなにかしら対価を払わなければならぬ（後書き）

今回の『変身』はこれまでと少し違います。

それではまた次回。

感想お待ちしています

## 第十八問 決着（前書き）

「んにちは。最近自分の文才のなさに辟易している、ふゆいです。  
すさまじいムチャクチャ展開。  
どうか見捨てないでください。絶対に、原作に戻しますんで（汗）  
それでは、じうぞ。

## 第十八問 決着

「あれは……なに……？」

Fクラス用特別観客席の一席で、『観察処分者』吉井明久は顔中に冷や汗をかきながらポツリと呟く。

愛斗の腕輪の能力が『変身』であるということは明久も知つていたし、その能力効果がいかなるものなのかといふことも、彼は十分理解していた。

しかし……『アレ』は何かが違う。

五月雨愛斗が変身したはずなのに、愛斗の雰囲気が全く伝わってこない。誰か、別の人物に成り代わってしまっているかのような、そんな感じ。

だからこそ、明久は思わず疑問を口にしてしまっていた。

「…………一方通行」

『とある魔術の禁書目録』という物語の中に登場する、最強の超能力者。

勿論のこと、明久も読んだことがある。確か愛斗に勧められて本を借りたはずだ。

フィールドに佇む愛斗の姿は、まさに一方通行その人だった。

『ククク……さア、セエゼニ楽しもオジヤネエカ！』

一方通行（愛斗）が歪んだ笑みを浮かべ、静かに笑う。

「…………違ひ」

愛斗は、あんな歪んだ笑い方はしない。もつと楽しそうに、明るく、周りのみんなに溶け込むような、そんな自然な笑いをしていました。

まさか、あれが、あれこそが『変身』能力とでも言つのだらうか。

「一体どうしたのさ……愛斗……」

既にこの場には欠片も存在していない親友の名を呴き、吉井明久は真実を求める。

「く……喰らいやがれ！」

恭一が、上ずつた声で叫びながらも隻腕になってしまった召喚獣を突貫させる。

回転し、遠心力を利用した手法で攻撃を加えようとする恭一。本来なら、並大抵の召喚獣、しかもAクラスレベルですら軽々と粉碎するほどの威力を持つた攻撃だが、

「……効かねエなア」

それは一方通行に『届く』ことなく、見事なまでに『元きた方向へと『反射』されてしまう。

跳ね返ってきた鎌をマトモに喰らつた恭一の点数が減少した。

『Bクラス 根本恭一 754点』

「ちつ……」

攻撃が……効かない。

相手が普通の一般的な召喚獣なら既に屠られていてもおかしくないような攻撃でさえ、一方通行はなんなく反射してしまつ。……果たして、そんな化け物に勝ち目など存在するのだろうか。

『Fクラス 五月雨愛斗（一方通行） 1765点』

もはや、恭一と愛斗の点数差はダブルスコアになってしまつている。

点数は向こうが上。操作技術も圧倒的に向こうが有利。誰がどう考へたつて、決定的な一打なんて見出せない。

（もつ……駄目、なのか……？）

Bクラス代表に諦めの表情が浮かぶ。そんな恭一の気持ちが伝染し、Bクラス全体が諦めムードに包まれかけた…………ときだつた。

「諦めちゃダメだよ、きよーちゃん？」

「…」

静まり返つた体育館に響いた、幼い声。その声の主は、低い背を精一杯伸ばして、白髪の長髪を振り乱しつつ、叫び続けていた。

「きよーちゃんはいつだって諦めなかつた！ どんなことがあっても、自分がどれだけ不利な状況に置かれても、絶対に諦めたりしなかつた！ 中学生の頃だって、あたしを助けるためにいじめっ子達に囲まれても、最後まで諦めなかつたじゃない！」

「雪奈……」

「あたしは信じてるよ。きよーちゃんはヒーローだって。あたしや、みんなのことをいつだって身体を張つて助けてくれる、最高の正義の味方だつて！ だつてさ……」

安藤雪奈は双眸からとめどなく涙を溢れさせながらも、ぎこちなく恭一に笑いかけた。

「あたしは、そんなきよーちゃんが大好きだから…」「…？」

突然の告白に恭一が顔を真っ赤にする。そんな彼の心情を知つてから知らずか、雪奈は次々と言葉を紡いでいく。

「きよーちゃんがこの学校で卑怯者の真似をしていたのだって、周りの大切な人を守るためだつたんでしょう？ 自分の大切な人を傷つけないために、自分自身を貶めたんでしょう？ もう傷つくような人が自分と関わらないようにするためだつたんでしょう…？ そんなに優しいきよーちゃんが、あたしは大好きなの…」

「…………」

「だから、諦めちゃダメ！ あたしの大好きなきよーちゃんは、絶対に最後まで諦めないで、全力を尽くして、みんなの笑顔を死ぬ気で守りきる……そんな正義の味方なんだから…」

シン、と客席全体が静まり返る。

いきなりのカミングアウトに生徒たちは動搖を隠せない様子だ。

『あの根本が実は良い奴だと……？』

『ホントかよ……』

『で、でも、私この前根本君が一人で花の世話をしているのを……』

次々と飛び出す生徒たちの声。

それを聞きながら、根本恭一はただ啞然とした。

「雪奈……なんで……？」

「理由とか、そんのはどうでもいいの！ きょーちゃんはただ諦めずに戦つて！ それがあたし達のお願いだから！」

もつすでに涙でぐしゃぐしゃになってしまっている童顔。いつもならば輝かしい笑顔が存在しているはずのそこには、今にも崩れそうなほど脆い少女の素顔が現れていた。

……そして、

「こんなところでくたばつてんじゃねえぞ、代表！」

「私達の勝利はだいひょーに懸かっているんだからね！ シヤキッ」としなさい！」

「頑張つて、代表！」

「みんなの願いを……託されているんだから！」

Bクラス生徒による励ましの声が次々と飛んでくる。それは、去年まででは考えられなかつた事態。卑怯者としての皮を被つていた彼には、縁のなかつたはずの、そんな展開。

「馬鹿野郎が……」

そんなに期待されてしまうと、

「俺を誰だと思つていやがる」

絶対に勝ちたくなつてしまつ、

「俺は一年Bクラス代表……」

それが、彼が彼たる所以、

「根本恭一だぜーーー？」

誰よりも優しい男なのだから。

再び奮い立つた恭一を見て、一方通行が一タアシと爬虫類のよつに口を開く。

「いいね……あの三下みてな田してやがる……少しふりこは、  
楽しませてくれよなア！」

「こくゼーパラアー！」

ベクトル操作で床を滑るように向かってくる一方通行。恭一は四獸の脚を止めると、鎌を持った右手を前に突き出した。

「…………あア？ トチ狂つたか？」

「『反射』って言つたな……向かってくるモノを跳ね返すな！」

「……」

「！ テメー、まさか……」

眉をピクッと動かし、慌てて方向転換しようとする。しかし、もう遅い。

恭一は勝ちを確信したように笑うと、行動を開始した。

「武器を退かせてしまえば、お前の方に反射されるんだよなあ！？」

「く……グウウウウウウウウ！」

「スパン、という小気味よい音と共に、召喚獣の両腕が飛ぶ。先ほどまで一つの傷も負っていなかつた彼の召喚獣は、ガクンと静かに膝をついた。

『Fクラス 五月雨愛斗（一方通行） 432点』

最早、点数差なんて歴然。恭一の召喚獣には遠く及ばないほどのダメージを受け、一方通行本人も静かに膝をついた。

「へつ、見たかこのヤロウ。やつてやつたぜ」

「……これがファイードバックってヤツか……案外くるな、畜生」

「どうした？ もう降参する気になつたのか？」

「…………wpj-k殺gysb」

「ああ？ ……ぐわつ！？」

刹那。突如として一方通行の背から漆黒の翼が生える。竜巻のようにうねりをあげるソレは、触れただけで物体を切り裂いてしまいそうなほどの高密度。

一方通行にはもはや表情はない。ファイードバックで正氣が吹っ飛んでしまったのだろうか。

……そして、彼の身体に変化が起つた。

「ufugugue...aggd」偶然、あの能力者はどうやら私達を一度に呼び寄せてしまつたらしいな。『面倒くさいわねえ……で、誰から殺ればいいのかにゃーん？』『俺もそうだが、アイツもつくづ

く常識が通用しねえ奴だな』 f y o a g u a g d a s b d c u g p?』

「……な、なんだ、あれは……」

恭一「があり得ないものを見るような目で、目の前の物体を黙視する。

……人体的に果たしてあり得てしまうのかは分からない。……だが、実際に起きてしまっているのは、隠しようもない事実。

姿は、いつの間にやら五月雨愛斗本人に戻っている。……しかし、背中に生えた翼に変化が起き始めている。

先ほどまで一本会つた漆黒の翼は、右半分だけとなり、左半分には天使のような真っ白の翼が生えている。両手には針治療で使うような金色の鍼が。そして、彼の周りでは謎の閃光が飛び回っている。

……あれは、既に人間と形容してもいいのだろうか。

『 u e a g u e a g u d h b c h b h j u e u i f t h v h j v g o t g  
i w g u i v g h d s b c b i 』

「ちつ！ なんだあの化け物は！」

舌打ちしながらも、召喚獣を突つ込ませる恭一。……しかし、

『 a g u i g v x z b v c y q e a g d u i u i c v h j f u i g w c  
u f 』

「！？」

愛斗が右手を突出し、左手の鍼で自分の首を突き刺した瞬間。

恭一の召喚獣は、いとも簡単に消滅してしまった。

「なつ…………！」

突然の戦死に、目を見開く恭一。

攻撃力を見えたかった

納得いかない勝敗だが、Bクラスの敗北は決定。それに伴い、西村が召喚許可を取り消すと、愛斗の召喚獣は存在ごと消滅する。… そう、愛斗の召喚獣だけは。愛斗本人の変化は、未だに収まる様子を見せない。

「お、お二！ じつなつてやがんだよー。」

客席にいた雄一が、慌てて西村の下まで駆け寄つてくる。

「亞空間フィールドは消したはずだろ？ まるでじやねえのかー？」「だったらアーティックの変身も止

「俺がそんなことを知るか！ 未知の能力は常識なんでものはなし  
んじゃないのか！？」

「なんたよそれ……愛斗！」

הַבְּנָהָה הַמְּלָאָה הַמְּלָאָה הַמְּלָאָה הַמְּלָאָה

雄一の叫びも空しく、愛斗はただ謎の言葉を発するのみ。

そして、慶次はあわて「」とか雄一に向かって右手を突き出した。

「なつ…………！」

さ坂本君！何が一体……

！  
来るな！  
木下！」

あまりのタイミングで走ってきた優子を、雄一が必死の形相で止

める。

……それと同時に、愛斗は雄一から目を移すと、優子にその狙い

を定めた。

「木下！」

「ま、愛斗……？ いつたい、どうじちやつたのよ……」

「早く、逃げるんだ、木下！」

「c u d g o c u i g o n h v s d y e g f c y f y u 犯 d u c g e u  
c g u c v u c g u i」

「愛斗

？」

優子の叫びは届かない。愛斗はただ無情にも、その右手から閃光を発しようとして……。

「木下、バカ野郎！」

「！ ud w g o c u i g e v c i w e i u c g o u q e c u u？」

突如飛來した鉄拳に顔面を抉られ、遙か後ろへと吹っ飛んだ。その拳の本人……『観察処分者』吉井明久は憤怒の表情で、その襟首を掴む。

「お前今誰に攻撃しようとした！ よりにもよって、誰に危害を加えようとしてんだよ！」

「……オ」

「木下さんは愛斗の大事な人じゃないのか！？ 愛斗が一番大切だと想っている人じゃないのかよ！？」

「……オレ、ハ……」

「いい加減目を覚ましてよ！ いつまで『変身』能力なんかに喰われてんのさ！ 中一病みみたいな能力に支配されるなんて、『萌えの王者』が聞いてあきれるんだよ！」

こきなり出てきた二つ名に、周りの生徒がズルッとずつこける。

今のシリアスな場面でその台詞はないだろうに。

明久は、右手を高く振り上げると、渾身の力を込めて、振り下ろした。

ボゴッという鈍い音と共に、愛斗の身体がビクンと跳ねる。そして、体育館に再び静寂が訪れた。

第十八問 決着（後書き）

早く原作の流れに戻そう……。

感想、お待ちしています。

第十九問 想いの先に存在するもの（前書き）

こんには。

バカテスのアニメももうすぐ終わりですね。

第三期を期待しつつ、お楽しみください。

## 第十九問 想いの先に存在するもの

自分の不甲斐なさと無力さを感じたのは、いつのことだつただろうか。

保育園の頃、隣に一組の家族が引っ越してきた。  
木下、と名乗ったその家族はとても優しく、温かみがあつたということを覚えている。

その家には、双子の姉弟がいた。

一卵双生児でありながら、二人はまるで瓜二つ。最初のうちは全く見分けがつかなかつた。

俺が幼く、彼らが大人っぽかつたのもあるのだろうが、俺はすぐにその一人に懐いていた。家が隣というのも幸いしたのか、通う保育園も同じところ。

『これからも一緒に遊べるね！』

『ええ、よろしく』

『うむつ、よろしくなのじやつ』

彼女達の笑顔が好きだつた。

彼女が時折見せる、いつもの冷静な表情とは違う柔らかい笑みが大好きだつた。

彼がいつも見せてはいる、太陽のような明るい笑顔が大好きだつた。だからだろうか。いつしか俺は彼女達を笑わせようと必死になつていた。

小学生になり、彼女達とは一緒にクラスになつた。

今までの保育園とはまた一味違つた生活。

これから学校生活へのわくわくが止まらなかつた。

……そして、入学して一年ほど経ったとき、

彼女達が、イジメにあった。

イジメといつても、そこまで酷いものではなく、馬鹿な坊主達が二人に向かつて『同じ顔ー！』とからかうくらいの優しいもの。

……しかし、彼女達は明らかに笑顔を失っていた。

今までの輝かしい笑顔。俺がすべてだと思っていた、あの笑顔をどこにやつたのか。

『同じ顔ー！ 気持ちわりーんだよー』

『クローンとかじやねーの？』

『あははっ、そりやケツサクだ！ おい、クローン。あっち行けよ』

アイツらは笑っていた。

彼女達が傷ついていたにもかかわらず、ヤツらは虚げるように意地汚く笑っていたのだ。

ドウシテ、オマエラガワラッテイル……？

『な、なんでアタシ達がそんなこと言われないといけないの……』

ドウシテ、カノジョタチガワルイノカ？

『も、もひやめるのじや……』

カノジョタチガワルイノカ？

チガウ。オレガワルインダ。

カノジョタチ……を……守りきれなかつた、俺が……。

俺に、もっと力があれば。  
物語の主人公みたいに、人を守り抜くことができるような、強い力があれば。

『……力を……』

力が欲しい。

『お前は……力を……』

主人公みたいになれる、

『お前は、力を欲するか?』

そんな、力が。

「……う

愛斗が目を覚ますと、そこは保健室だった。

「……？」

と、一ノ瀬愛斗は自分の脚の違和感に気が付いた。布団ではありえない、少し重めの物体。未だはつきりとしない意識のまま、彼はそちらに視線を向ける。

「スー……スー……」

「……優子」

幼馴染である。木下優子が愛斗の脚にうつ伏せになってしまった寝息を立てていた。

なぜだらうか、優子の頬は泣いた後のように赤く腫れぼったくなつていて。

「……優子、起きて」

「……うみゅ？」

「いや、『うみゅ』じゃないから」

可愛いな畜生、と叫びたくなる気持ちをなんとか押しがめ、身体を起こす優子を見る。

優子は子供の用に「ゴシゴシ」と田を擦り眠氣を覚ますと、すぐにいつもの表情に戻った。

「……あ、起きたんだ」

「随分と適当な言葉だな……」

「つるさいわね。……それで？　もう大丈夫なの？」

「は？　……ああ、俺、また暴走してたのか」

暴走時の記憶はあまりはっきりとは残ってはいない。能力暴走とは、本人の意思とは無関係に起こるいわば発作のようなものであり、使用者にとって良いものではない。

愛斗は、気まずくなつたのか右手でガシガシと自分の頭を搔いていた。

「あー……わらい、また迷惑かけたみてえだな」

「まったくよ。……まあ、お礼やお詫びを入れるのは、アタシにじやなくて彼らにだと思つけど」

「あ?」

優子はさう言つと、保健室のドアに近づき、おもむろに開け放つた。

「えい」

「「「うわあつ?」」「」

「……何してんだ、お前ら」

雪崩れ込むよつて入ってきたバカ達を、愛斗は溜息をつきながらジト目で見る。

そこにいたのは、坂本雄一、吉井明久、根本恭一の三人。

彼らは慌てて佇まいを整えると、それぞれ愛斗の方へと歩いてきた。

「よお」

「よお、つて……愛斗、さつきまで化け物みたいだつたのに、よくそんな平然といられるね……」

「……ということは、見たんだな」

「……うん」

「……そつか」

見られたかー、と愛斗は軽い調子で明久に笑いかける。そんな彼の拳動に、明久は目が点になっていた。

「……おい、説明しろよ」

「……雄一じやんか、こんなところに何をしに来たんだ?」

「話を逸らすな。お前は俺達に話さなきゃならねえことがたくさんあるだろおが」

「……そ、だな。じゃあ、どこから聞きたい?」

「んー、俺は……まあ、これからだな」

瞬間、愛斗の頭に鋭い痛みが走る。雄一が拳骨を思いきり頭上から落としたのだ。

「いつてええええええ? 急に何すんだこの'ゴリラ'」

「黙れチビスケ。勝手な行動ばっかりしゃがって、指揮する俺の身にもなつてみろってんだ」

「……でも、勝つたじやねえか」

「結果はな。そこまでの過程がアホなんだよ、お前

「うつ……」

「言ひ返せないのな」

してやつたり。雄一の表情は正にそんな感じだった。

痛む頭を押さえつつ、愛斗は残りの一人へと顔を向ける。

「……恭一」

「勝負は俺の負けだ。約束通りBクラスはFクラスの手駒になつてやるぞ。まあ、気に入らねえ負け方だつたけどな」

「……すまん」

「なに、謝る必要はないさ。あれは勝負だ。お互のカードを全

部切つて、俺は負けた、ただそれだけだろ?」

「…………」

あれは俺の力じゃない。

そう言おうと、口を開こうとした。……が、

「なにがどうであつても、あれはお前の勝ちだ。敗者にそれ以上無駄な言い訳をしないでくれ」

「…………相変わらず、お前らしいな」

「よく言われるぞ」

そして、お互に笑う。

何年振りだろうか、こうして一人で笑つたのは。

ひとしきり笑つたところで、恭一は雄一と共に保健室を出た。なんでも、代表同士で対Aクラスの作戦を立てるらしい。

そうして、保健室に残つたのは愛斗、優子、明久の三人。

明久は躊躇いがちに口を開いた。

「愛斗……君の能力について、本当のことを教えてくれない?」

「…………そうだな。お前には迷惑かけたみたいだし、これくらいは、な。…………優子、いいよな?」

愛斗の言葉に、コクンと頷く優子。それを切り出しに、愛斗は語り始めた。

「俺の能力が『自分以外の誰かに変身する』っていうのは、明久も知つてゐるよな?」

「うん。その人の能力とか、話しか方とかも引き継ぐんだよね?」

「そう。…………でも、根本的なところが違うんだよ」

「? どうこいつこと?」

「…………」

愛斗の意味深な発言に首を傾げる明久。  
それに答えるように、彼は言葉を続ける。

「俺の能力は身体 자체を対象に切り替えるんじゃない。……別の世界から、そいつ自身を俺の身体を媒体に召喚しているのや」

「……というと？」

「……つまり、俺の『変身能力』の正体は『自己憑依能力』なんだ。ゲームとかであるだろ？ 人形とかにそいつの思念を憑依させるやツ。あんな感じさ。ちなみに綾斗の能力みたいな不完全なヤツは暴走とか起きないんだけどな……俺のは完全つてことだろ」

別世界から自分自身に憑依させる。

召喚魔法や、オカルト類の能力。彼の能力はそんなに不安定で危険なものだったのか。

そんなに危険な、いつ暴走してもおかしくないような能力を、この少年は平気で使い続けているのだろうか。

愛斗のあまりに命知らずな無謀さに、明久は呆然と彼を凝視してしまっていた。

「……なんで

「あん？」

急に口を開いた明久の方を不思議そうに見る愛斗。  
明久の顔には、動搖と恐怖の感情が入り混じっていた。

「なんで、そんな危ない能力を使い続けるのさ……？」

「明久……」

「わからない。その能力は愛斗を危険に晒しちゃうかもしけないんだよ？ 愛斗の大切な人までも、傷つけちゃうかもしえないんだよ

？」

「…………」

「なのに……それなのに、なんで愛斗はその能力を使い続けるのさ！」

！？」

明久の本音が、保健室中に響き渡る。

彼が心配するのも無理はない。その『変身』能力は一步間違えれば使用者に死を招く。現に、先ほどの試召戦争では危うく死人が出てしまう所だったのだから。

しかし、激昂する明久に、愛斗は穏やかな声質で笑顔と共に言葉を紡いだ。

「…………向こうの世界の奴らと、約束しちまつたからかな

「え…………？」

「俺さ、小さい頃から物語の登場人物みたいになりたかったんだ。ほら、あいつらってどんなことがあっても自分の能力を駆使して大切な人を守り抜くだろ？ 俺、そんな風になりたくて、努力して……でも、結局そんな都合のいい展開は起きなくて。……そんなときはたんだよ。俺にこの能力が備わったのは

「…………でも」

「いいから聞けよ。『変身』能力を手に入れて、俺はキャラクター達の思念と交流できるようになったんだ。んで、自分の力を認めさせて変身許可を貰った。その時に、ほぼ全員から約束させられたんだよ」

そこで言葉を切ると、彼は輝かしい笑顔で言い放った。

「『絶対に、俺達の能力でお前の大切な人を救つてやれ』ってさ

「…………」

「確かに、俺は優子を傷つけかけた。あいつらとの約束を破っちゃつた。……それでも、俺は守り続けたいんだよ。優子も、秀吉も、お前達も……あいつらとの約束も。最後には『守つてやつたぜ!』って胸を張つて言えるようになりたいんだ」

明久は言葉を失つていた。

この少年は、自分と抱えているものの重さが違う。いくら自分が負けようとも、最後は勝利を掴むような強さが彼にはある。

そして、吉井明久は静かに保健室を出た。……来る△クラス戦の為に。

「……格好いいじゃんか、畜生……」

第十九問 想いの先に存在するもの（後書き）

感想、お待ちしています。

## 第一十問 最終決戦に向けての作戦会議ってなんか盛り上がるよね（前書き）

「んにちは。

ついに肝試し編には行つたアニメがめつけて楽しみです。早く木曜にならないかな

それでは、ピリオドー

## 第一十問 最終決戦に向けての作戦会議つてなんか盛り上がるよね

翌日朝、Fクラス教室。

「はあ……はあ……」

「おい、大丈夫か？ 五月雨」

昨日の試合戦争で傷ついた後遺症かなんなのか、俺、五月雨愛斗は本日朝から少し風邪気味だった。

そんな俺の様子を心配した須川が、珍しく俺を気遣つてくれる。…

…気持ち悪い。

「オイコラ。人が折角心配してやつているのになんだその言い草は「つるせえなあ……キツいんだから、あんま喋らせんよ……ゴホツ、ゴホツ……あ、ー……」

「……ホント、冗談抜きで大丈夫かよ、お前」

「くそ、須川なんかに同情されるとは……一生の恥だあ……ゴホツ。

俺が咳をしながら須川と話していると、チャイムが鳴る寸前になつておなじみの二人が教室に息せき切つて走り込んできた。

「あ、あつぶねえ……遅刻、ギリギリじゃねえか……」

「ゆ、雄一の購買が長かつたからでしょ……」

「ああ？ 俺のせいだつていうのかこのバカが

「100%お前のせいだよ」のクソ「コラ」

「やんのか！」

「そつちこそ！」

「……いいから、席に着けよお前！」

なに朝から盛つてんだ、このバカ共は……。

そして、ようやく俺の存在に気付いた明久と雄一は、俺の様子に首を傾げながらも自分の席、つまりは俺の後ろ側に歩いてくる。

「……よお

「なんだお前、病人みたいな顔してんぞ」

「風邪ひいてんだよ……ゴホツ、ゲホゲホツ！」

「マジかよ……こんな大事な時に限つて使えねえやつ」

「雄一、君は基本的に何もしてないんだからそういうことを言つちやがけりまつ」と言つちやがけりまつ

だめだよ」

「冗談半分で俺を貶す雄一を明久が窘める。

しつかし……俺も随分と最悪なタイミングで身体壊したもんだな

……今度から夜更かしは控えるか。

そんな会話を何度も続けた後、雄一はクラス全員が揃つたのを確認し、いつもの通り教卓に立つた。

そして始まる立会演説。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があってのことだ。感謝している」

「ど、どうしたのさ、雄一。らしくないよ？」

「ああ、自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

「……そんなこと言わるとこっちもなんか感動しちまうな」

相変わらず空氣を作るのが上手いな。

周りに奴らも俺と同じように感慨にふけつてているようだ。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き

残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突き付けるんだ！」

『おおーっ！』

『そりだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

最後の大勝負を目前にし、確かにこのクラスは一つになっていた。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが……今回のキー・パーソンは、明久だ」

「へ？」

……明久？

皆が頭に疑問符を浮かべる中、雄一は明久を前に立たせ、言葉を続ける。

「皆が知っているよ！」、ここには『観察処分者』だ。その操作技術はおそらくこの学年で群を抜いた一番だろ？

『そ、それは……そうだな』

『教師どもに雑用やらされているわけだし』

『いくら吉井がバカでも、そんだけやりや上手くもなんだろ』

「ちょっと待つんだ。今会話の中でしれっと僕を貶した人がいるよね？」

「静かにしてくれ、今から説明するから」

バンバンバンと机を叩いて皆を黙らせる雄一。

こういっしつかりしたところも、コイツがリーダーとしての資格を持つていることを示しているのだろう。

「今回の戦争は、はつきり言って厳しい。戦力差が明らかに違うす

ぎるんだ」

「珍しいわね、坂本がそんな弱音を吐くなんて」

「それくらい圧倒的ということじやうつ」

「島田と秀吉の言つとおりだ。普通に当たれば、まず俺達に勝ち田はない」

そりやそりや。なんたつてあのAクラスには化け物クラスが何人もいる。

この間会つた霧島なんか、ダントツで一位を獲つてゐる。いくら成績上位の俺や姫路がいても、所詮はAクラスレベルなのだから、そこまで善戦することはないだろう。

「……それなら、一体どうするんですか？ 点数で勝てないのは今にわかつたことじやないですしつつ……」

「ああ、だから、明久に頑張つてもうつんだ」

「……待て、そこで吉井の名前が出てくる意味が分からぬ」

「わからないのか？ さつき言つただろうが……明久は、操作技術が優れているつて」

…………あ。そつこつこつとか……。雄一、無茶な案を思いつきやがる。

いまだに大部分がキヨトンとしているのを見て、雄一は満足そうに言つた。

「明久の操作技術があれば、Aクラスを圧倒することができん。なんたつて攻撃が当たらねえんだからな。倒しようがない」  
「でも……吉井の点数じや勝てないわよ？ そこはどうするのよ」  
「……島田、この戦争で点数を上げるには、どうすればいいと思つ？」

「え？ ……回復試験で良い点を取る、とか……？」

「そのとおりだ。……明久に、回復試験で点数を取つてもうつ、「ええつ！？」 ゆ、雄二！ 僕はそんな高い点数をとれる自信はないよ…？」

雄一の発言に明久がわたわたと慌てている。

無理もない。明久はこの学園の最低ランク生徒なのだ。良い点数なぞ取れるはずもない。

しかし、雄一はいつも通りのあくびに笑みを明久に向けていた。

「確かに、普通に受けければ無理だらうな。そんなことができるなら今お前はAクラスにいるだらう」

「う、うん……」

「……じゃあ、時間いっぴにテストを受けければ……どうなると思つ？」

「……は？」

ハトが豆鉄砲を喰らつたよくな顔をする明久。

まったく……相変わらず理解が遅えな……。

明久に助け舟を出すよつこ、俺は雄一を見ながら口を開いた。

「戦争時間中一杯試験を受けければ……いくら明久でもとんでもない点数がとれるだらうな」

「…そ、そ、うか……そ、うこ、うことなんだね」

「よつやく理解したか。……さて、今ので皆も分かつてくれただろうか？」

「へん、と一様にうなづくクラスメイト達。

その反応を見て、雄一はようじいといつよつこ、にかつと八重歯を剥き出しこした。

「皆が分かっているように、Aクラス代表の翔子は、ケタ違いに強い。おそらく、俺達が十人で束になつても到底敵わないだろう」「じゃが……明久が点数を取りさえすれば……」

「いくら翔子でも、点数を伴つた明久には勝てないはずだ。操作技術でこのバカに勝てる奴なんて、この学園には存在しねえからな」「あはは……そこまで手放しに讃められちゃうと、なんか照れるね」

明久は居心地が悪そうに身じろぎしていた。まあ、田代から褒められ慣れてないだろうから、こういう状況はなかなか恥ずかしいのだろう。

話も終盤に差し掛かった頃、何を思ったのか、突然姫路が「あの……」と口を開いた。

「なんだ、姫路？」

「あの……坂本君つて、霧島さんと仲良いんですね……？」

確かに。さつきから霧島のことを「アイツ」とか「翔子」とか呼んだりしている。まさかこいつあの日本撫子と良い仲とかなんじや……。

急遽、明久とのアイコンタクト会議、開始。

（明久、準備はいいか？）

（もちろん、号令の準備は万端さ）

（グッジョブだ。今回俺は風邪で参加できないから、その分よろしく頼むぜ）

（了解）

ジツとクラスメイトの視線が雄一に集まる。

その殺気に気付いていないのか、雄一は軽い調子で言い放った。

「ああ。俺と翔子は小学校からの幼馴染だ」

?

「 サーと待て！ なんて明日の号令で皆が一斉に俺に向かって力  
ツターナイフを構える！ ？」

「黙れ男の敵！  
この世から消え去れ！」

黒木の蘭  
このせから酒井云林  
……行かなければ春  
ソレはムツツリ二が房のバカを取り押されてから  
下はまだ早い。

口の中に入れ込むものだ」

「了解しました」

「一九二二年九月」

く救援を いや 任せをり れど。 一 愛シ 新友がビンテガモ 一 二 三

卷之二

ねえなあ  
「

「鬼かお前は！」  
そんなことをいってる場合にやないだろ！？  
仕事助け

「すまぬ雄」。今回ばかりはワシもお主の敵じや。大人しく滅つさ

れい

畜生全員裏切りやがてたああああああああああああああああああああああああ？」

雄一、絕叫。

そして、次の瞬間には明久と秀吉を除く全員からカツターナイフという名のエクスカリバーが、雄一<sup>バカ</sup>へと一斉に放たれたのだった。

ちなみに、明久と秀吉はそれぞれ姫路と島田に天誅食らつてました。ご愁傷様

第一十問 最終決戦に向けての作戦会議ってなんか盛り上がるよね（後書き）

感想、コラボのお誘い、お待ちしています

## 第一十一問　『バカとテストと召喚獣』が終わってしまった……第三期に

「んにちは。

試験期間真っ最中の、ふゆいです。

誰か俺に物理を教えてくれ……。

いよいよ今回からAクラス戦に入つていきます。

まだ戦争には入りませんが、原作とは違うAクラス戦を書こうと思つていてますので、楽しんでいただけた幸いです。

それでは、どうぞ

第一十一問　『バカとテストと召喚獣』が終わってしまいました……第二期に

「宣戦布告？」

「ああ。FクラスはAクラスに試合戦争を申し込む」

いつも通りの宣戦布告。

しかし、俺だけで行くと大抵面倒くさい事態になつてしまつといふ意見から、今回は俺、雄二、明久、秀吉、ムツツリー、姫路と、我々Fクラスの首脳陣勢揃いでAクラスに来ていた。  
まったく……俺だけでも心配いらんといつのに。

「今までの結果を振り返つてからそういうセリフを吐くのじやな」

「…………疫病神」

「ひむせえよ。

「うーん、何が狙いなの？」

現在雄二との交渉席に座つているのは、俺の幼馴染の木下優子だ。今も明らかに猫を被つた状態で交渉を行つている。隣の秀吉がジト目で姉を見ているのは間違いではないだろ？。

「おいおい、何を訝しんでいるんだ？ 俺達はただ単純にAクラスに宣戦布告しに来ただけだぜ？」

「それはそうだけど……君たちみたいな最下位クラスがこんな早くうちに戦争仕掛けに来るなんて、何か作戦があるに違いないでしょ

？……まあ、仮に作戦があつたとしてもアタシ達が負けるなんて到底ありえないんだけど、わざわざリスクを犯す必要も無いかな」「そりや、賢明だな。さすがはAクラス交渉役。随分と頭が切れるご様子で」

「褒め言葉として受け取つておくよ」

お互に皮肉を交換しながら交渉を続けていく一人。

つーか、俺達のクラスつてどんだけ信用ないんだよ……メンバーを考えれば納得はいくけど。

そして、雄一の目が怪しい輝きを見せ始めた。いよいよ本領発揮のようだ。

「せついいえば木下。昨日のコイツと根本の戦い、観戦してどう思つた？……最後の事故は無視してくれると助かるんだが」

事故？ そんなのあつたか？

「五月雨君は意識を失つてましたから……」

「覚えてないのも無理はないよね」

「……ああ、能力暴走の話ね……」

そりや覚えてないわけだ。つてか優子への借りがまた一つ増えているような気がする。

優子は一瞬キョトンとしたものの、すぐに調子を取り戻し口を開いた。

「個人的にはすじかつたと思うよ。根本君もAクラス並みの点数を取つていたし……愛斗も、いつもどおりの高得点だったしね。後、変身能力を冷静に分析して戦つていたのも驚きだったよ。普通あんな予想外の戦い方されたら混乱するものなんだけど、やっぱり中学

からの知り合いつていうのは利点が大きいみたいだつたね。最後に一つだけ言わせてもらひなひ…………とても格好良かつたわよ、愛斗「

「『ツと雄一の隣にいた俺にいきなり微笑みかけてくる優子。ぐ……相変わらず可愛い顔しやがつて……。」

「…………？（パシャパシャ！）」

突然のベストショットに、ムツツリーが指が擦り切れんほどの勢いでシャッターを切つていた。

「おいおい、場所を弁えろよ…………後でその写真を全部売つてくれ」

「お主うひざじんなときでも揺らがんのう…………」

これが真の男つてものなのが、秀吉。

「いや、わけが分からぬのじゃが」

さいですか。

優子の評価を聞き、ウンウンと頷いていた雄一は話が終わるや否や、すぐに次の言葉を提示した。

「ところで、Bクラスと試合戦争をする気はあるか？」

「え？ Bクラスつて、根本君のクラスだよね…………？」

「ああそうだ。今しがたアンタが高評価をした、根本が代表をしているBクラスだ。今は宣戦布告をされていないみたいだが、アイツらもAクラスを狙っているみたいだつたからな。さてさて、どうな

る」とやう

「でも、BクラスはFクラスに試召戦争で負けているから、後三か月は宣戦布告ができないはずだよね？」

これは試験召喚戦争の決まりの一つである、『準備期間』

戦争で負けたクラスは、三か月の間の準備期間を経ない限り自ら戦争を申し込むことはできない。これは敗北したクラスがすぐに宣戦布告して、戦争を泥沼化させないための措置だ。

「まだそこまで広まつていらないかもしない情報だが、あの一騎打ちは結局和平交渉にて終結つてことになつていいんだ。これには鉄人も関わっているから、公式な和睦だぞ？」

「これは、なんといつても俺が恭一に勝利したから成立した条件だ。やつぱり俺つて役に立つてんじやん

「勘違い、つて怖いですね」

「駄目だよ姫路さん、そんな本当のことを言つちや」

少し後ろで姫路と明久がなにか言つていたが、俺には全く聞こえなかつた。

「……それつて脅迫？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

雄一、今のお前の顔は歴代の悪役を遙かに凌ぐくらいいい顔しているやう。

「うーん……そう来るかあ……」

優子が腕を組んで悩みこんでいる。

そりやそうだ。クラスを代表しての交渉なのだから、この結果次第で仲間達の立場が決まってしまうのだから。

しばらくの間、無音の空気が教室中に充満する。く……やっぱり駄目か……？

「……受けてもいい」

「うわっ！」

突然かけられた声に、明久が声を上げながら少し飛び上がる。つて、驚きすぎだろ。

「……雄一の提案、受けてもいい」

静かな、それでいてどこか凛とした声。

いつのまにか、霧島が俺達の交渉席に来ていた。あ、相変わらず気配の分からぬいやつだな……。

「あれ？ 代表、いいの？」

「……その代わり、条件がある」

「条件？」

「……うん」

頷いて、雄一を見た後に何故か俺の方をじっくりと見てくる霧島。

「は？ 僕が一体どうしたって言つんだ？」

しかし、霧島はそのまま雄一の方を向いて、言い放つた。

「……負けた方は、なんでも一つ言つこと聞く」

「ま、愛斗のピンチだ！ ムツツリー、カメラの準備はいい！？」

「……俺を誰だと思っている？」

「ただのムツツリだよバカ野郎。つてかお前り負ける気満々じゃねえか」

何をやつてこらののだか。

（ま、愛斗、どうする？）

（は？ どうする？ 何が……）

（何が、って。もし僕らが負けちゃつたら愛斗の真操が……）

（お前は一体何の話をしているんだ……）

（もう！ なんだそんな無関心なの！ ここ？ ）のまがじゅ愛

斗は霧島さんに

（

「交渉成立だな」

「ゆ、雄一！ 何を勝手に……まだ愛斗の許可は貰ってないじゃな

いか！」

「だから、なんでそこまで俺の名前が出てくるんだよー？」

さつきからマイシは何を焦つてやがるのか。

「心配すんな。絶対愛斗には迷惑はかけない」

自信満々の口調。さすがは自信と信条ができる男。勝利を確  
信していくよつこ聞こえるから不思議だ。

「……アタシからも、一個だけ条件付けていいかな？」

「ん？ どうしたんだ、突然」

よつやく話が纏まりそつたところで、いきなり優子が口を挟んだ。  
みんなが頭に疑問符を浮かべる中、優子はいつもの調子で淡々と  
言い放つ。

「アタシが提示する条件は……愛斗個人に対する条件よ」

「……俺？」

「そ、アタシとアンタ、戦いで負けた方が、相手の言つことを何でも一つだけ聞く。……どう? アンタにとつても悪い話じやないと思うけど?」

「なんでもまたそんな面倒くさいことを……悪いが、その話はパスで

」

「ビデオてるのね、この負け犬」

「…………と思つたが全力で〇×だ。後で吠え面搔いても知らねえからな!」

馬鹿にしてんのかコイツは!」

俺達の話も一段落したところで、代表同士が打ち合わせを始める。

「……勝負はいつ?」

「そうだな。十時からでいいか?」

「……わかった」

ほんと、獨特の雰囲気を持つやつだな。変わった口調だし、喋り方はムツツリーに近い感じか。

「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

「そうだね、みんなにも話せなきゃいけないし」

無事に交渉も終了し、Aクラスを後にする。

さあて、俺達の試合戦争もいよいよ大詰めだ。気合入れていくとしますかね!

風邪ひいているけどな。

第一十一問　『バカとテストと召喚獣について』終わってしまいました……第三期に

感想、お待ちしています

第一十一問 MP3プレイヤーって、俺の周りじゃあまり知られていないんだよね

こんなにちがう。

最近パソコンを使う機会がめっきり減りました。やっぱ勉強って怖いですね

さて、ついにAクラス戦です。当作品では原作とは違い、一騎打ち形式ではなく純粹な戦争形式となっています。はてはて、どうなることやら。書いている僕もハラハラドキドキです（おー）

原作とは一味違うAクラス戦。少し長くなるかもしねませんが、是非とも楽しんでいただければ僕も嬉しいです。

それでは、お楽しみください。

## 第一十一問 MP3プレイヤーって、俺の周りじゃあまつ知られていないんだ

AM 10:00  
Fクラス対Aクラス 開戦

愛斗SHIDE

旧校舎新校舎間渡り廊下

「いよいよ開戦だな……」

緊迫する空気の中、俺は流れる汗をぬぐいつゝなく緊張した面持ちで敵を待つている。

「、これが戦場つてヤツかア……面白H。

「出でる。一方通行出でるから」

「よし。よく気付いたな須川。ツツツツができる男はモテるぞ」

「喧嘩売つてんのか」「」

なんだよ折角気分を和ませてやるひつと思つたのに。

まあまだ敵さんも来ないみたいだし、暇つぶしに今回の俺達の作戦内容でも説明するとしよう。

まず、雄一率いる本隊は教室に引き籠つて籠城する。基本的に戦力が下なんだから、妥当と言つちや妥当だらつ。

そして、Aクラスがシビレを切らして攻めてくるはず。そこで俺達の出番だ。

ここには俺含め召喚獣の扱いが上手い奴らが集められている。勉強ばかりで体力のないAクラス戦力を少しでも多く減らすための配置だ。

俺達の目的はただ一つ。明久の準備が整うまで戦況を維持すること。必要であれば腕輪の力を開放してもいいらしい。ふつ、ついに俺の『変身』を応用した技を見せる時が来たということか……。

そんな感じで、今現在俺達は敵さんが来るのを今か今かと待っているのである。

「それにしても……五月雨、お前風邪は大丈夫なのか？」

「ん？ あー、大丈夫なわけじゃないんだが……ちょっと『変身』を応用して風邪をひいていないという精神状態にしてみた」

「お前もう学園都市に行けよ……」

俺のあまりのハイスペックさに須川は呆れ半分尊敬半分といった様子でため息をつく。まあ、これも戦闘前のインターバルつつうことだな。

「それにしてもよ……」

「ん？」

と、ここに須川が頭の後ろで手を組みながら、ぼんやりと呟いた。

「坂本はああ言っていたが、本当に俺達でAクラスなんかに勝てるのか？ 常識的に考えたら、明らかに勝率低いだろ？」

「あー……ま、言いたいことは分かるな」

おそらく、今回の戦争に参加しているほとんどの生徒が思つてい

ことだろう。

学力カースト制とも言われるここ文月学園のクラス分け制度は、世間一般から見ると学力の優劣によってクラスが分けられるため、授業進度もソイツにあつた速さになるという点から、なにかと評判は良かつたりする。召喚獣つていう最新科学技術を扱えるという点もあるが。

しかし、それは裏を返すと学力の優劣によって、学園での優劣が決まつてしまつと言つても過言ではない。現に、文月学園でのクラス間の差別意識は、通常の学校から比べて些か強いようにも思われるしな。

Aクラスに所属しているから、俺は偉い。Fクラスに所属しているから、俺は弱い。

そんな風に考えてしまつ生徒が多くなつてゐるというのも、また事実ではある。

しかし、そんなことだけで人間の価値や人生の優劣が決まつてしまふのならば、こんな学園が成り立つはずがない。もしそうなら、学力の低い受験者がこの学校から消え去つてしまつだらう。

ここでの学園長のモットーは『実力主義』

一見、学力のみを示しているようにも思われるが、少し視点を変えてみるとそれだけではないといふことがわかる。

本来、実力というものは人間の実行できること全体を指す。つまり、体力、行動力、決断力、知略、チームワーク……などなど、いわゆる学力以外の『実力』を育てるのも、この学校の目的だつたりするわけだ。

ようするに……

「たとえ学力が低くて、俺達がそれ以外で優れていれば勝つことができるだろ」

「それ以外つて……俺達がAクラスに勝つているところなんてあるのかよ？俺が言うのもなんだが、第二学年Fクラスは今までに類を見ないくらいの最低クラスだぞ？」

「大丈夫。みんなを信じろって。いくらバカだろうが、この戦争にかける思いはみんな誰にだつて負けやしないんだからよ」

「うう、たとえ戦力が最低クラスの上、根性が腐っていたとしても、俺達は生死を共にする戦友なんだからな！」

『いたぞ！ Fクラスだ！』

『「私達に挑むなんて馬鹿な真似をしたあいつらに痛い目を見せてや  
りましょーつー。』

## 『總員、出擊！』

えーと

『なんであんなに士気が高いんだ！？』

予想外の事態に、俺と須川は顔を見合わせて絶叫した。

本当に、大丈夫……だよな？

## 優子 SHIDE

Aクラス教室前廊下

「先遣部隊がFクラスと接触したようですね」「ん。わかつたわ、引き続き監視をお願いね」「わかりました」

偵察部隊の佐藤さんの報告を聞き、アタシは「はあ」と溜息をついていた。

そんなアタシの様子を不思議に思つてか、ボーアッシュ少女の愛子がこちらへと歩いてくる。

「どうしたの？ なんか元気がないみたいだけ?」「どうしたもこうしたもないわよ……そもそも、なんでアタシ達がFクラスなんかの相手をしないといけないの？ こんなのは、最初から結果が決まつたような出来レースじゃない」

「あはは……まあ、優子の言つてることも一理あるよね。いくら知略に長けた指揮官を持っていたとしても、戦力自体が劣つているんじゃ、勝利するのは難しいし。ボクだったら迷わず降参するかもね」「嘘おつしゃい。戦死覚悟で特攻するでしょーが」「あら、断言されちゃつたよ？」

優子はクールだねー、と笑う優子。しかしそれ、戦争だからと言つてむすつとされているよりは、いくらか気が楽だわ。

今回の試験召喚戦争。新学期が始まつて歴代最速の頂上決戦といふ話だ。最低クラスが最強クラスに挑戦状をたたきつけるなんて、空想の世界ならいざ知らず、現実でもやるよつたバカがいるとは……

「愛斗が楽しそうなわけだわ」

あの中一病患者にとつてはこの上ない幸福状況でしそうね。アイツが変身能力を手に入れたのだけ、空想上の人物に憧れを抱いていたからだし。……まあ、原因作つたのはアタシと秀吉なんだけどね。もうちょっとアタシ達がしつかりしてたら、愛斗もあんな人外能力を手に入れることもなく、アタシと一緒に普通の学生生活を楽しめたのかな……。

「つ。だめだめ。こんなもう過ぎたことをいつまでもうびじび言つてぢや。ぢやんと参謀らしく毅然としてないと」

一先ず、昔の件については頭の隅に追いやつておこう。深呼吸をし、作戦モードへと脳内をシフトさせる。さて、まずはどう攻めようかしらね……。

「ふふ、なんか面白くなつてきぢやつた」

「んまだから愛斗に『戦闘狂』なんて呼ばれぢやうのかしら。まあ、なんかノベルチックでアタシは気に入つてゐるからいいんだけど。」

『現在、Aクラス被害少數。対するFクラスは被害皆無です。押されています』

無線から佐藤さんの声が聞こえてくる。押されている、か……おそらく、あのバカが能力総動員しているんでしょうね。いいわ、愛斗。そつちが全力で抗うつて言つなら……

「まずはアタシが、その薄っぺらい淡い幻想を、完膚なきまで叩き潰してあげるわよ」

アタシの口元には自然と楽しそうな笑みが浮かんでいた。

第一十一問 MP3プレイヤーって、俺の周りじゃあまり知られていないんだね

感想、お待ちしています

## 第一十三問 変身能力の神髄（前書き）

こんにちば。最近「F a t e」にはまつているふゆいです。  
おもしろいですよね、フェイト。物語の難解さが毎回毎回楽しみ  
です。

さて、今回は愛斗が大活躍……かな?  
それではお楽しみください。

## 第一二三問 変身能力の神髄

N o S i d e

開戦から十分経過。

Fクラス先鋒兼最前線防衛部隊を率いる五月雨愛斗は、何故か激しく士気が高いAクラス相手に苦戦を強いられていた。

「横溝はダッシュで雄一に報告！ 柴崎は部隊の半分連れて一時後退しろ！ 残りの半分は俺と須川から離れるなよ？」

『り、了解！』

「ちつ、もうちょっと楽かと思っていたんだが……流石は天下のAクラス。そう簡単に勝たせちゃあくれねえか」

Aクラス先遣部隊のあまりに突然すぎる突撃作戦。予想外の事態に虚をつかれたFクラス部隊だったが、いち早く気を取り直した愛斗の咄嗟の指示によつて、戦死者を出すことだけは免れていた。

戦力確保のために部隊の半分を本隊へと退却させたことで現在の戦力は当初の半分以下。最高戦力を誇る愛斗と須川に頼り切つた前線部隊にとつては大きなダメージである。

現在は部隊員を中心に囮んで守りつつ、点数の高い生徒を中心にして迎撃にあたつているところだ。

『Fクラスだからって油断しちゃダメよ！ 絶対に一人以上のチー  
ムで殲滅してね！』

「優子のヤツ……なかなかエグイ」としてくれんじゃねーかよ……』

人數的には十人ほどと全戦力の四分の一にも満たない員数だが、個人個人の点数がFクラスに比べ圧倒的に高い。孤立した生徒をタコ殴りにしてもなんとか倒せるという状況にもかかわらず、複数でかかつてこられていれば愛斗達の点数も風前の灯だ。

そんな彼らの心境を知つてか知らずか、Aクラスの猛攻はますます激しさを増していく。

『喰らいなさい五月雨愛斗！』

『大将格の首、もらつたあ

？』

そして、二人組の生徒が満を持したように愛斗へ召喚獣を突貫させてくる。彼らとて愛斗の強さを知つてはいるはずだろうが、点数の減少しているこのタイミングならば倒せると踏んだのだろう。まさに多勢に無勢。劣勢の状況に追い詰められながらも、愛斗は取り乱すことなく、一度舌打ちをした後に、行動を開始した。

「……『素に銀と鉄。 础に石と契約の大公。 祖には我が大師シ  
ュバインオーラグ。

降り立つ風には壁を。 四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に  
至る三叉路は循環せよ

満たせ。満たせ。満たせ。満たせ。満たせ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

セット

Anfang  
告げる

告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。  
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従つならば應えよ  
誓いを此処に。

我は常世總ての善と成る者、  
我は常世總ての惡を敷く者。  
汝三大の言靈を纏う七天、

抑止の輪より來たれ、天秤の守り手よ

！』『変身？』『

愛斗を中心にして、魔方陣のようなものがリノリウム製の床に広  
がる。巻き起こる風。吹き出す眩い光。

『な、なんだ！？』  
『なによ、これ

』..

動搖の色を見せるAクラス生徒達。それもそのはず。今までの愛  
斗の能力使用に、こんな大掛かりな展開はなかつたのだから。  
廊下中に沈黙が走る中、ゆっくりと光が晴れる。

「…………問おう」

蒼を基調にしたドレスのような服の上に複雑な模様が走つた銀色  
の鎧を装着し、右手には金主体の宝剣が。

「…………貴方が」

輝かんばかりの金髪は後頭部で括つてある。そしてなによりも目  
を引くのはおそらくそのすば抜けた端正な顔立ちである。

そう、彼女こそ、

「私の契約者か？」<sup>マスター</sup>

『**剣の騎士**』<sup>セイバー</sup>の位を冠する者。イングランドの英雄、アーサー王だ。

『『『……リアルセイバーキタ

？』』』

Fクラス生徒全員が感嘆の絶叫をあげる。基本的に女に飢えているFクラスでは、こういった創作キャラの知名度が段違いである。そのため、彼らは空想と現実が混ざった今回の変身に対して激しい喜びを見せていた。

『ひ、怯むな！ 所詮はFクラスなんだ！』

『突撃 ？』

『あ、コラ…待ちなさい！』

能力を使用させてしまったことから起こる焦りからか、我先にとセイバー【愛斗】に突っ込んでいくAクラス生徒達。部隊長である優子の制止の声も空しく、彼らは各自の武器を構えて召喚獣を突貫させる。

頭上に表示されるお互いの点数。

|       |       |    |      |        |
|-------|-------|----|------|--------|
| 『Fクラス | 五月雨愛斗 | VS | Aクラス | 生徒八人   |
| 日本史   | 180点  | VS |      | 平均270点 |

当初は450点ほどだった点数も、激戦の中減少し続け遂に200点未満に。対するAクラスは皆が200点台中盤。その中でも一人が300点越しという圧倒的戦力差。

「……確かに、今までの【愛斗】だつたらこの劣勢を乗り越えることも難しかつたでしよう。総じておよそ100点超の戦力差。勝利法を模索することも馬鹿馬鹿しくなつていていたでしょうね」

「……確かに、【愛斗】は【約束された勝利の剣】を構えるセイバー【愛斗】。彼女の動きに連動して、召喚獣も同じように剣を構えた。心なしか、その顔には笑みのようなものが見て取れる。彼女の奇妙な言動にも気付いていないのか、次々と攻撃を仕掛けたAクラス部隊。しかしセイバー【愛斗】は【約束された勝利の剣】を巧みに操り、全ての攻撃をいなしていく。

『なつ！？』  
『嘘でしょ……この人数なのよ！？ なんで避けられるのよ！？』  
『随分と動搖している様子ですね。……まあ、私みたいな雑魚に一度も痛手を負わせられないのが悔しいのは分からぬでもありますなが……貴方は少し思い違いをしていらっしゃるようです』  
『ど、どういう意味よ！？』

繰り返される剣戟の応酬。圧倒的戦力差にも拘らず、Aクラス生徒達の点数が見る見るうちに減少していく。それに比べてセイバー【愛斗】の点数は一切の揺らぎを見せない。

「……一つ質問をしましょう。彼、【五月雨愛斗】の【変身】には複数の段階があるのをご存知ですか？」  
『知らねえよ……そんなこと！…』

「そうですか。それならば、自分自身の目で実際に確かめられた方

がいいでしょう。普段の彼が使用する【第一段階】ファーストエディションや【第二段階】セカンドエディションとは戦力も召喚獣運動率も完全に段違いである、【第三段階】サードエディションの威力を

剣を動かす手を緩め、ずさつと後退するセイバー【愛斗】。しかし逃げるわけではないらしい。彼女は肩越しに【約束された勝利の剣】を掲げると、叫んだ。

「【エクス……カリバー？】」

瞬間。

【約束された勝利の剣】から黄金の光が放たれ、廊下一帯を包み込む。その場にいる全員が混乱の感情に流される中、セイバー【愛斗】は確固たる意志で、大きく剣を振るつた。

光の奔流に飲み込まれ、為す術もなくAクラス生徒達の召喚獣が消滅していく。

そして光が晴れた時には優子とFクラス生徒を除いて、全召喚獣が戦死してしまっていた。

|       |       |    |      |      |
|-------|-------|----|------|------|
| 『Fクラス | 五月雨愛斗 | VS | Aクラス | 生徒八人 |
| 日本史   | 50点   | VS | 0点   | 』    |

「戦死者は補習

？

『い、いやあ！』

『助けてくれー？』

風のように現れた鉄人こと西村宗一に次々と補習室へと連行されていく生徒達。いくら優等生であっても戦争で戦死してしまえば強制的に補習となってしまうのがこの戦争のしきたりである。それに乗っ取り、Aクラス先遣部隊は部隊長の優子を残して連れ去られて

しました。

「くつ……ここまでの戦力差があるなんて……！」

「さて……残るはあなただけですが、まだ戦いますか？」

完全に委縮してしまっている優子に、聖剣を向けながらセイバー【愛斗】が静かに問う。その言葉に優子は一瞬たじろいだものの、圧倒的劣勢を読み取ったのか、捨て台詞もなしに本隊へと引き返していった。

『『『や……やったあ

？』』』

Aクラスを抜けたという夢のような状況に、Fクラス部隊がお互いに手を取り合って激しく喜び合つ。最低クラスが最強クラスの一角を相手に犠牲ゼロで生き残つたのだ。そう考えると彼らの喜びようもうつなずける。

歓喜乱舞の仲間達を、流れに乗り遅れてしまつたセイバー【愛斗】が穏やかな笑みを浮かべて見守る。

しかし……、

「……くつ

「？ あ、五月雨！ どうしたんだ！」

彼女はいきなり膝から崩れ落ちてしまつた。幸い剣を杖代わりにして、倒れることは防いでいるが、今にも意識を失つてしまいそうなほど真っ青な顔で身体をわずかに震わせている。

隣に立つていた須川は、いきなり異変を起こした仲間の下へと思わず駆け寄つていた。

心配する須川に、彼女は引き攣りながらも笑顔を返す。

「「」、この『第三段階』はなかなか体力と精神力を使うものでして……その上【約束された勝利の剣】まで使つてしまつたので、形態維持が困難になつてきてしまつました……。普段ならまだ維持できるはずなんですねけどね……」ここにきて【愛斗】の体調不良が響いてしまつたようですね」

「体調不良……風邪を誤魔化した結果つてことか」

「はい……。残念ながら私はここまでのようですね。もし【変身】が解けてしまつたら……その時は、彼にお詫びをお願いします……」

「え……？ お前は【五月雨】だろ？ なんで本人が本人に伝言を……いつたい、どうこうこと……」

「詳しく述べは彼に聞くことをお勧めしますよ……。…………そろそろ時間のようですね。それでは、私は一度【解除】されるとします。……【変身解除】

「ちよ、おこー！」

須川の叫びも空しく、セイバーは光の粒子となつて消えてしまつた。後には、わずかに息を荒げ、火照つたような顔色で倒れ込んでいる愛斗がいるだけ。どうやら『氣』を失つてしているようだ。

「いつたい、なにがどうなつてるつていうんだ……」

そんな彼の呟きは、歓喜に酔いしれる仲間達に『届く』ことなく静かに空中へと消えていった。

第一二三問 変身能力の神髄（後書き）

感想、お待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9450p/>

バカとテストと万能演人（オールアクター）

2011年11月17日19時58分発行